

二葉町遺跡発掘調査報告書

第14～21次調査

-新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う-

2008年3月

神戸市教育委員会

二葉町遺跡発掘調査報告書

第14～21次調査

-新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う-

2008年3月

神戸市教育委員会

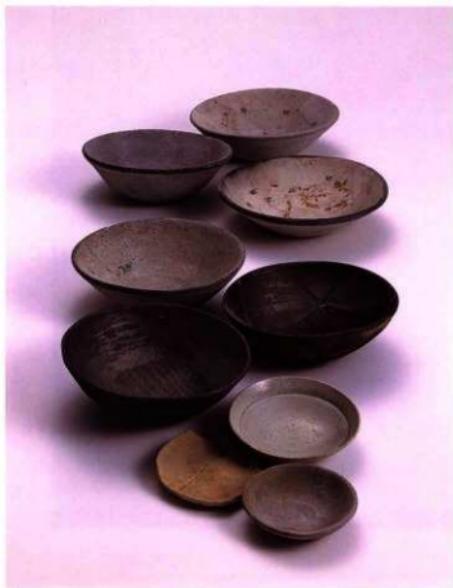


調査地遠景航空写真（南から）



調査地遠景航空写真（西から）

巻頭カラー図版2



二葉町6丁目 SE317出土遺物



二葉町6丁目 磁器製定量鉢

序

阪神・淡路大震災は神戸市長田区に甚大な被害をもたらしました。古いまちの風景は失われ、再開発事業、区画整理事業により新しいまちが生まれています。

大阪湾の豊かな恵みと肥沃な土地、温暖な気候、交通の要衝という条件に恵まれた長田には、古くから生活が営まれてきました。はるか昔からの生活は有形・無形の多くの文化財を現在に伝えています。しかし生活そのものの痕跡は埋蔵文化財として土の中に残されており、発掘調査を通してしか私たちの目に触れません。

埋蔵文化財は、文書に記されない地域の歴史を雄弁に物語る資料であり、市民にとって欠くことのできない財産です。地域の歴史を知ることは、地域を愛する心を育むことにつながるものと思います。やむを得ず失われる埋蔵文化財を、調査によりその内容を把握し、成果を広く公表し、多くの方々に活用していただき、後世に伝えることが、今に生きる私たちの務めだと考えます。

二葉町遺跡の発掘調査では、平安時代から鎌倉時代にかけての集落跡を検出し、海に近いこの地域で繰り広げられた当時の人々の多様な生活の跡が明らかになりました。

これらの調査成果が地域の歴史にとどまらず、平安時代から鎌倉時代にかけての具体的な地方像を知る上でとても重要な資料になることでしょう。今後様々な形で活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、本調査が関係諸機関及び地域住民の皆様の多大なるご理解とご協力によって、長期間にわたり実施することができましたことに、厚くお礼を申し上げます。

平成20年3月

神戸市教育委員会

例　　言

1. 本書は、神戸市長田区久保町5丁目・6丁目、二葉町6丁目において、平成12年度から平成19年度にかけて発掘調査を実施した、二葉町遺跡第14次～第21次の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 当調査は、新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴うもので、神戸市教育委員会・神戸市体育協会が神戸市都市計画総局（現在）の委託を受け実施した。調査の組織は本文に記した。
3. 本書で使用した地図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「神戸首部」・「神戸南部」、神戸市発行の2,500分の1地形図「大橋・長田港」を使用した。
4. 本書に用いた方位・座標は平面直角座標系第V系で、標高は東京湾巾等潮位（T.P.）で表示した。
5. 現地調査に係る遺構の実測、写真撮影は、本文に記した各調査担当者が行い、本書の遺構の記述については調査担当者の原稿を基に東喜代秀が加筆した。遺構のトレースは東が行った。遺物の実測は、東と淺谷誠吾が行い、遺物のトレース及び遺物に関する記述は黒田恭正が行った。また、木質遺物の保存科学調査と記述は中村大介が行った。本書の編集は、東が担当した。
6. 遺物写真是、神戸市埋蔵文化財センターにおいて独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所牛嶋茂氏の指導の下、西大寺フォト杉本和樹氏が撮影した。
7. 下記の作業については委託を行った。

航空写真測量	㈱ジオテクノ関西、㈱GEOソリューションズ
古環境の調査	パリノ・サーヴェイ㈱
木製品樹種同定	㈱パレオ・ラボ、パリノ・サーヴェイ㈱
8. 現地での発掘調査の実施については、神戸市都市計画総局新長田南再開発事務所（現在）の協力を得た。
9. 発掘調査で出土した遺物並びに図面・写真類は、神戸市教育委員会が神戸市埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第1章 はじめに	
第1節 調査にいたる経過と調査組織	1
第2節 遺跡の位置と歴史的環境	4
第2章 調査の概要	
第1節 既往の調査概要	7
第2節 基本層序	9
第3章 久保町5丁目の調査	13
第4章 久保町6丁目の調査	22
第5章 二葉町6丁目の調査	63
第6章 二葉町遺跡古環境の調査	98
第7章 二葉町遺跡出土木製品の樹種同定調査	
第1節 第15次調査	107
第2節 第16次～第20次調査	122
第8章 まとめ	139

挿 図 目 次

図1	二葉町遺跡位置図	1	図43	SB325出土遺物実測図	37
図2	二葉町遺跡と周辺の遺跡	5	図44	SE201平面・断面図	38
図3	調査地位置図	7	図45	SE201出土遺物実測図	38
図4	基本層序配置図	9	図46	SE304平面・断面図	38
図5-1	基本土層断面図(1)	11	図47	SK304出土遺物実測図	38
図5-2	基本土層断面図(2)	12	図48	SE305平面・断面図	39
図6	久保町5丁目遺構平面図	13	図49	SE305出土遺物実測図	39
図7	NR101出土遺物火薙図(1)	14	図50	SE306平面・断面図	40
図8	NR101出土遺物実測図(2)	14	図51	SE306出土遺物実測図(1)	40
図9	SB301平面・断面図	15	図52	SE306出土遺物実測図(2)	40
図10	SE301平面・断面図	16	図53	SE307平面・断面図	41
図11	SE301出土遺物実測図(1)	17	図54	SE308平面・断面図	42
図12	SE301出土遺物実測図(2)	18	図55	SE308出土遺物実測図	42
図13	SE301出土遺物実測図(3)	19	図56	SE309平面・断面図	43
図14	SE302平面・断面図	20	図57	SE311平面・断面図	43
図15	SK301平面・断面図	20	図58	SE312平面・断面図	43
図16	SK302平面・断面図	21	図59	SE312出土遺物実測図	44
図17	SK303平面・断面図	21	図60	SE313平面・断面図	44
図18	SP301・302出土遺物実測図	21	図61	SE314出土遺物実測図	44
図19	ST301平面・断面図	21	図62	SE314平面・断面図	45
図20	久保町6丁目遺構平面図	22	図63	SD301出土遺物実測図	45
図21	SB311平面・断面図	23	図64	SD302出土遺物実測図	45
図22	SB311出土遺物火薙図	24	図65	SD303出土遺物実測図	45
図23	SB312平面・断面図	24	図66	SD304出土遺物実測図	45
図24	SB313平面・断面図	25	図67	SD305出土遺物実測図	46
図25	SB313北溝出土遺物実測図	25	図68	SD307出土遺物実測図	46
図26	SB314平面・断面図	26	図69	SD309出土遺物実測図	46
図27	SB314出土遺物実測図	26	図70	SD310出土遺物実測図(1)	46
図28	SB315平面・断面図	27	図71	SD310出土遺物実測図(2)	46
図29	SB316平面・断面図	28	図72	SK304平面・断面図	47
図30	SB317平面・断面図	29	図73	SK304出土遺物実測図	47
図31	SH317出土遺物実測図	29	図74	SK305平面・断面図	47
図32	SB318平面・断面図	30	図75	SK306平面・断面図	48
図33	SB318出土遺物実測図	30	図76	SK307平面・断面図	48
図34	SB319平面・断面図	31	図77	SK307出土遺物実測図	48
図35	SB319出土遺物実測図	31	図78	SK308平面・断面図	49
図36	SB320平面・断面図	32	図79	SK309平面・断面図	49
図37	SB321平面・断面図	33	図80	SK310平面・断面図	49
図38	SI321出土遺物実測図	33	図81	SK310出土遺物実測図	49
図39	SB322平面・断面図	34	図82	SK311平面・断面図	50
図40	SB323平面・断面図	35	図83	SK311出土遺物実測図	50
図41	SB324平面・断面図	36	図84	SK312出土遺物実測図	50
図42	SB325平面・断面図	37	図85	ST302平面・断面図	51

図86	ST302出土遺物実測図	32
図87	SP305出土遺物実測図	52
図88	SP306出土遺物実測図	52
図89	SP307出土遺物実測図	52
図90	SP308出土遺物実測図	52
図91	SP309出土遺物実測図	53
図92	SX301出土遺物実測図	53
図93	SX305出土遺物実測図	53
図94	SX305平面・断面図	54
図95	SX306平面・断面図	54
図96	SX307平面・断面図	54
図97	SX308平面・断面図	54
図98	SX309平面・断面図	55
図99	SX309出土遺物実測図	55
図100	SX310～SX312平面・断面図	56
図101	SX310～SX312完形平面図	57
図102	SX310出土遺物実測図	57
図103	SX312出土遺物実測図(1)	58
図104	SX312出土遺物実測図(2)	59
図105	SX313平面・断面図	59
図106	SX314出土遺物実測図	59
図107	久保町6丁目地区包含層出土遺物実測図(1)	60
図108	久保町6丁目地区包含層出土遺物実測図(2)	61
図109	二葉町6丁目遺構平面図	62
図110	SB322平面・断面図	63
図111	SB322出土遺物実測図	64
図112	SB323出土遺物実測図	64
図113	SH324出土遺物実測図	64
図114	SB323平面・断面図	65
図115	SB324平面・断面図	66
図116	SB325平面・断面図	67
図117	SB326平面・断面図	68
図118	SB326出土遺物実測図	68
図119	SB327平面・断面図	69
図120	SB327出土遺物実測図	69
図121	SB328平面・断面図	70
図122	SB328出土遺物実測図	71
図123	SB329出土遺物実測図	71
図124	SB329平面・断面図	71
図125	SE315平面・断面図	72
図126	SE315出土遺物実測図(1)	73
図127	SE315出土遺物実測図(2)	74
図128	SE316平面・断面図	75
図129	SE316出土遺物実測図(1)	76
図130	SE316出土遺物実測図(2)	77
図131	SE316出土遺物実測図(3)	78
図132	SE317平面・断面図	79
図133	SE317出土遺物実測図(1)	80
図134	SE317出土遺物実測図(2)	82
図135	SE317出土遺物実測図(3)	83
図136	SE317出土遺物実測図(4)	84
図137	SE318平面・断面図	85
図138	SE318出土遺物実測図	85
図139	SE319平面・断面図	86
図140	SE320平面・断面図	87
図141	SE320出土遺物実測図(1)	88
図142	SE320出土遺物実測図(2)	88
図143	SK203平面・断面図	89
図144	SK303平面・断面図	89
図145	SK303出土遺物実測図	90
図146	SK304平面・断面図	90
図147	SK305平面・断面図	90
図148	SK306平面・断面図	91
図149	SK307平面・断面図	91
図150	SK308平面・断面図	92
図151	SK308出土遺物実測図	92
図152	SK309平面・断面図	92
図153	SK310平面・断面図	92
図154	SK311平面・断面図	92
図155	SK312平面・断面図	93
図156	SK313平面・断面図	93
図157	SK314平面・断面図	93
図158	SK315出土遺物実測図	93
図159	ST304平面・断面図	94
図160	ST304出土遺物実測図	94
図161	SP303出土遺物実測図	95
図162	SP304出土遺物実測図	95
図163	SP305出土遺物実測図	95
図164	SP306出土遺物実測図	95
図165	SP307出土遺物実測図	95
図166	二葉町6丁目地区包含層出土遺物実測図	96
図167	分析サンプルの堆積層柱状図と分析実施層位位置図	99
図168	A-1, B-1, C-2植物遺体群集組成	103
図169	A-2植物珪酸体群集の層位分布	103

表 目 次

表1	調査一覧表	8
表2	花粉分析結果	101
表3	植物珪酸体分析結果	102
表4	二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧(1)	112

表5	二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧 (2).....	113
表6	二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧 (3).....	114
表7	二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧 (4).....	115
表8	二葉町遺跡SE301井戸周囲下層・最下層出土	116
表9	二葉町遺跡SE301井戸周囲下層・最下層出土	116
	曲物などの樹種構成.....	116
表10	樹種同定結果 (1).....	124
表11	樹種同定結果 (2).....	125
表12	樹種同定結果 (3).....	126
表13	第20・1次調査の遺構・器種別種類構成.....	129

挿図写真目次

挿図写真1	二葉町6丁目地区出土器物測定量錐.....	97
挿図写真2	二葉町遺跡13次出土木製品樹種 (1).....	117
挿図写真3	二葉町遺跡15次出土木製品樹種 (2).....	118
挿図写真4	二葉町遺跡15次出土木製品樹種 (3).....	119
挿図写真5	二葉町遺跡15次出土木製品樹種 (4).....	120
挿図写真6	二葉町遺跡15次出土木製品樹種 (5).....	121
挿図写真7	木材 (1).....	133
挿図写真8	木材 (2).....	134
挿図写真9	木材 (3).....	135
挿図写真10	木材 (4).....	136
挿図写真11	木材 (5).....	137
挿図写真12	木材 (6).....	138

巻頭写真図版目次

巻頭カラー図版1	調査地遺景航空写真.....
巻頭カラー図版2	二葉町6丁目 SB317出土遺物・磁器測定量錐.....

写真図版目次

図版1	調査地航空写真 (俯瞰モザイク).....
図版2	久保町6丁目地区 調査区航空写真 (俯瞰モザイク).....
図版3	二葉町6丁目地区 調査区航空写真 (俯瞰モザイク).....
図版4	久保町5丁目 NR101 (南から)
	久保町5丁目 NR101断面 (南から)
	久保町5丁目 調査区中央部全景 (東から)
	久保町5丁目 SB301 (東から)
図版5	久保町5丁目 SE302 (南から)
	久保町5丁目 SE303 (南から)
	久保町5丁目 調査区南西部全景 (北から)
	久保町5丁目 ST301 (西から)
図版6	久保町6丁目 SB311 (西から)
	久保町6丁目 SB313 (南から)
図版7	久保町6丁目 SB317 (北から)

久保町6丁目	SB318 (北から)
久保町6丁目	調査区中央部全景 (北から)
図版8	久保町6丁目 SB321 (西から)
	久保町6丁目 SB312 (東から)
	久保町6丁目 SB314 (南から)
	久保町6丁目 SB315・SE307 (西から)
	久保町6丁目 SB320・SH321 (北から)
図版9	久保町6丁目 SE305・SE306 (南から)
	久保町6丁目 SE306 (南から)
	久保町6丁目 SE308 (南から)
	久保町6丁目 SE310 (東から)
	久保町6丁目 SE311 (東から)
	久保町6丁目 SE312 (西から)
図版10	久保町6丁目 SE313 (南から)
	久保町6丁目 SK306 (南から)
	久保町6丁目 SK307 (東から)
	久保町6丁目 SK309 (南から)
	久保町6丁目 SK310 (南から)
	久保町6丁目 SK311 (北から)
図版11	久保町6丁目 ST302付近全景 (北から)
	久保町6丁目 ST302 (北から)
	久保町6丁目 ST302遺物出土状況 (東から)
図版12	久保町6丁目 SX305～SX307 (南から)
	久保町6丁目 SX309 (東から)
	久保町6丁目 SX310～SX312 (東から)
	久保町6丁目 SX313 (西から)
図版13	二葉町6丁目 調査区北西全景 (東から)
	二葉町6丁目 SB323とSE315～SE318 (南から)
	二葉町6丁目 SR328丸半 (南から)
図版14	二葉町6丁目 SB328西蒲柱穴 (南から)
	二葉町6丁目 SB322 (南から)
	二葉町6丁目 SB329 (南から)
	二葉町6丁目 SE315 (東から)
	二葉町6丁目 SE316 (東から)
図版15	二葉町6丁目 SE320 (西から)
	二葉町6丁目 SE317 (東から)
	二葉町6丁目 SE318 (北から)
	二葉町6丁目 SE319 (南から)
	二葉町6丁目 SK203 (東から)
図版16	二葉町6丁目 SK306 (東から)
	二葉町6丁目 SK308 (西から)
	二葉町6丁目 ST302 (北から)
図版17	出土遺物 2・4・5・7～10
図版18	出土遺物 11～13・31・32・35
図版19	出土遺物 38・41～43・46・47・49・50

- 同版20 出土遺物 51・57・61・62・64・69・70・73
- 同版21 出土遺物 75～80・83・84・SK307
- 同版22 出土遺物 85～92
- 同版23 出土遺物 ST302・95・96・101～103・105
- 同版24 出土遺物 129～132・134・136
- 同版25 出土遺物 143・151・152・180～183・185・187・
189・190・191・193
- 同版26 出土遺物 SH315・202・206・211・213
- 同版27 出土遺物 SE316・207～210・212・226・228・239
- 同版28 出土遺物 227・229～235・240～242
- 同版29 出土遺物 SE317・267・268・272・276
- 同版30 出土遺物 277・280・282・286～288・291～294
- 同版31 出土遺物 SE318・324・328～330・333・335・338
- 同版32 出土遺物 339・341～352・354～360
- 同版33 出土遺物 ST304・365・366・373～377
- 同版34 SH301出土木質遺物
(17) 上端部分
同左中央付近
- 同版35 SE301出土曲物 (26)
同左 (27)
同上 (28)
同左 (29)
- 同版36 SH306出土横樋 (60)
SX312出土木質遺物 (右下 : 137)
SE315・SH317出土木質遺物
(左半 : SE317、右半 : SE315)
- 同版37 SE316出土木質遺物
同上出土木皿
SH317出土曲物 (312)
- 同版38 SE317出土曲物 (313)
同左 (314)
同上横樋 (322)
同左蓋 (左より315～317、319、318、320、321)

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過と調査組織

(1) 調査に至る経過

二葉町遺跡がある、長田区腕塚町・久保町・二葉町周辺は、古くからの商業区域であり、大正筋商店街、六間道商店街などの多くの商店街が碁盤の目状に存在し、古い木造家屋が密集する地区であった。

平成7年1月、阪神淡路大震災の発生により多くの建物が倒壊、焼失し、当地区も甚大な被害を蒙り、多数の住民が住む家を失い、仮設住宅での生活を余儀なくされた。

その後、当地区を対象に新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業として都市計画決定がなされるに至り、周知の埋蔵文化財包蔵地である二葉町遺跡が事業区域内に含まれるため、対象地について試掘調査を実施し、遺物包含層と遺構面が遺存していることを確認した。その結果を踏まえ、神戸市都市計画総局新長田南再開発事務所(現在)と協議を実施し、建物の除却が済んで調査が可能な部分について、全面発掘調査を順次実施することになった。調査は平成8年度より実施し、完了した範囲については再開発ビルの建設が着工され、平成19年度現在、久保町6丁目の一部を残して発掘調査が完了している。



図1 二葉町遺跡位置図

(2) 調査体制

発掘調査は神戸市文化財保護審議会の指導を得て、下記の組織で実施した。

神戸市文化財保護審議会委員（史跡・考古担当）

榎上 重光 前神戸女子短期大学教授（～平成19年7月14日）

工樂 普通 ユネスコアジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長
（～平成14年度）

大阪府立狹山池博物館館長（平成13年度～）

和田 晴吾 立命館大学文学部教授

教育委員会事務局	平成12年度	平成13年度	平成14年度
教 育 長	木村良一	木村良一	西川和機
社会教育部長	水田裕次	岩畔法夫	岩畔法夫
教育委員会参考事 (文化財課長事務取扱)	—	—	—
文化財課長	大勝俊一	桑原泰豊	桑原泰豊
社会教育部主幹	渡辺伸行	渡辺伸行	渡辺伸行
埋蔵文化財調査係長	丹治康明	丹治康明	丹治康明
文化財課主査	宮本郁雄・丸山潔・菅本宏明	宮本郁雄（～12月） 丸山潔・菅本宏明・千種浩	丸山潔・菅本宏明・千種浩
事務担当学芸員	山口英正	斎木巖	内藤俊哉
遺物整理担当学芸員	谷 正俊	黒田恭正	関野 豊
保存科学担当学芸員	千種 浩・中村大介	中村大介	中村大介
調査担当学芸員	—	—	—

(財)神戸市体育協会	平成12年度	平成13年度	平成14年度
会 長	篠山幸俊	篠山幸俊	矢田立郎
副 会 長	鞍本昌男	鞍本昌男	鞍本昌男
同	木村良一・山田隆・家治川農	木村良一・山田隆・家治川農	—
相 談 役	加茂川守	—	—
常 務 理 事	静観圭一	梶井昭武	梶井昭武
参 事	財田美信	—	—
総 務 課 長	前田豊晴	前田豊晴	谷川博志
総 務 課 主 幹	奥田哲通	奥田哲通（～8月） 宮本郁雄（1月～）	宮本郁雄
事 業 係 長	瀬田吉則	—	—
総 務 係 長	—	松田 保	—
総 務 課 主 査	丸山 潔・菅本宏明	丸山 潔・菅本宏明	丸山 潔・菅本宏明
事務担当学芸員	斎木 巖	川上厚志	池田 輝
調査担当学芸員	浅谷誠吾・阿部功	池田 穎・石鳥三和	谷 正俊・川上厚志

平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
西川和機	小川雄三	小川雄三	小川雄三	小川雄三
高橋英比古	高橋英比古	高橋英比古	大谷幸正	黒住卓久
桑原泰豊	桑原泰豊	桑原泰豊	柏木一孝	柏木一孝
—	—	—	—	—
渡辺伸行・宮本郁雄	渡辺伸行・宮本郁雄	渡辺伸行・丸山潔	渡辺伸行・丸山潔	渡辺伸行・丸山潔
丹治康明	丹治康明	丹治康明	丹治康明	千種浩
丸山潔・菅本宏明・千種浩	丸山潔・菅本宏明・千種浩	菅本宏明・安田滋	安田滋・山本雅和	丹治康明・安田滋・山本雅和
内藤俊哉	東喜代秀	東喜代秀	前田佳久・阿部敬生	阿部敬生・中谷正
西岡誠司	谷正俊	—	—	黒田恭正
中村大介	中村大介	中村大介	中村大介	中村大介
—	—	—	浅谷誠吾	—

平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
矢田立郎	矢田立郎	家治川豊	家治川豊	表孟宏
矢野栄一郎	矢野栄一郎	矢野栄一郎	水田裕次	水田裕次
—	—	—	—	—
—	—	—	—	—
野浪建作	野浪建作	野浪建作	額弘四郎	額弘四郎
—	—	—	—	—
谷川博志	横関勇	横関勇	横関勇	横関勇
—	—	—	—	—
—	—	—	—	—
—	—	—	—	—
菅本宏明	菅本宏明	菅本宏明	山本雅和	山本雅和
中谷正	—	—	—	—
黒田恭正・石島三和	黒田恭正	阿部敬生	東喜代秀	東喜代秀

第2節 遺跡の位置と歴史的環境

二葉町遺跡は、六甲山系から流れ出る妙法寺川と茹藪川によって形成された沖積地の自然堤防上に立地する遺跡である。調査地は、北西から南東へごく緩やかに傾斜する地形で、およそ250mに及ぶ調査地の北端から南端での比高差が約1.5mを測る。現在の海岸線から北へ約400～500mの場所に位置している。

歴史的環境

縄文時代

二葉町遺跡の歴史的環境を、周辺にある主要な遺跡とともに略述する。

茹藪川流域の長田神社境内遺跡や三番町遺跡、五番町遺跡で縄文時代後期から晩期の遺物が出土し、土坑などの遺構が認められる。

弥生時代

妙法寺川流域の戎町遺跡で、弥生時代前期の集落が確認されている。そこでは小区域の水田や木製品の貯蔵施設と思われる円形杭列遺構などが見られる。中期になると堅穴住居などの遺構や多量の土器、石器などの遺物が出土し、地域の拠点的集落を形成する。また戎町遺跡の集落の南には、墓域が認められ、方形周溝墓が数基確認されている。大開遺跡は旧瀬川流域に位置するが、弥生時代前期の環濠集落が確認されている。後期になると長田神社境内遺跡、若松町遺跡、御藏遺跡、松野遺跡など遺跡数が増加し、集落の形成が活発に行われるようになる。

古墳時代

古墳時代前期には、鷹取町遺跡、若松町遺跡、御藏遺跡、三番町遺跡、長田本庄町遺跡などで集落が形成される。中期になると松野遺跡、神楽遺跡、上沢遺跡で集落が認められる。松野遺跡では、豪族の居館と思われる掘立柱建物群と横列が検出され、神楽遺跡では韓式系土器や算盤・玉形滑石製紡錘車が出土し、上沢遺跡では大槻造建物、韓式系土器、多量の滑石製品が検出されている。後期になると鷹取町遺跡、大橋町遺跡の他、近年の調査で、柱穴が一辺1m近い方形の掘形を呈する、總柱の掘立柱建物が確認された水笠遺跡があげられる。また古墳としては、丘陵上に得能山古墳、会下山二本松古墳、夢野丸山古墳の前期古墳が築造されている。中期では、茹藪川河口付近に存在したとされる念仏山古墳は全長約200mの大型前方後円墳であったと言われている。後期になると丘陵上に池田古墳群があげられるが、その実態は明らかでない。

奈良時代以降

奈良時代になると山陽道が築造され、地域での陸上交通が充実していく。奈良時代から平安時代にかけて大山町遺跡、神楽遺跡、御藏遺跡、上沢遺跡、長田野田遺跡、室内遺跡などがあげられる。大田町遺跡は、山陽道沿いに位置していること、多数の縁軸・灰釉陶器の出土と掘立柱建物群の検出により、須磨駅家の可能性が高いと考えられている。御藏遺跡も掘立柱建物群が検出され、この地域の有力な集落であると考えられている。上沢遺跡では、同時期の掘立柱建物とともに、井籠組の非戸棒をもつ戸内から正倉院御物と同様の銅鏡が出土しており、都との関係が窺える。やや時代が遡るが、室内遺跡は白鳳時代の寺院跡と考えられている。平安時代末になると、平清盛により大輪田の泊が修築され、その後から遺跡数は増加していく。平安時代末から鎌倉時代にかけての集落遺跡としては、二葉町遺跡、戎町遺跡、若松町遺跡、松野遺跡、長田野田遺跡、御藏遺跡、長田神社境内遺跡、上沢遺跡、兵庫津遺跡などがあげられる。これらの集落は、掘立柱建物、井戸、耕作地により構成されている。

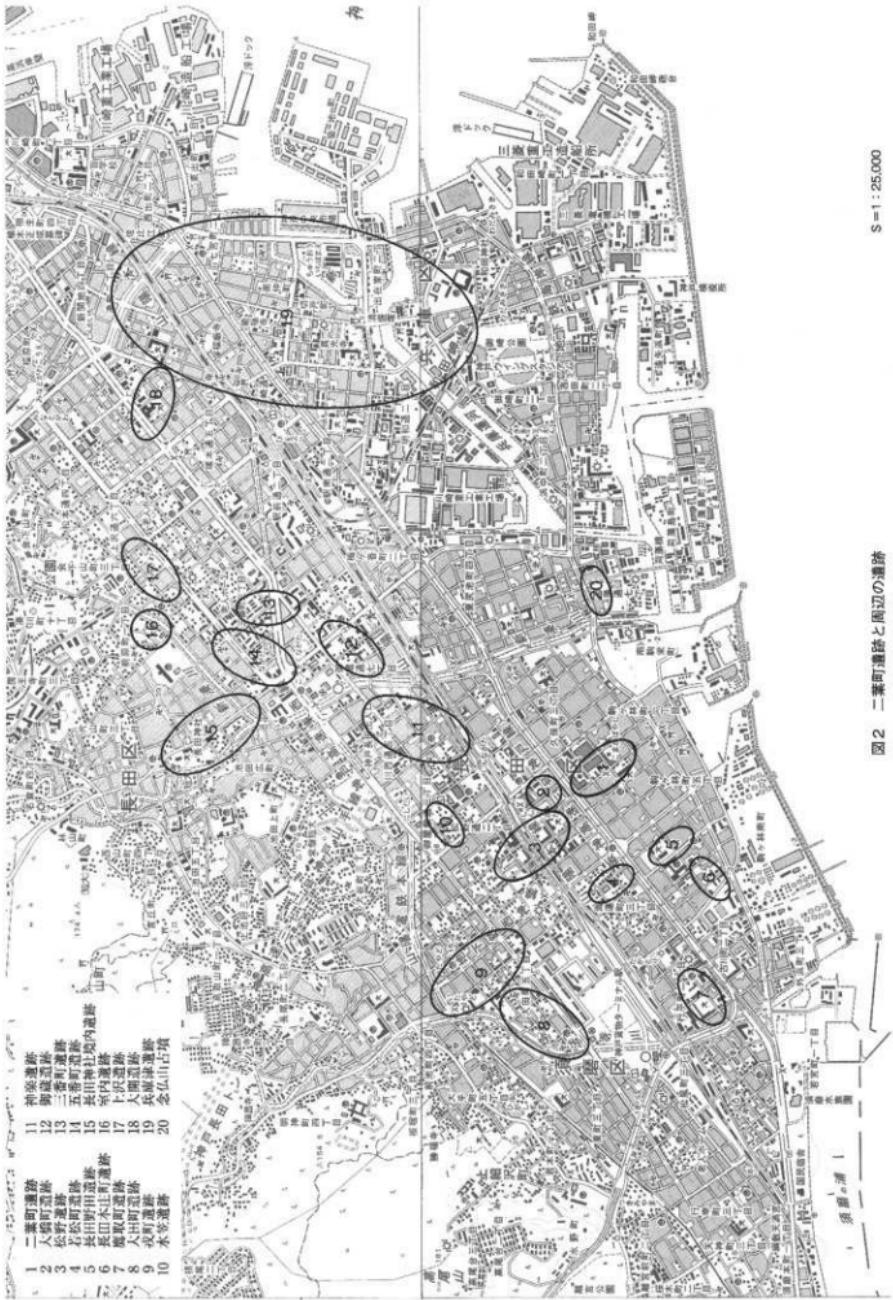
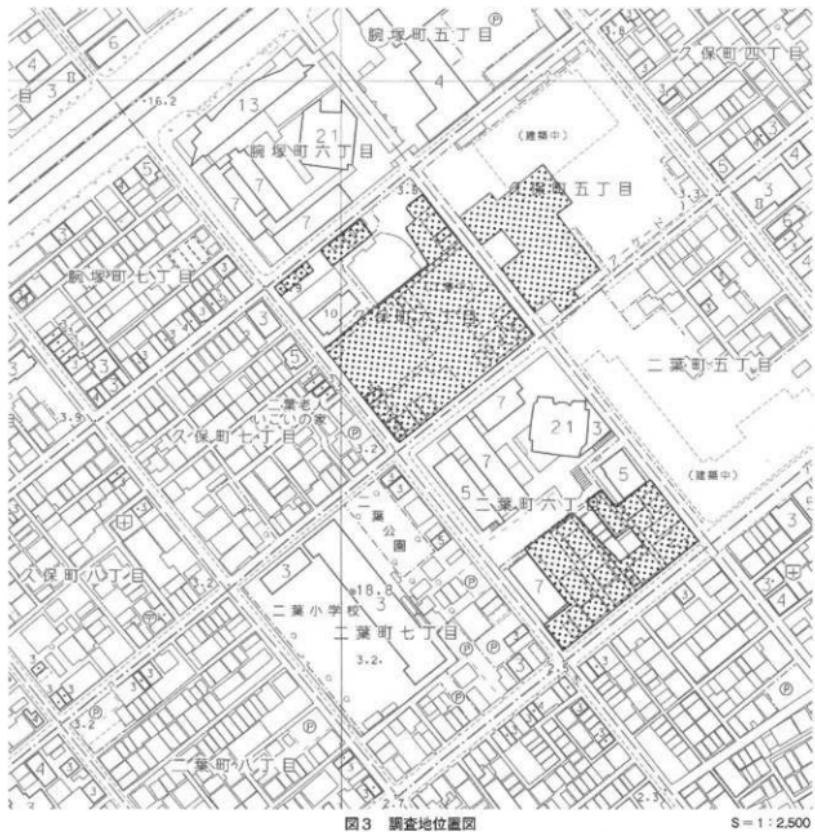


図2 二葉町通路と周辺の通路

主要参考文献

- 1 二葉町遺跡 川上厚志編 「二葉町遺跡第3・5・8・9・12次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2001
- 2 大橋町遺跡 中谷正 「大橋町遺跡第1次～1～6次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2006
- 3 松野遺跡 藤井太郎 「大橋町遺跡第2次発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2007
- 4 松野遺跡 今種浩編 「松野遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1983
- 5 長田野田遺跡 今野博史編 「松野遺跡発掘調査報告書 第3～7次調査」神戸市教育委員会 2001
- 6 長田本庄町遺跡 関野農編 「松野遺跡第11～23・25・26・29～31次 水笠遺跡第2・3・5～15・17～21次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2002
- 7 鷹取町遺跡 山田清朝・高木芳史 「若松町遺跡」神戸市教育委員会 2000
- 8 鷹取町遺跡 口野博史 「若松町遺跡第2次調査」平成10年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 2001
- 9 鷹取町遺跡 佐藤康保明・小林健二 「長川野田遺跡第1次調査」平成7年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1998
- 10 鷹取町遺跡 岡田章一・久保弘幸 「長田本庄町遺跡第1次調査」平成9年度神戸市埋蔵文化財年報 2000
- 11 鷹取町遺跡 大平茂編 「神戸市鷹取町遺跡」兵庫県教育委員会 1991
- 12 大田町遺跡 森内秀造・山上雅弘 「神戸市須磨区大田町遺跡発掘調査報告書」兵庫県教育委員会 1993
- 13 大田町遺跡 今野博史・川上厚志 「大田町遺跡第2次調査」平成3年度神戸市埋蔵文化財年報 1994
- 14 大田町遺跡 藤井太郎 「大田町遺跡第12次調査」平成10年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 2001
- 15 戎町遺跡 山本雅和・戎町遺跡第1次発掘調査報告書 神戸市教育委員会 1989
- 16 戎町遺跡 藤井太郎編 「戎町遺跡第35・38・50・56次調査」松野遺跡第32・33・38次調査発掘調査報告書 神戸市教育委員会 2005
- 17 水笠遺跡 関野農編 「松野遺跡第11～23・25・26・29～31次 水笠遺跡第2・3・5～15・17～21次調査発掘調査報告書」神戸市教育委員会 2002
- 18 水笠遺跡 「水笠遺跡第29次調査現地説明会資料」神戸市教育委員会 2007
- 19 神楽遺跡 菅本公明 「神楽遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1981
- 20 御藏遺跡 安田滋編 「御藏遺跡第4・6・14・32次調査報告書」神戸市教育委員会 2001
- 21 御藏遺跡 安田滋編 「御藏遺跡第17・38次調査報告書」神戸市教育委員会 2001
- 22 三番町遺跡 谷正俊編 「御藏遺跡V 第26・37・45・51次調査」神戸市教育委員会 2003
- 23 三番町遺跡 山仲透編 「神戸市長田区三番町遺跡第1次調査」妙見山麓遺跡調査会 2006
- 24 三番町遺跡 今野博史・水輪正徳 「三番町遺跡第2次調査」昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1994
- 25 五番町遺跡 黒川恭正 「三番町遺跡第3次調査」昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1994
- 26 五番町遺跡 松林宏典 「五番町遺跡第5次調査」平成6年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1997
- 27 長田神社境内遺跡 石島三和 「五番町遺跡発掘調査報告書第12次調査」神戸市教育委員会 2007
- 28 長田神社境内遺跡 黒川恭正 「長田神社境内遺跡第10次調査」平成10年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 1990
- 29 室内遺跡 藤井太郎・丸形俊一郎 「長田神社境内遺跡第10次調査」平成10年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 2001
- 30 室内遺跡 水口富夫・平田一幸・高瀬一基 「室内遺跡」「平成9年度年報」兵庫県埋蔵文化財調査事務所 1998
- 31 上沢遺跡 今野博史・関野農 「上沢遺跡第33次調査」平成11年度神戸市埋蔵文化財年報 神戸市教育委員会 2003
- 32 上沢遺跡 谷正俊編 「上沢遺跡Ⅲ」神戸市教育委員会 2003
- 33 大間遺跡 前田佳久 「大間遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会 1993
- 34 大間遺跡 岡田章一編 「兵庫津Ⅱ」兵庫県教育委員会 2002
- 35 大間遺跡 内藤俊哉 「兵庫津遺跡第15次調査」平成10年度神戸市埋蔵文化財年報 2001
- 36 念仏山古墳 喜谷美宜 「市街地に消えた古墳－念仏山古墳－」『博物館研究紀要第6号』神戸市立博物館 1989
- 37 念仏山古墳 喜谷美宜 「古墳時代 前方後円墳の成立と発展」『新修神戸市史 历史編』神戸市 1989

第2章 調査の概要



第1節 既往の調査概要

二葉町遺跡は、昭和63年度に二葉小学校校舎改築に伴う試掘調査を実施した際に発見された遺跡である。試掘調査の際には、中世の良好な遺物包含層が確認されている。

本格的な発掘調査は、昭和63年度に共同住宅建設に伴う第1次調査が最初で、この調査では、平安時代末から鎌倉時代初めにかけての掘立柱建物3棟と井戸1基が検出され、包含層から出土した白磁の四耳壺が出土している。

その後、個人住宅の建設に伴う調査が実施され、中世の柱穴、耕作痕、縄文時代晩期の土器を含む自然流路が検出されている。

平成8年度から、新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う大規模

表1 調査一覧表

次 数	地 区 名	調査面積	調 査 主 体	調査担当	調 査 期 間	調 査 内 容
14次	久保町5丁目	2,160m ²	鶴神戸市体育協会	阿部 功	010213 ~ 010321	土坑・溝
15-1次	久保町5丁目	530m ²	鶴神戸市体育協会	池田 敏	010429 ~ 010531	木棺墓・井戸・溝
15-2次	久保町5丁目	500m ²	鶴神戸市体育協会	石島三和	010726 ~ 010903	掘立柱建物・井戸
16-1次	久保町6丁目	600m ²	鶴神戸市体育協会	谷 正俊	020426 ~ 020628	掘立柱建物2棟・土坑・溝
16-2次	久保町6丁目	700m ²	鶴神戸市体育協会	川上厚志	020924 ~ 021105	溝・ビット
16-3次	久保町6丁目	1,400m ²	鶴神戸市体育協会	川上厚志	021211 ~ 030221	掘立柱建物8棟・井戸7基・土坑3基
17-1次	久保町6丁目	104m ²	鶴神戸市体育協会	黒田恭正	030520 ~ 030529	溝
17-2次	久保町6丁目	82m ²	鶴神戸市体育協会	黒田恭正	030602 ~ 030611	柱穴
17-3次	二葉町6丁目	325m ²	鶴神戸市体育協会	石島三和	030920 ~ 031017	掘立柱建物・井戸
17-4次	久保町6丁目	280m ²	鶴神戸市体育協会	石島三和	031027 ~ 031208	溝
17-5次	久保町6丁目	149m ²	鶴神戸市体育協会	黒田恭正	031216 ~ 040116	掘立柱建物・溝
17-6次	久保町6丁目	52m ²	鶴神戸市体育協会	黒田恭正	040126 ~ 040206	溝
17-7次	二葉町6丁目	68m ²	鶴神戸市体育協会	黒田恭正	040308 ~ 040316	土坑・溝
18-1次	二葉町6丁目	182m ²	鶴神戸市体育協会	黒田恭正	040409 ~ 040518	ビット
18-2次	二葉町6丁目	420m ²	鶴神戸市体育協会	黒田恭正	040518 ~ 040618	土坑
18-3次	二葉町6丁目	90m ²	鶴神戸市体育協会	黒田恭正	041105 ~ 041126	土坑・溝・ビット
18-4次	久保町6丁目	224m ²	鶴神戸市体育協会	黒田恭正	041129 ~ 041228	掘立柱建物・井戸・木棺墓
18-5次	久保町6丁目	320m ²	鶴神戸市体育協会	黒田恭正	050104 ~ 050210	掘立柱建物・土坑
19-1次	久保町6丁目	660m ²	鶴神戸市体育協会	阿部敬生	050509 ~ 050715	井戸・土坑・溝
19-2次	久保町6丁目	670m ²	鶴神戸市体育協会	阿部敬生	050715 ~ 050916	掘立柱建物・土坑
20-1次	二葉町6丁目	380m ²	鶴神戸市体育協会	浅谷誠吾	060515 ~ 060710	掘立柱建物2棟・井戸・土坑
20-2次	久保町6丁目	420m ²	鶴神戸市体育協会	東喜代秀	060523 ~ 060629	水溜・溝
20-3次	久保町6丁目	90m ²	鶴神戸市体育協会	東喜代秀	060703 ~ 060718	溝
20-4次	二葉町6丁目	190m ²	鶴神戸市体育協会	東喜代秀	060724 ~ 060821	溝・ビット
20-5次	二葉町6丁目	120m ²	鶴神戸市体育協会	東喜代秀	061017 ~ 061027	掘立柱建物2棟・木棺墓
20-6次	二葉町6丁目	120m ²	鶴神戸市体育協会	東喜代秀	061109 ~ 061120	溝
21-1次	二葉町6丁目	620m ²	鶴神戸市体育協会	東喜代秀	070531 ~ 070719	土坑・溝・ビット
21-2次	二葉町6丁目	550m ²	鶴神戸市体育協会	東喜代秀	071128 ~ 071225	溝

な発掘調査が開始され、縄文時代晚期の自然流路、弥生時代前期の溝・土坑、奈良時代の掘立柱建物6棟、井戸1基、土坑1基、平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物34棟、井戸21基、木棺墓4基などが検出されている。特に11世紀末から12世紀前半に廃棄され、井戸枠として転用された「複材構造船」は当時の船舶の実態を知る上で貴重な資料となっている。これらの成果は、「2001年『二葉町遺跡第3・5・8・9・12次調査発掘調査報告書』」として刊行されている。

今回の報告の対象となるのは、2001年の報告書刊行後の、同事業に伴う発掘調査の成果であり、対象範囲は図3に示したとおりで、調査面積は14,076m²である。

第2節 基本層序

各調査区とも市街地形成時から開発が行われてきた地域であるため、建物基礎による擾乱が著しく、特に商店街に面した場所は、鉄筋コンクリート造の建物の基礎により殆ど遺構面が残存していない。また、現状地盤より遺構面までの深度が浅いため、遺物包含層及び遺構面が、近世以後の耕作地造成により削平を受けている場所もある。

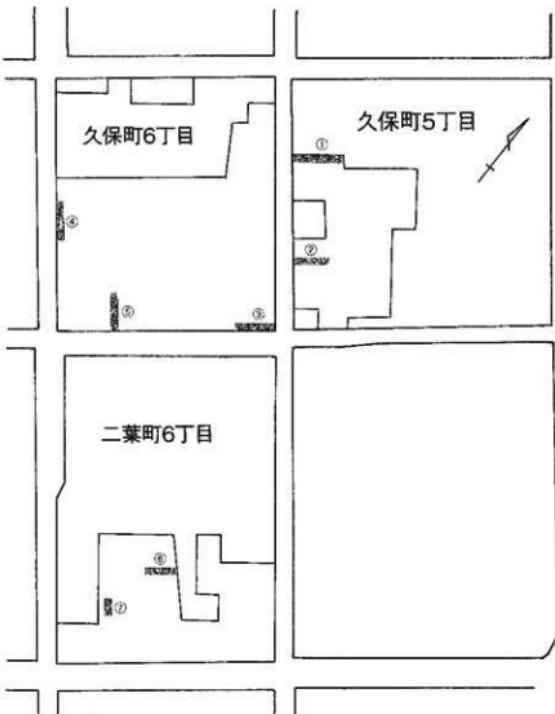


図4 基本層序配置図

- 久保町5丁目** 現状地盤より約50cm程度下までは盛土であり、その下に近世以降の旧耕土層があり、さらに下層に中世の旧耕土層が存在する。中世の旧耕土を除去すると遺物包含層である暗褐色の砂質土が堆積している場所もあるが、殆どの場所では遺物包含層は存在せず、黄灰色砂質シルトまたは褐色系の砂質土がベースとなり、その上面が遺構面である。遺構面での標高はおよそ3.5mである。なお、褐色系の砂質土が遺構面となっている場所では、その層から縄文時代晩期の土器片が出土しており、同時期の洪水砂が堆積しているものと考えられる。
- 久保町6丁目** 盛土、近世以降の旧耕土、中世の旧耕土、暗灰褐色砂質シルトの遺物包含層と堆積し、黄灰色砂質シルト～粘土または黒褐色膠泥じり粘土上面が遺構面である。遺構面の標高は、およそ3.5mである。
- 二葉町6丁目** 盛土、近世以降の旧耕土、中世の旧耕土、暗灰褐色砂質シルトの遺物包含層と堆積し、黄灰色砂質シルト～粘土上面が遺構面である。遺構面の標高は、およそ2.5～2.8mである。

W E
4.000m

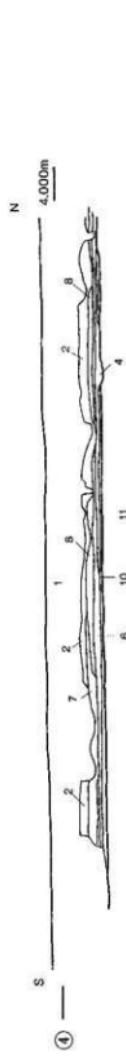
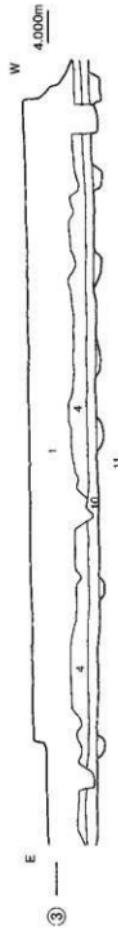
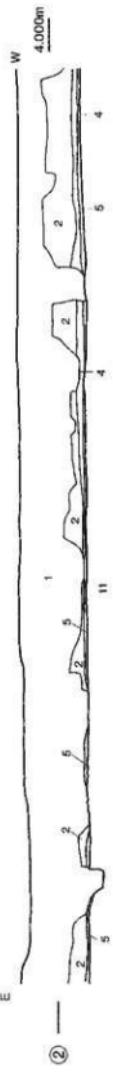
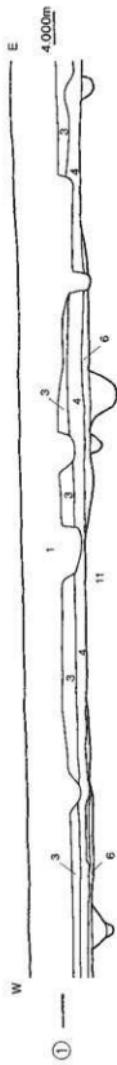


图5-1 基本土壤剖面图(1)

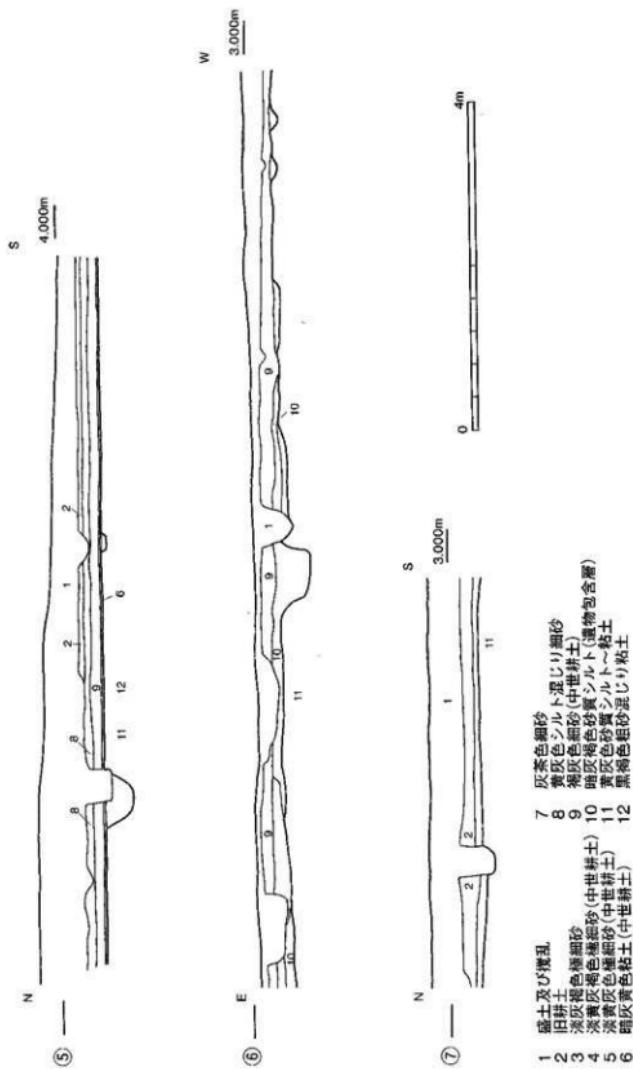


図5-2 基本土層断面図 (2)

第3章 久保町5丁目の調査

久保町5丁目では、西半部にはほとんどの遺構が集中して残存しており、掘立柱建物1棟、井戸3基、土坑3基、墓1基、自然流路1条、ピット、溝多数を検出した。なお、このうち掘立柱建物と井戸1基については、中世の耕作土上面で検出した。

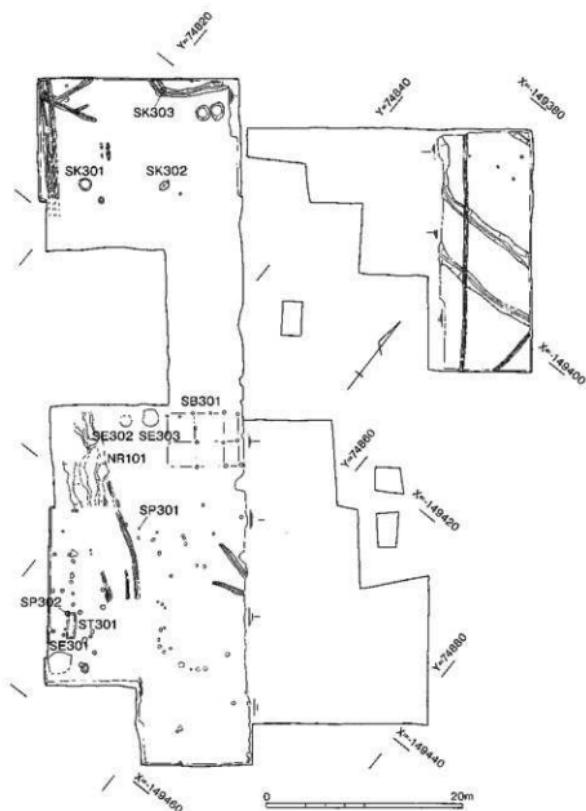


図6 久保町5丁目 遺構平面図

(1) 縄文時代晩期

NR101

北西から南東方向に向かって流れる自然流路であり、幅約4.2m、深さは最深部で、0.65mを測る。埋土の最上層には、中世の上器を比較的多く含む砂層が薄く堆積し、下層には殆ど遺物の含まない砂層が何層も繰り返し堆積している。堆積層の状況からみて、ある程度水の流れが速いことが窺われる。川底付近から、縄文時代晩期の土器が数点まとめて出土し

ているので、おそらくこの流路はその時期のものであろう。最上層の堆積層については、自然流路が埋没した後、窪んだ部分に二次的に堆積したものであると考えられる。

図7の1～7は縄文時代晩期の上器片である。1は口径29.3cm、2は口径31.0cmを測る。两者共内外面の調整は摩滅が激しく不明である。3は口径18.0cmで内外面をミガキで仕上げる。4の外面には条痕が残る。5・6は口縁部の破片で、外面には端部近くに凸帯を巡らし、端部上面にキザミ目を施す。7は底径5.7cmの底部である。この他外面にケズリを加えた底部下半部の破片などが出土している。滋賀里Ⅳ期のものが中心と考えられる。

図8の8・9は束縛系の須恵器拵鉢で、8は口径29.8cm、9は口径31.9cmである。12世紀末～13世紀のものと考えられる^⑩。

(2) 据立柱建物

SB301

中世の耕作土上面で検出した遺構で、東西2間（約5.6m）、南北2間（約5.5m）で東側に庇がつく総柱の据立柱

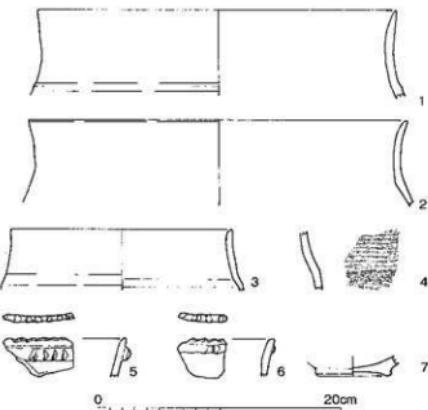


図7 NR101出土遺物実測図(1)

建物である。柱間は、東西方向のP 6～P 7～P 8～P 9が2.9m、2.7m、1.5m、南北方向のP 4～P 8～P 12が3.05m、2.45mである。柱穴の掘形は直径約0.3～0.4mの円形であり、ほとんど全ての柱穴で直径約0.1m程度の柱底を確認した。出土遺物は中世のものと考えられる土器の小破片が出土しているが、図示できるものはない。



図8 NR101出土遺物実測図(2)

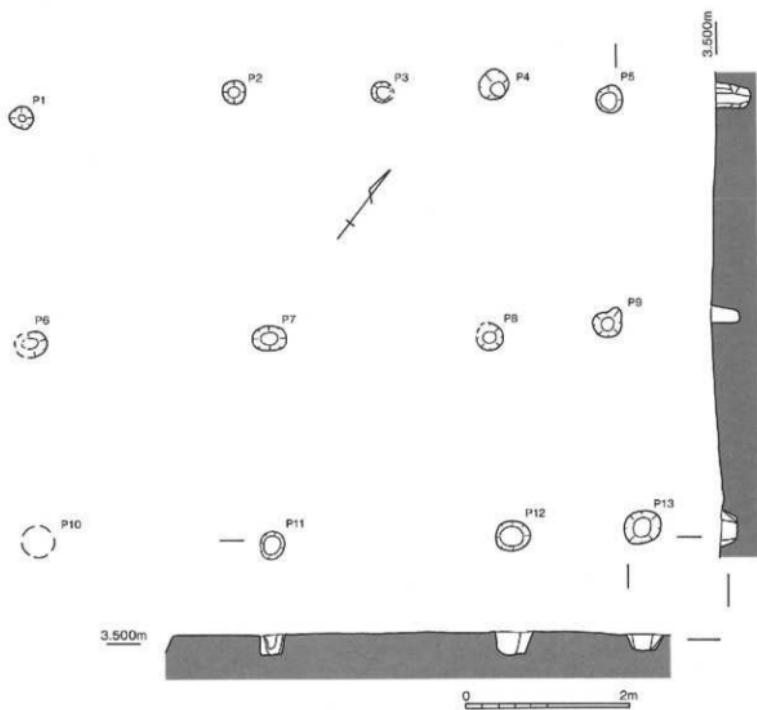


图9 SB301平面·断面图

(3) 井戸

SE301

一辺約25mの隅円方形状の掘形で、井戸側が縦板組隅柱横桟留構造に分類される井戸である。井戸底の水溜部分は曲物を3段組み上げており、検出面から水溜底までの深さは約4.4mである。井戸側部分の平面形は一辺約1.0mのほぼ正方形で、横桟は約0.7mの間隔で4段分遺存している。この井戸の特徴的な点として、四隅の隅柱の下に柱を固定するための扁平な根石を据えていること、井戸の中程より下は掘形と井戸側との隙間がほとんどないことが挙げられる。

図11の10～13は東播系須恵器、14は中国製白磁である。10の小皿は口径9.4cm、器高2.3cmで外面に墨書きで記号を描く。11の小皿は口径8.6cm、器高2.5cm。12の碗は口径16.7cm、器高4.0cm。13の碗は口径16.2cm、器高5.1cmで外面に墨書きがあるが判読できない。14は白磁皿の底部で山本信夫分類の皿窯類である¹⁰。SE301出土遺物は12世紀中頃を中心とするものと考えられる。

15～28は井戸構築材である。井戸の構造は、素掘りの土坑底の四隅に礎石を置き、その上に隅柱と横桟により枠構造を築いている。その外側に崩落防止の縦板で囲んでいる。また土坑底部の中央には曲物を3段重ねで据え、貯水部としている。

15～18は隅柱である。15が南西、16が北西、17が南東、18が北東のそれぞれ角に使用されていた。15、17はヒノキ、16はアカマツ、そして18はツブラジイを用いていた。

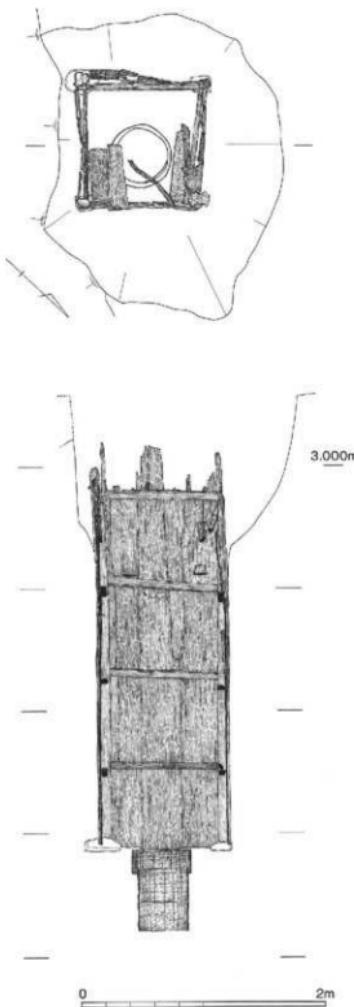


図10 SE301平面・断面図

いずれも耐朽性に優れており、井戸構築材としての選択には妥当性がある。15～17は横断面が約10cm角の角材で、長さ3.07～3.2m以上を測る。全面に手斧痕が確認される。これらは隣り合う2面について横枝の太柄を納める枘穴が縦に4段分穿たれている。18は直徑約8.5cmの丸太を2辺のみ加工した材で、長さ24m以上を測る。これには枘穴は見られない。

19～21は横枝である。4辺それぞれ4段分の計16本あるが、いずれも相似形を取るため、代表的に3点のみ図示した。いずれも全面手斧で加工された角材の両端に太枘を形成している。19は8cm×4.5cmの縦長長方形、20は5cm×4cmのほぼ正方形断面である。21は6.5cm×4.5cmのやや縦長の長方形断面を取る。またいわく当然の事であるが、いずれも有効内寸が85cm内外になるよう加工されている。また21のみ隣り合う2面に枘穴が開けられている。別用途の部材を転用したものであろうか。

縦板材は4辺に密に立て並べられていた。その内22・23は南辺、24・25は東辺に使用されたものであり、幅24・5cmに収束され、規格性に富む。長さは上端を欠損するため不明であるが、最長3mに及ぶ。表面は材の芯材に近い面は全面、特に両側端を重点的に調整している。一方、辺材面では中央部のみの調整であり、両側は割り放してある。これは楔を用いた割り製材によって得られた、断面弧状の板材を用いたことに由来する特徴といえる。

26～28は井戸底に据えられていた曲物で、いずれもヒノキ材が使用されている。法量は26が直徑56cm、高さ19cm、27は直徑50cm、高さ25cm、28は直徑46cm、高さ23cmを測る。縦じにはいずれも檜皮が使用されている。また27、28には副板、蓋が用いられ、堅因に仕上げられている。28の蓋は図上では中位にあるが、これは現状であり、本来は上端を締めていたものと推測される。

29、30は井戸内よりの出土品である。29は曲物で、直徑9.8cm、高さ7.6cmを測る。底板を伴う容器として使用されており、側板はヒノキ製、底板は厚さ約7mmのこれもヒノキ製である。縦じは檜皮による。底板を固定する目釘は3箇所確認できるとともに目釘孔が1箇所見え、4箇所以上で固定されていたようである。

30はスギ製の円形板残欠である。厚さ9mm、復元径約14cmを測る。端2箇所に直徑約1.1cmの円形穿孔があり、うち一箇所にはネズコで作られた木栓状の円筒形の材が嵌っているため、桶容器の蓋のようなものではないかと考えられる。

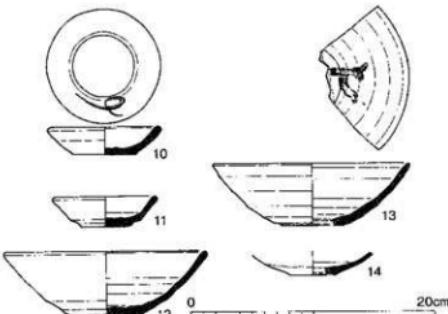


図11 SE301出土遺物実測図(1)

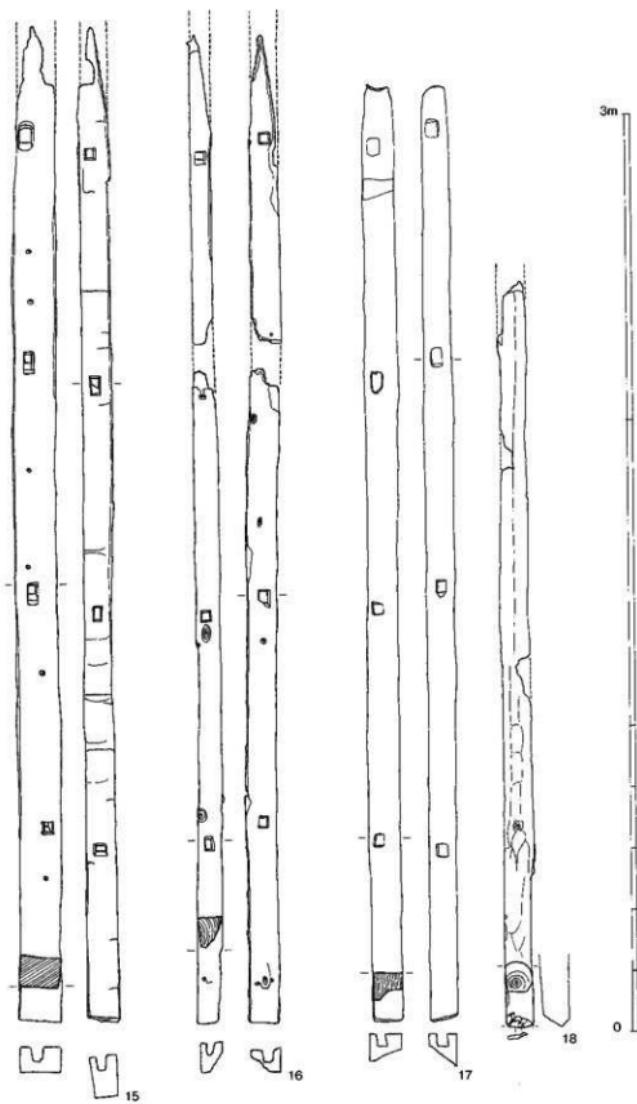


図12 SE301出土遺物実測図 (2)

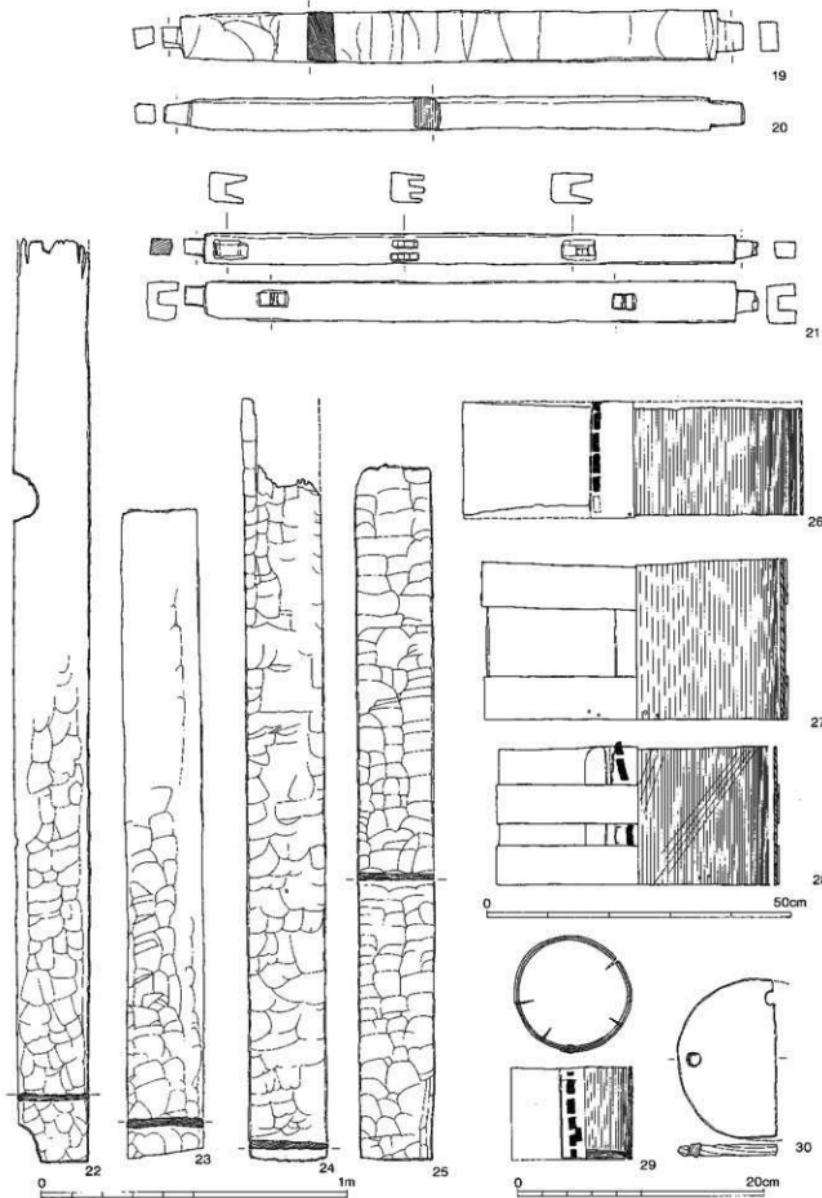


図13 SE301出土遺物実測図(3)

SE302 西半部が從前建物の基礎で破壊されているが、復元すると直徑約1.6mの円形の掘形を呈する井戸である。内部にはごく少量の中世のものと考えられる土器の小破片と井戸柱と推定される木材片が出土している。

SE303 中世の耕作土上面で検出した井戸で、直徑約1.7mの円形の掘形を呈する。検出面からの深さは、約1.0mを測る。内部より中世のものと考えられる土器の小破片が出土しているが、図示できるものはない。

(4) 土坑

SK301 直径1.2m、深さ0.65mの円形の土坑である。掘形内から曲物、木棒等は出土していないが、比較的湧水が認められるので井戸の可能性も考えられる。

SK302 長径1.0m、短径0.7m、深さ0.35mの楕円形の土坑である。遺物は出土していない。

SK303 長径0.7m、短径0.45m、深さ0.15mの楕円形の土坑である。遺物は出土していない。

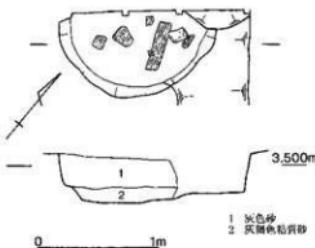


図14 SE302平面・断面図

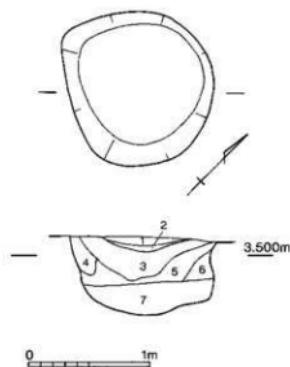


図15 SK301平面・断面図

(5) 木棺墓

ST301 長さ約2.6m、幅約0.85mの規模の掘形が長方形の木棺墓で、中央部は搅乱により破壊されている。木棺の木質は腐食により遺存していないが、上層の達いにより木棺の痕跡を確認した。木棺の規模は、長さ2.3m、幅0.6m、深さは検出面より0.1mであり、後世の耕作により遺構面が著しく削平を受けていると考えられる。出土遺物は棺内、掘形ともに少量の小破片で図示できるものはない。

(6) ピット

SP301 直径0.15m、深さ0.15mの小規模な円形のピットである。

SP302

直径0.8m、深さ0.8mの円形のピットである。

図18の31はSP301出土の土師器小皿で、口径10.0cm、器高1.5cmである。12～13世紀のものと思われる^④。同32はSP302出土の東播系須恵器碗で口径17.6cm、器高4.7cmである。12世紀末～13世紀のものと考えられる。

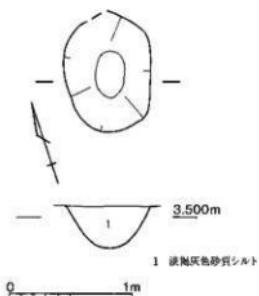


図16 SK302平面・断面図

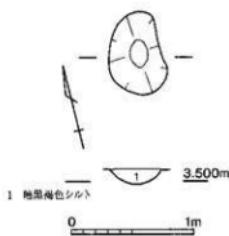


図17 SK303平面・断面図

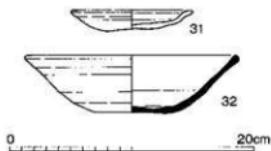


図18 SP301・302出土遺物実測図

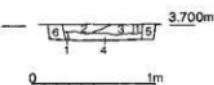
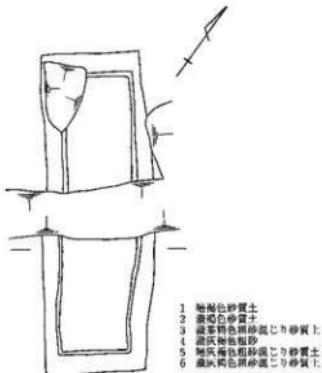


図19 ST301平面・断面図

第4章 久保町6丁目の調査

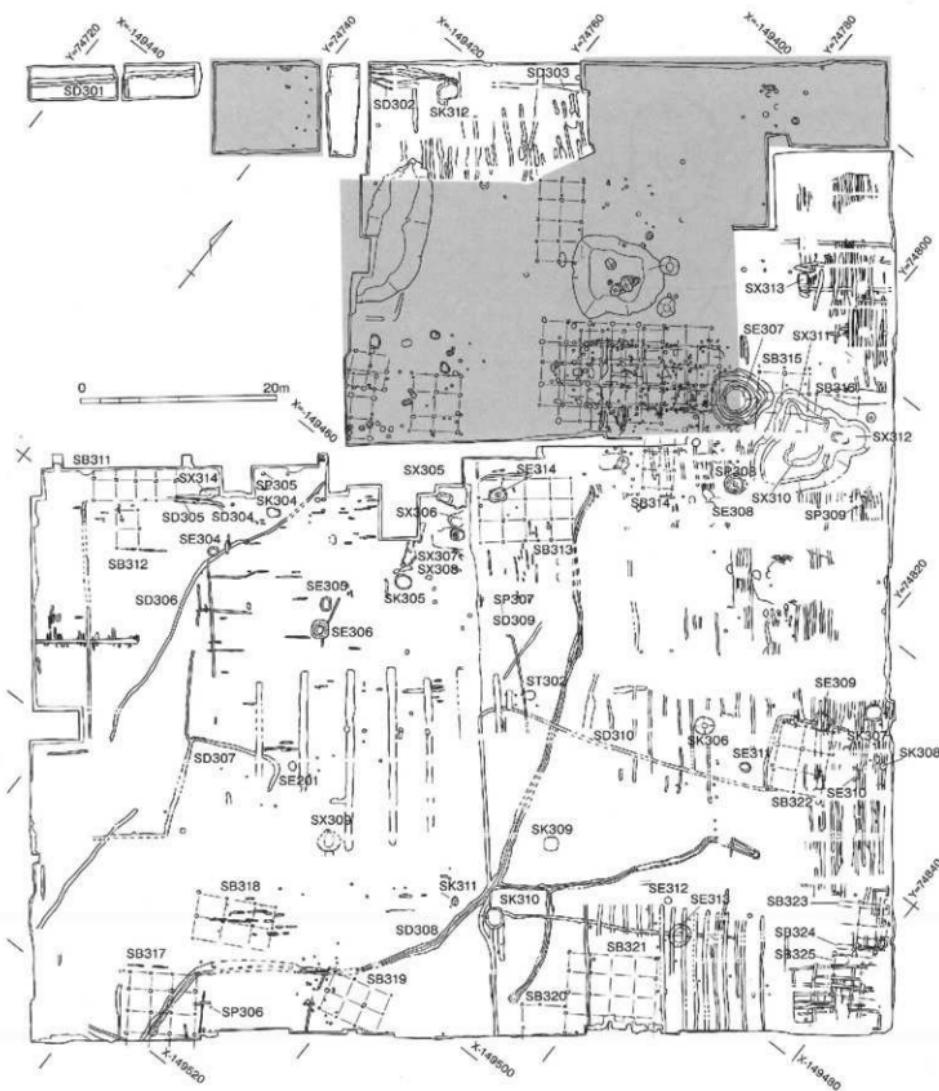


図20 久保町6丁目 遺構平面図

久保町6丁目では、掘立柱建物15棟、井戸12基、土坑9基、墓1基、不明遺構10基、ピット、溝、鋤溝多数を検出した。

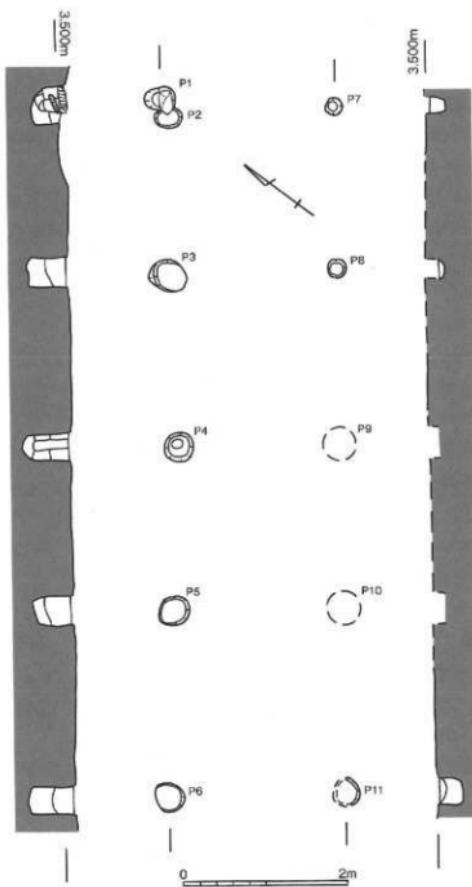


図21 SB311平面・断面図

(1) 掘立柱建物

SB311

東西4間(8.4m)、南北1間(2.1m)以上の掘立柱建物である。北側の調査区外に延びるものと考えられる。柱間は東西方向のP1～P3～P4～P5～P6が2.1m、2.1m、2.0m、2.25m、南北方向のP6～P11が2.1mである。柱穴の振形は直径0.2～0.4m程度の円形であり、柱痕が確認できるものもある。

図22はSB311の柱穴内から出土したものである。33～35はP1、36・37はP13から検出された。33は上師器小皿で底径5.6cmである。34～37は東播系須恵器塊である。34は底径5.4cm、35は口径15.6cm、器高4.8cmである。34・35は12世紀中頃のものと考えられる。36は口径15.8cm、37は口径14.6cmである。両者の口縁部角度が前者に比べ深く時期を確定することができないが、小片でもあり34・35とはほぼ同時期と考えておく。

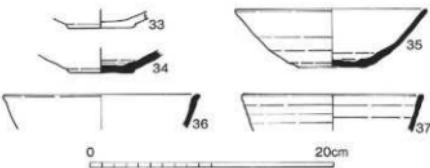


図22 SB311出土遺物実測図

SB312

SB311の南に隣接した場所で検出した東西1間(2.35m)、南北2間(4.0m)の掘立柱建物である。柱間は東西方向のP3～P6が2.35m、南北方向のP4～P5が1.9m、2.1mである。柱穴の掘形は直径0.2～0.3m程度の円形である。SB311に隣接しているためSB311の附属屋と考えられる。

柱穴P6から土師器の小破片が出土しているが、細片のため時期は不明である。

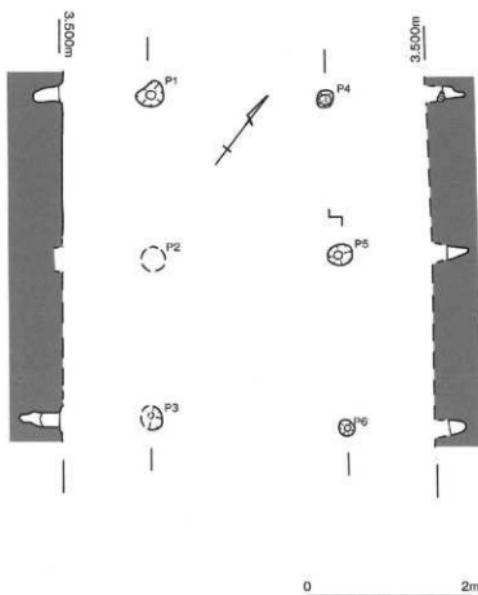


図23 SB312平面・断面図

SB313

東西4間(9.4m)、南北3間(6.2m)の鉄柱の掘立柱建物である。柱穴の1基はSE314によって破壊されている。柱間は東西方向のP11～P12～P13～P14～P15が2.1m、2.75m、2.2m、2.35m、南北方向のP2～P7～P12～P17が1.95m、2.1m、2.15mである。柱穴の掘形は直径0.2～0.3mの円形である。建物の北側に幅0.2～0.3mの東

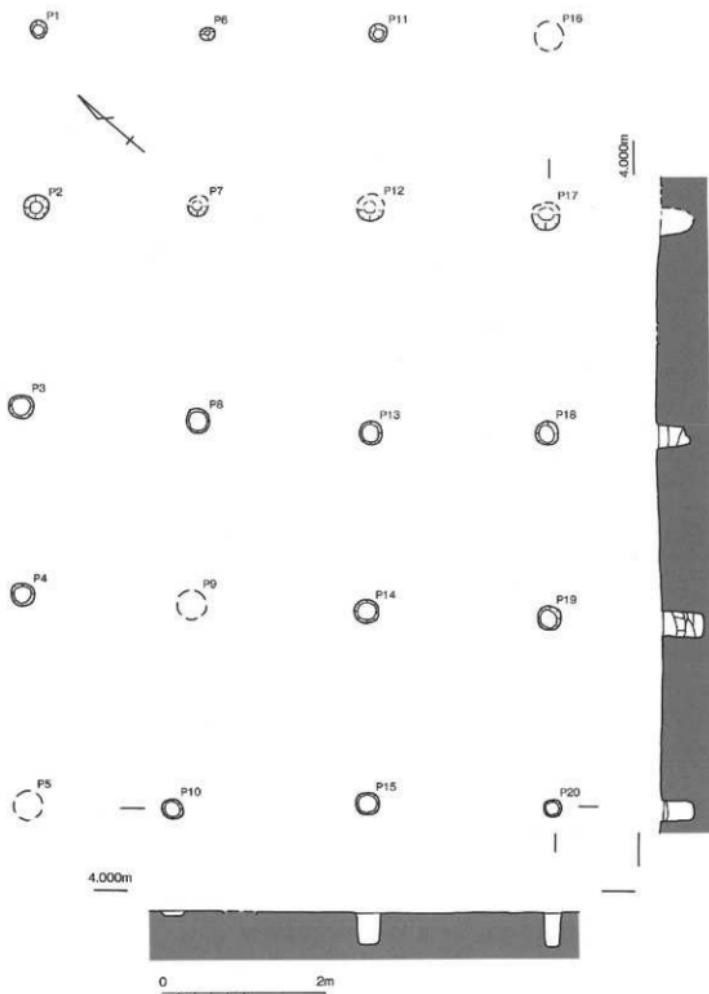


図24 SB313平面・断面図

西方向の雨落ち溝が伴う。

図25の38はSB313の北側溝から出土した土師器小皿で、口径8.6cm、器高2.1cmを測る。底部外面に糸切り痕を残す。12世紀中頃のものと思われる。

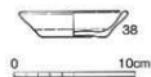


図25 SB313北溝出土遺物実測図

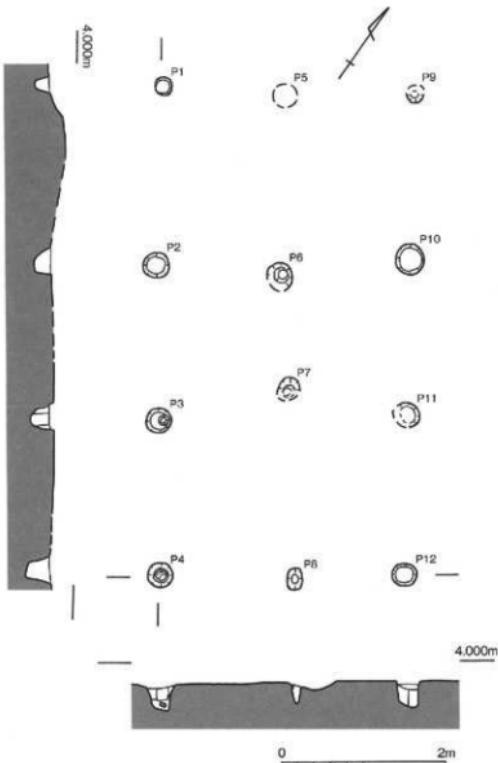


図26 SB314平面・断面図

SB314

平成12年度に実施した第12次調査の南側に隣接する場所で、その際掘立柱建物6棟と多数の柱穴が検出されており、この建物はその時に検出された柱穴と整合した結果、東西2間(3.0m)、南北3間(6.0m)の総柱の掘立柱建物と判明した。柱間は東西方向のP4～P8～P12が1.65m、1.35m、南北方向のP1～P2～P3～P4が2.2m、1.9m、1.9mである。柱穴の掘形は直径0.2～0.3mの円形で、根石を持つものや埋土に須恵器の塊を含むものがある。

図27の39～41はSB314の柱穴内から出土したものである。39は口径18.7cm、器高1.6

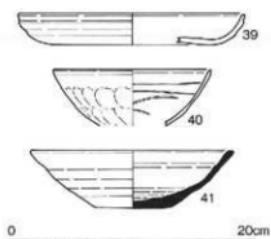


図27 SB314出土遺物実測図

cmの土師器皿で12世紀後半から13世紀のもの。40は瓦器塊で口径13.0cm。小片のため口径など不確実であるが13世紀代と思われる⁽⁴⁾。41は東播系須恵器塊で口径16.4cm、器高4.7cm、12世紀後半と考えられる。

SB315 大半がSE307とSX310～312により消滅しているが東西2間(5.2m)、南北3間(6.4m)以上の建物に復元できる。柱間は東西方向のP1～P5～P9が2.6m、2.6m、南北方向のP9～P10が2.05mである。柱穴の掘形は直径0.2～0.4mの円形である。遺物は出土していないため、時期は不明である。

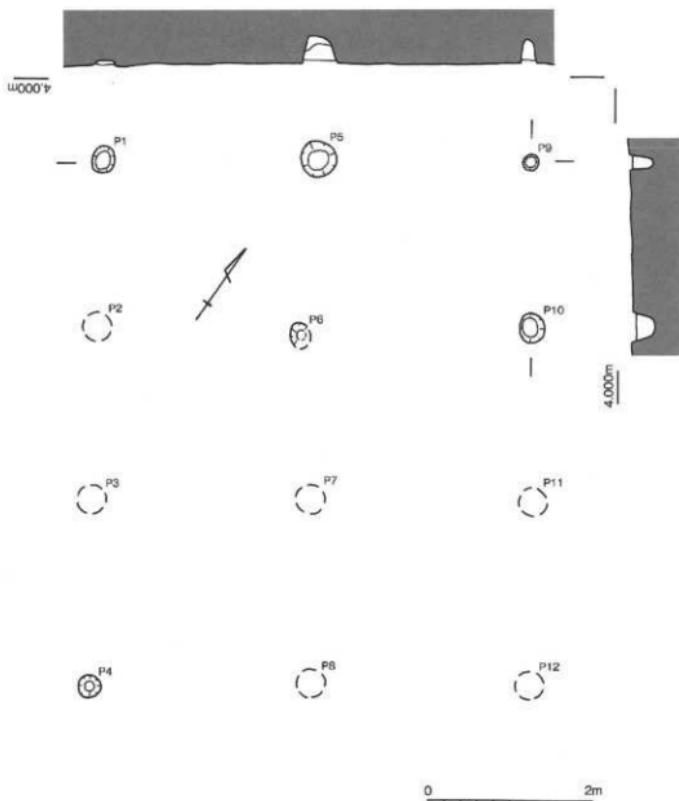


図28 SB315平面・断面図

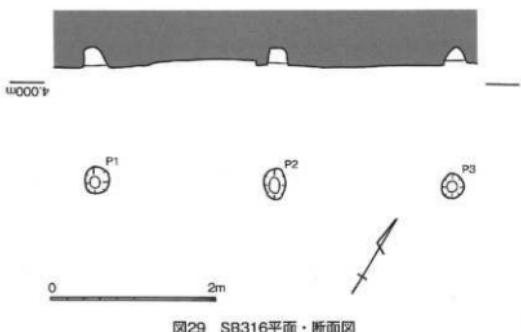


図29 SB316平面・断面図

SB316

大半がSX310～312により消滅しているが、北辺の2間分を検出した。柱間はP1～P2～P3が2.15m、2.15mである。柱穴の掘形は直徑0.3mである。遺物は出土していないので時期は不明である。

SB317

東西3間(6.7m)以上、南北3間(6.2m)以上の総柱の建物で、北及び西側に幅約0.1～0.4m、深さ約0.05～0.15mの雨落ち溝が伴う。柱間は、東西方向のP1～P2～P3～P4が2.1m、2.2m、2.4m、南北方向のP1～P5～P9～P13が1.8m、2.1m、2.3mである。柱穴は、掘形が直徑0.25～0.4mで、ほぼ全てが深さ0.4～0.5mあり、0.7mに及ぶものもある。柱穴内の柱痕部から須恵器壇、上師器皿が出土している。

図31の42～45はSB317の柱穴から出土したものである。42・43はP8から、44はP3、45はP7から検出された。42は土師器小皿で口径9.8cm、器高1.8cmである。底部外面に糸切り痕がある。43は東播系須恵器壇で口径15.4cm、器高5.8cmで体部外面中央に沈線が一条巡る。44・45も東播系須恵器壇で前者は口径13.4cm、後者は底径5.7cmである。42～45は11世紀末頃のものと考えられる。

SB318

東西3間(7.95m)、南北2間(4.6m)の総柱の建物で、柱間は東西方向のP1～P2～P3～P4が2.1m、2.9m、2.9m、南北方向のP4～P8～P9が2.4m、2.2mである。柱穴は掘形が直徑0.2～0.4mの円形である。

図33の46・47はSB318の柱穴から出土した東播系須恵器壇で、46はP6、47はP4出土である。46は口径15.0cm、器高5.6cm、47は口径16.4cm、器高5.6cmである。46にやや古い形態が残るが、両者とも12世紀初頭頃のものと考えられる。

SB319

東西3間(6.1m)、南北2間(4.1m)の総柱の建物である。柱間は東西方向のP1～P2が2.0m、P10～P11が2.1m、P7～P8が2.1m、南北方向のP1～P5～P9が2.1m、2.0mである。柱穴の掘形は直徑0.2～0.4mの円形で、深さは殆どが0.4～0.6mを測り、柱痕が確認できるものもある。

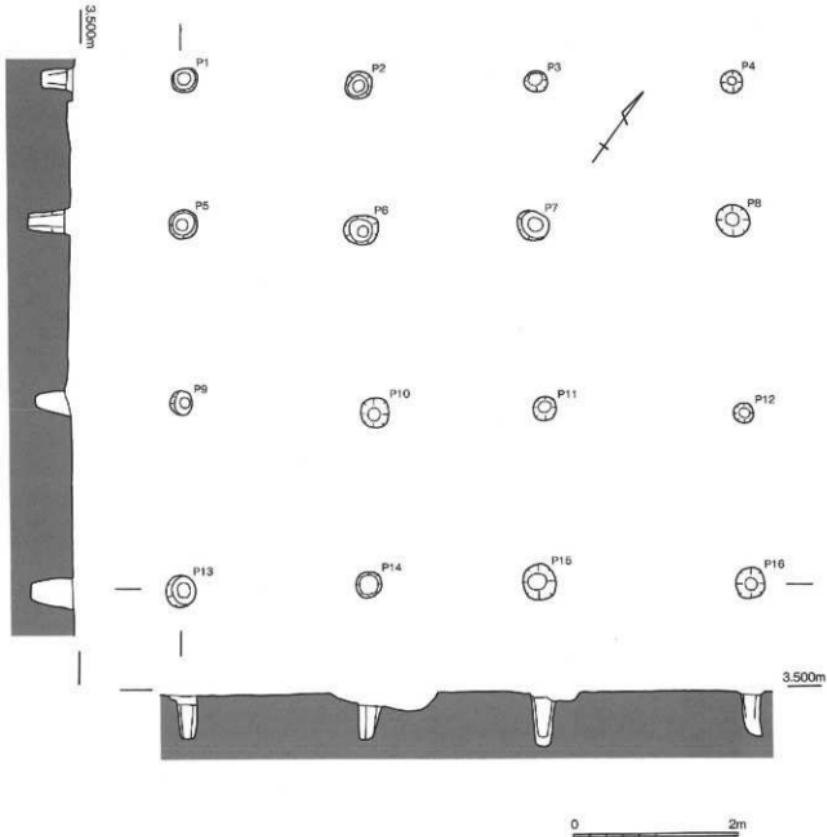


图30 SB317平面·断面图

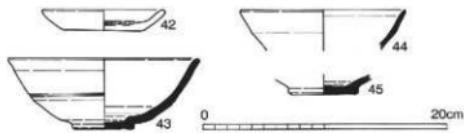


图31 SB317出土遗物实测图

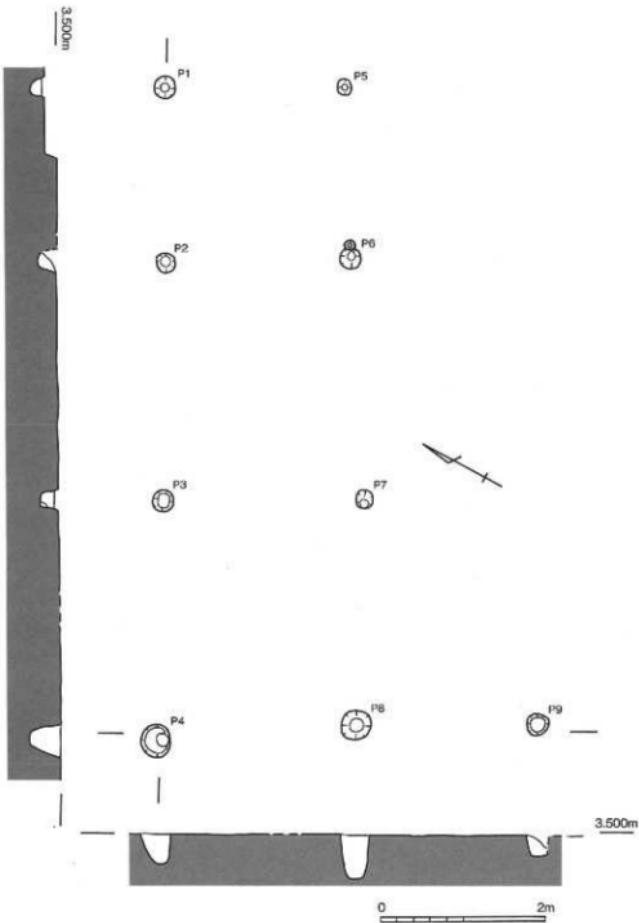


图32 SB318平面·断面图

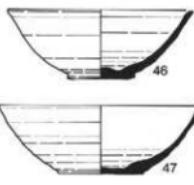


图33 SB318出土遗物实测图 0 20cm

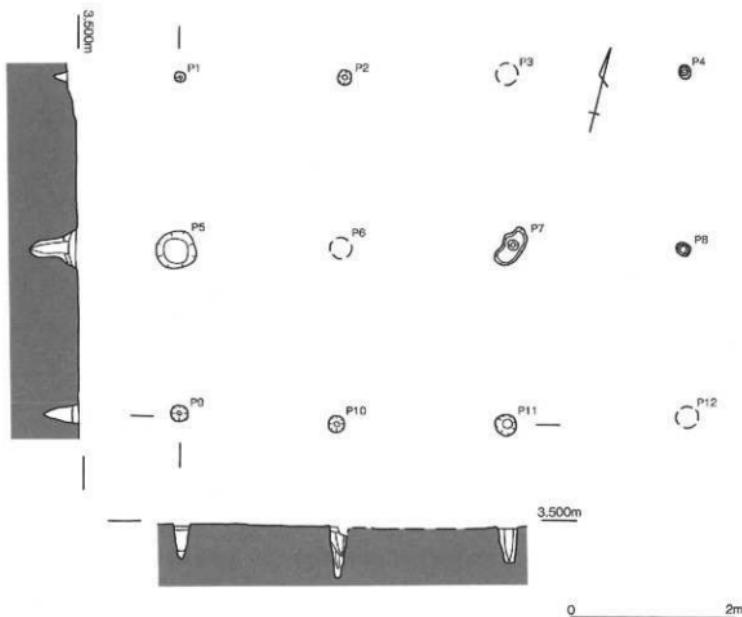


図34 SB319平面・断面図

図35の48はSB319の柱穴P 4から出土した土師器小皿である。口径9.0cm、器高約1.5cmを測る。時期については確定できない。

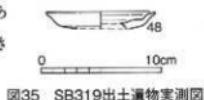


図35 SB319出土遺物実測図

SB320 南東西2間(4.35m)以上、南北1間(2.4m)以上の建物である。南の調査区外へ延びるものと思われる。東は從前建物の基礎で破壊されており規模は不明である。柱間は東西方向のP1～P2～P3が、1.8m、2.55m、南北方向のP1～P4が2.4mである。柱穴の掘形は0.20～0.25mである。図示できるような遺物は出土していないので時期は不明である。

SB321 従前建物の基礎によりかなり破壊されているが、東西4間(8.9m)以上、南北4間(8.3m)以上の総柱の掘立柱建物に復元できる。柱間は東西方向のP17～P22が2.0m、南北方向のP22～P23～P24～P25～P26が、2.0m、2.2m、2.1m、2.0mである。柱穴の掘形は直径0.2～0.3mの円形で、内部に根石を据えてあるものや柱痕が確認できるものもある。

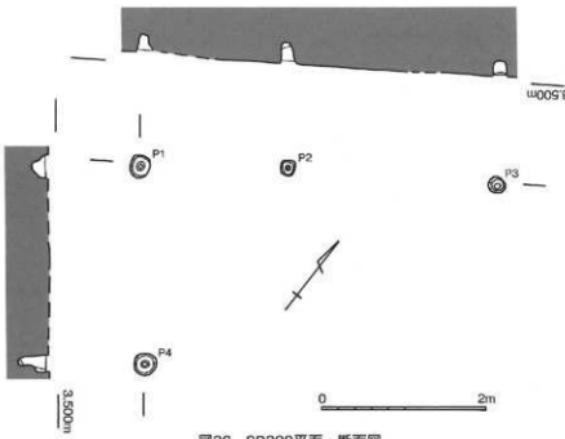


図36 SB320平面・断面図

図38の49はSB321の柱穴P 19から出土した東播系須恵器塊で、口径15.6cm、器高5.7cm、12世紀初め頃のものと考えられる。

SB322

東西2間(5.3m)、南北3間(6.8m)の純柱の建物で、北及び西側に幅約0.3m、深さ約0.05～0.15mの雨落ち溝が伴う。柱間は東西方向のP 1～P 5～P 9が2.4m、2.9m、南北方向のP 1～P 2～P 3～P 4が2.3m、2.2m、2.3mである。柱穴の掘形は直径0.2～0.5mで、柱痕が確認できるものもある。図示できるような遺物は出土していないため、時期は不明である。

SB323

調査区の南東隅で3棟の建物が集中していた。このあたりは、従前建物基礎及び地下室の擾乱が著しく、東と南は調査区外であるため正確な建物規模は不明である。SB323は東西1間(2.5m)以上、南北2間(4.4m)以上の建物で、柱間は東西方向のP 3～P 7が2.5m、南北方向のP 1～P 2～P 3が、2.2m、2.2mである。柱穴の掘形は直径0.3～0.45mである。図示できるような遺物は出土していないので、時期は不明である。

SB324

SB323と重なるように検出した、東西1間(2.3m)以上、南北2間(4.3m)以上の建物である。東西方向の柱間はP 2～P 5で2.3mであるが、南北方向の柱間はP 4が擾乱で消滅しているため不明である。柱穴の掘形は直径0.3～0.5mで、根石を据えているものもある。図示できるような遺物は出土していないので、時期は不明である。

SB325

SB324の南で検出した東西1間(2.1m)以上、南北2間(4.2m)以上の建物である。柱間は、東西がP 1～P 4で2.1m、南北がP 1～P 2～P 3で2.2m、2.0mである。柱穴の掘形は0.2～0.3mである。

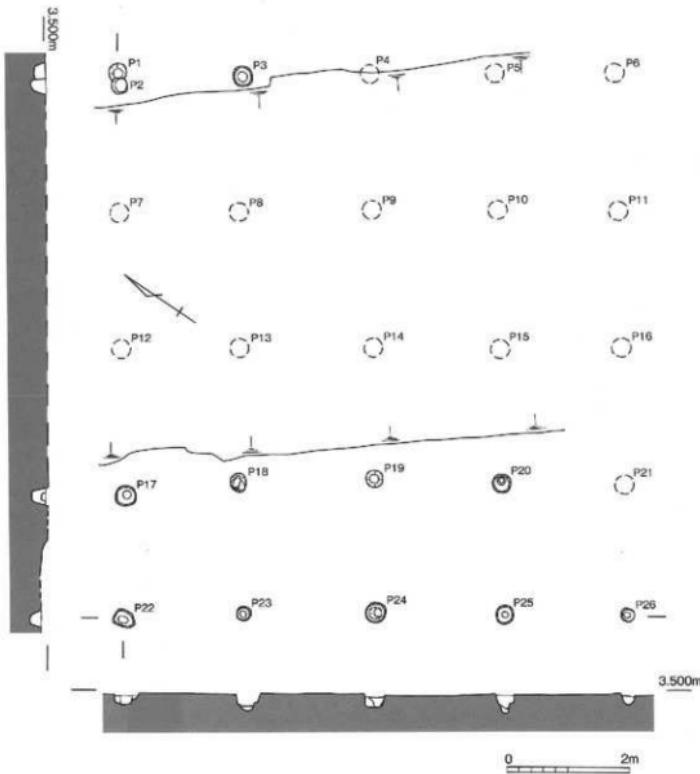


図37 SB321平面・断面図

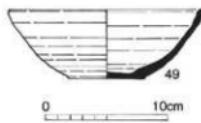


図38 SB321出土遺物実測図

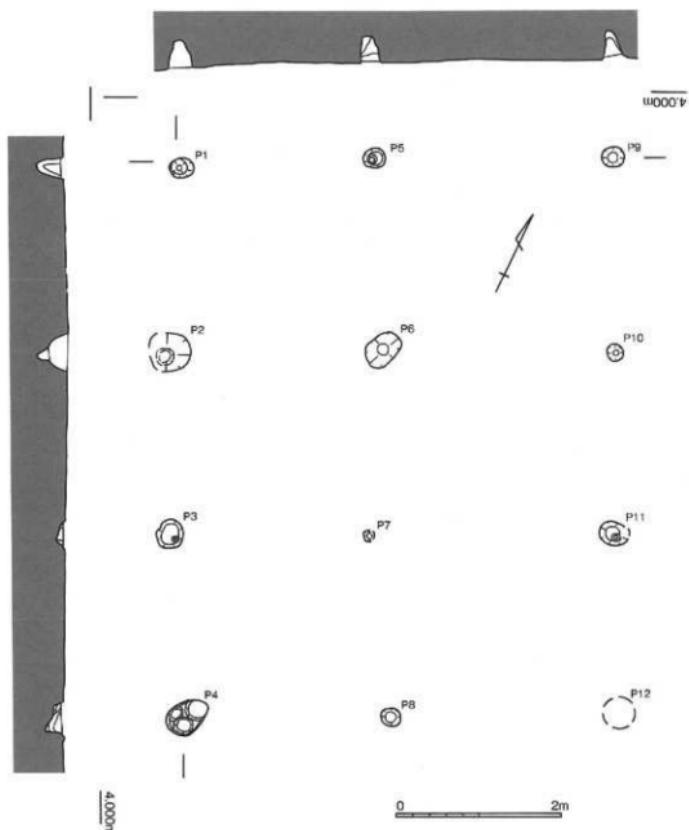


図39 SB322平面・断面図

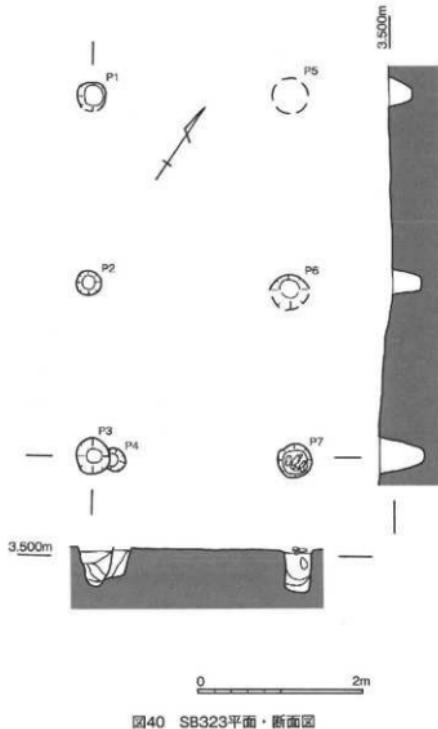


图40 SB323平面·断面图

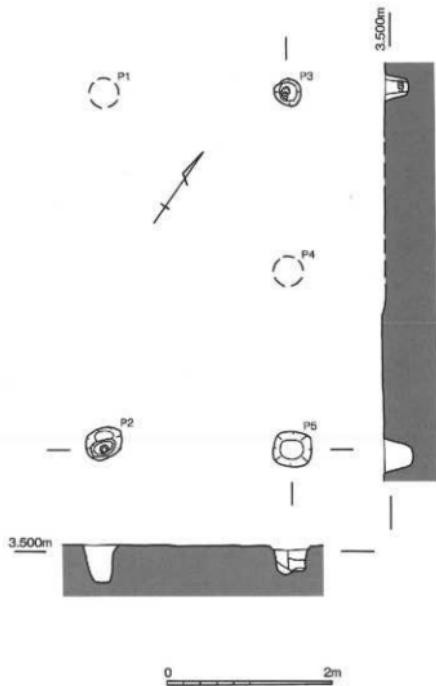


图41 SB324平面·断面图

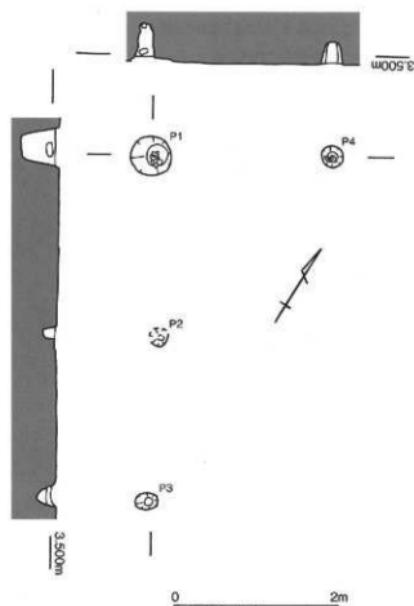


圖42 SB325平面・断面図

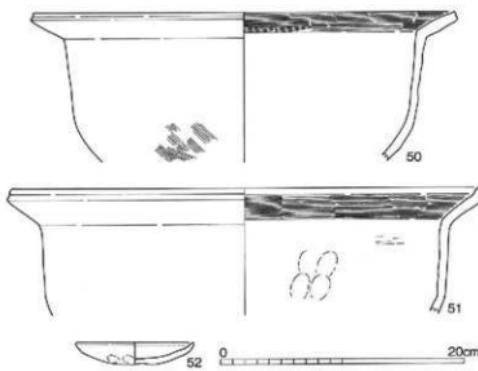


圖43 SB325出土遺物実測図

図43はSB325の柱穴P1及びP4から出土した土師器である。50・51は鍋で50の外面には煤が付着する。50はP1とP4から検出された破片が接合した。口径34.4cmを測る。51は口径39.0cmで口縁端部を若干挿み上げる。52は小皿で口径9.7cm、器高1.8cmである。3者の時期は13世紀前半頃と思われる。

(2) 井戸

SE201

長径0.86m、短径0.78m、深さ0.99mのほぼ円形の掘形をもつ素掘りの井戸である。底に曲物を検出したが、遺存状態が悪く、取り上げることが出来なかった。

図45の53はSE201出土の黒色土器塊で内面のみに炭素を付着させるA類である。高台径7.0cm、10世紀代のものと思われる^⑨。

SE304

直径約1.0mを測る円形の素掘りの井戸で、深さは0.95mである。

図47の54～56はSE304出土の遺物である。54は土師器小皿で口径8.8cm、器高1.5cm、55は口径13.8cmの瓦器塊である。56は東播系須恵器塊で口径17.4cmを測る。いずれも小片のため時期の確定は困難だが13世紀代と思われる。

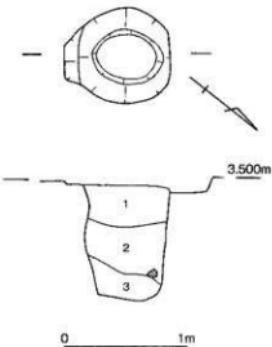


図44 SE201平面・断面図
1 暗灰色細砂混じりシルト(灰褐色細砂、深灰色シルト含む)
2 淡灰褐色シルト質細砂～細砂(暗灰色シルト含む)
3 黒灰色シルト(灰色～灰褐色シルト～灰砂含む)

図44 SE201平面・断面図

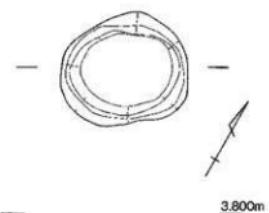


図45 SE201出土遺物実測図



1 黄褐色～灰黄色小皿底混じりシルト質細砂
2 淡灰褐色細砂(灰褐色シルト質細砂を含む)
3 黑灰色シルト

図46 SE304平面・断面図

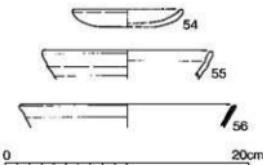
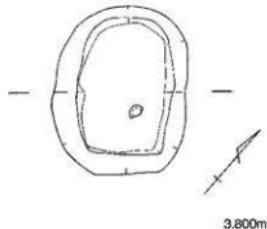


図47 SE304出土遺物実測図

SE305

長径1.4m、短径1.1mを測る楕円形の素掘りの井戸で、深さは0.7mである。底が湧水層である砂層に達しておらず、水溜の可能性がある。

図49の57はSE305出土の土師器皿で、口径11.7cm、器高3.1cmである。内外面をナデで仕上げる。13世紀以降のものと思われるが、確定できない。



SE306

SE305の南側で検出した井戸で、一辺約1.8mの隅円方形の掘形で、深さは1.4mである。

内部は2段掘りになっている。井戸枠や曲物等は出土していないため素掘りの井戸と考えられるが、内部が2段掘りになっていることから、本来曲物が設置されていたのが、抜き取られた可能性もある。埋土の状況から、比較的の短期間に人為的に埋められていると考えられる。遺物としては、須恵器壺や土師器皿の小片とともに、底付近で木製の横樋が1点出土している。

1 暗灰色シルト混じり粗鉛
2 黒褐色シルト混じり細鉛
3 褐色小礫混じり細鉛～褐灰色シルト

0 1m

図48 SE305平面・断面図

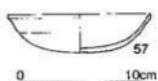


図49 SE305出土遺物実測図

図51の58・59はSE306出土遺物でいずれも束縛系須恵器壺である。58は口径15.7cm、59は口径15.9cmである。小片のため時期を確定することが困難であるが、12世紀代のものと思われる。

図52の60は横樋であり、SE306の中より出土している。身と柄が一体整形であり、材にはイスノキを使用している。イスノキは光沢美があり、さまざまな器具に使用されることが多く、特に櫛として使用された例が目立つ。

法量は全長32cm、身は円筒形で、長さ19cm、直徑9cmを測る。柄は長さ13cmで、円筒形を呈し柄尻付近でわずかに開く。身との接合部の直徑は3.2cm、柄尻で4.6cmを測る。切削工具での調整痕が明瞭に残り、製作時からあまり使用せずに埋蔵されたようである。

SE307

第12次調査で遺構の西半部を調査し、2001年刊行の報告書に、不明大壇土坑（SX303）として報告したものと同一遺構であるが、今回完掘した結果、近世の廻し瓦と共に桶が4段積み重なって出土した。検出面での掘形直径は、約6mである。検出面から約1.8m下に至るまでは、粘土層ごとに幅0.2m前後のテラスを設けて、階段状に掘り込んでいた。検出面より下1.8mから5mの間に4段分の桶が井戸桶として設置されているが、最上段の桶は腐食が激しく、下端部が残存しているのみであった。このことから、さらに上部にも桶があった可能性が考えられる。

最下段の桶の下には一本を割り貫いた円筒状の部材が存在しているが、崩壊の危険があつたため、取り上げることは出来なかった。図示できるような遺物は出土していない。

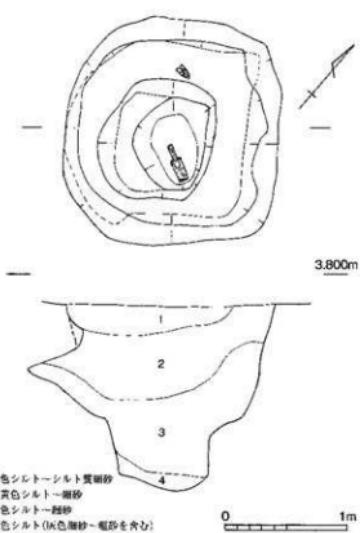


図50 SE306平面・断面図

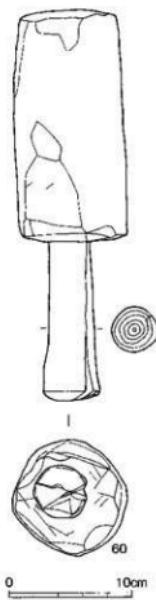


図52 SE306出土遺物実測図 (2)

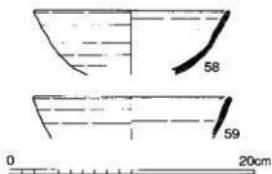


図51 SE306出土遺物実測図 (1)

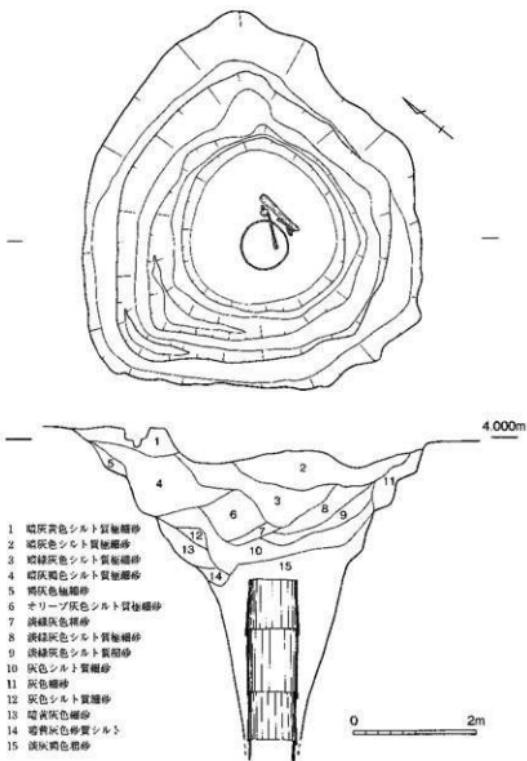


図53 SE307平面・断面図

SE308

検出面では直径2.2mの円形の掘形である。検出面から0.7m下がったところで、一辺が1.5mの方形の掘形になり、ほぼ垂直に掘り込まれていることから、井戸側として板などの構造物があったものと思われるが、抜き取りのため何も出土していない。検出面から2.1m下がったところで、直径0.4m、深さ0.4mの垂直の掘り込みがあり、湧水部として曲物が存在していたはずであるが、これも抜き取られている。

図55の61・62はSE308出土の東播系須恵器塊と小型の捏鉢である。61は口径17.4cm、62は口径20.4cm、器高6.2cmである。12世紀初め頃のものと考えられる。

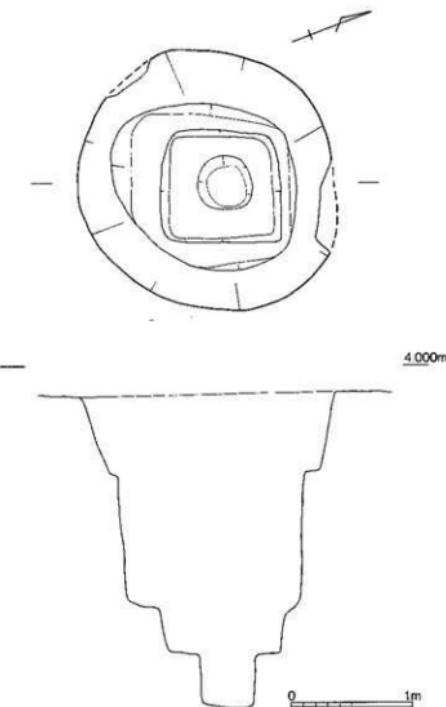


図54 SE308平面・断面図

SE309

直径2mの円形の掘形である。掘り込みは緩やかで、深さ1mの粘土層内で底になり、湧水層まで達していない。しかし、上層の砂層からの水により、調査中においても常に水が湛えられていたことから、溜め井として使用されていたものと考えられる。図示できるような遺物は出土していない。

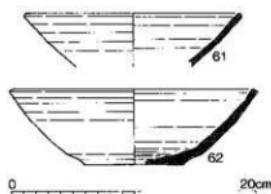


図55 SE308出土遺物実測図

SE310

西半分が從前建物の基礎により破壊されているが、直径1.2mの円形の掘形に復元できる。掘り込みは緩やかで、深さ1mの粘土層内で底になり、湧水層まで達していない。しかし、上層の砂層からの水により、調査中においても常に水が湛えられていたことから、溜め井として使用されていたものと考えられる。図示できるような遺物は出土していない。

SE311

直径0.9mの円形の掘形である。掘り込みは垂直であるが、深さ1mの粘土層内で底になり、湧水層まで達していない。しかし、上層の砂層からの水により、調査中においても常に水が湛えられていたことから、溜め井として使用されていたものと考えられる。遺物は出土していない。

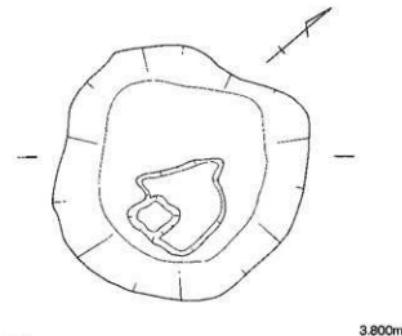


図56 SE309平面・断面図

SE312

直径0.7mの円形の掘形であり、今回検出した井戸の中では最も規模の小さなものである。掘り込みは垂直で、深さ0.7mの粘土層内で底になり、湧水層まで達していない。しかし、上層の砂層からの水により、調査中においても常に水が湛えられていたことから、溜め井として使用されていたものと考えられる。

図59の63はSE312出土の東播系須恵器甌で口径15.2cm、器高4.8cmである。12世紀前半代のものと考えられる。

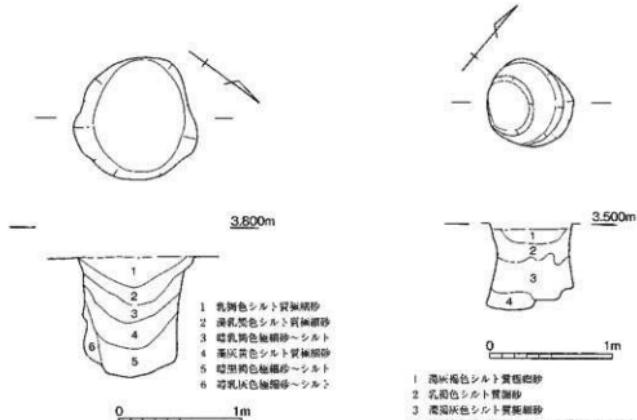


図57 SE311平面・断面図

図58 SE312平面・断面図

SE313

直径2.2mの円形の掘形である。掘り込みは緩やかで、深さ1mの粘土層内で底になり、湧水層まで達していない。しかし、上層の砂層からの水により、調査中においても常に水が満えられていたことから、溜め井として使用されていたものと考えられる。

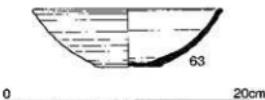


図59 SE312出土遺物実測図

SE314

長径1.8m、短径1.4mの楕円形の掘形であり、深さ約0.9mで底部になるが、そこに直径約0.3m深さ約0.7mの水溜を設けている。

図61の64はSE314出土の瓦器塊で、口径10.2cm、器高5.4cmである。和泉型の瓦器塊で、外側のヘラミガキはやや雑だが高台径はまだ大きいことから、12世紀中頃のものと考えられる。



図61 SE314出土遺物実測図

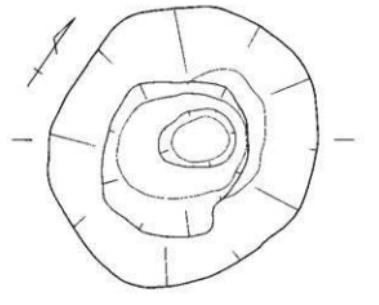


図60 SE313平面・断面図

(3) 溝

SD301

調査区の北西隅で検出した、幅約0.6mの東西方向の溝で、北側の0.4mが一段深くなっている、そこでの深さは約0.15mである。溝底はほぼ水平である。溝の両側から、東西方向の鶴嘴を検出したことから、この溝は田圃の区画溝の可能性が高いと考えられる。

図63の65・66はSD301出土の東播系須恵器塊で、65は口径14.2cm、66は底径5.3cmである。12世紀前半頃と思われるが、小片のため確定は困難である。

SD302

幅0.5～1.0m、深さ約0.07mの溝である。

図64の67・68はSD302出土の東播系須恵器である。67は塊で底径5.8cm、68は壺鉢で口径27.2cmである。12世紀初頭頃と考えられる。

SD303

幅約0.5～1.0m、深さ約0.2mの溝で、SD302とほぼ同じ向きに並んでいる。SD302、SD303についても、田舎の区画溝と考えられる。

図65の69はSD303出土の弥生時代前期の斎形土器の体部片である。胴部中央に段を設け、その下にヘラによる沈線を2条巡らす。胴部の最大径は25.3cmを測る。70は上げ底の底部片である。時期を確定することは困難であるが、縄文時代晚期の可能性もある。底径5.4cmである。

SD304

幅約0.4m、深さ約0.1mの東西方向の溝である。

図66の71はSD304から出土した東播系須恵器塊の底部片で、底径6.4cmである。12世紀代と思われる。

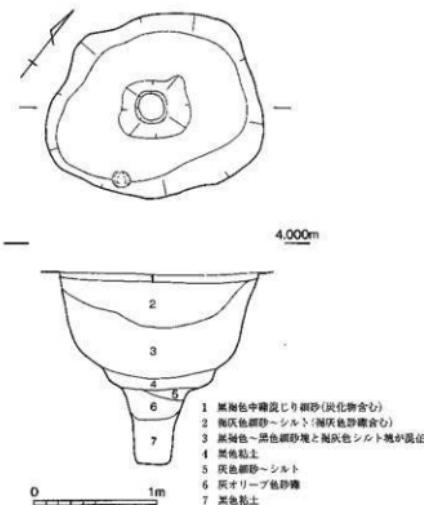


図62 SE314平面・断面図

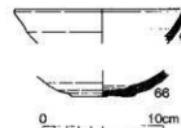


図63 SD301出土遺物実測図

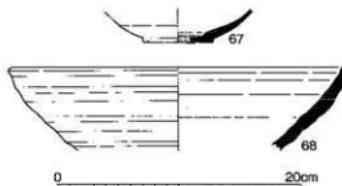


図64 SD302出土遺物実測図

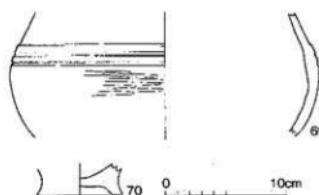
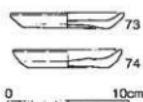
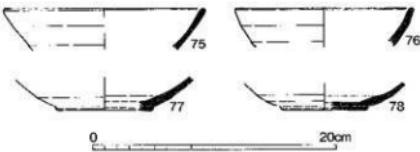
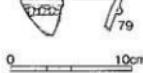
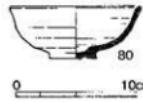


図65 SD303出土遺物実測図



図66 SD304出土遺物実測図

- SD305 SD304に接して東西方向に延びる、幅約0.4m、深さ約0.1mの溝である。
- 図67の72は東播系須恵器塊の口縁部で、SD305から出土した。口径18.5cmを測る。小片のため時期不明である。
- 
- 図67 SD305出土遺物実測図
- SD306 調査区を北から南へやや蛇行しながら流れる、幅約0.3～0.4m、深さ0.1mの溝である。2001年刊行の報告書では、弥生時代前期の溝として報告されているSD101と同一遺構と考えられるが、今回の調査では土師器の小片が少量出土しただけであり、中世の遺構の可能性も考えられる。
- SD307 幅約0.3～0.4m、深さ約0.1mの溝で、東西方向に延びるが東端と西端はほぼ直角に南へ曲がっている。田圃もしくは屋敷地の区画溝と考えられるが、対応する鶴溝や柱穴が確認できていないので、用途は不明である。
- 図68の73・74はSD307から出土した土師器小皿である。73は口径9.2cm、器高1.3cmで底部外面に糸切り痕を残す。74は口径8.8cm、器高1.5cmで摩滅のため調整等は不明である。12世紀代と思われるが確定は困難である。
- 
- 図68 SD307出土遺物実測図
- SD308 幅0.4～0.9m、深さ0.2～0.3mで、蛇行しながら北から南へ流れている。
- SD309 振乱が著しく、東側の肩のみ検出した。この地域の条理の方向に従っているものと思われる。深さ約0.2mである。
- 図69の75～78はSD309出土の東播系須恵器塊である。75は口径16.2cm、76は口径14.4cm、77は底径7.8cm、78は底径7.0cmを測る。いずれも12世紀前半頃と思われる。
- 
- 図69 SD309出土遺物実測図
- SD310 幅0.3～0.4m、深さ0.1～0.2mの東西方向の溝で、西端はSD309と切り合っている。
- 図70の79はSD310出土の縄文時代晩期の深鉢口縁部片である。外面の口縁端部直下に凸帯を巡らす。
- 図71の80はSD310から出土した東播系の須恵器塊で口径10.8cm、器高3.9cmである。11世紀後半のものと考えられる。
- 
- 図70 SD310出土遺物実測図(1)
- 
- 図71 SD310出土遺物実測図(2)

(4) 土坑

SK304

長径1.4m、短径1.0mの歪な楕円形の土坑で、深さは0.25mである。底面付近で炭を少量検出した。

図73の81・82はSK304から出土した遺物で、81は口径10.5cm、器高19cmの土師器小皿である。底部外面に糸切り痕を残す。82は束縛系須恵器塊の底部片で、底径6.3cmである。12世紀前半と考えられる。

SK305

長径1.7m、短径1.5m、深さ0.15mの楕円形の土坑である。遺物は出土していない。

SK306

直径約2.0m、深さ0.7mの土坑である。図示できるような遺物は出土していない。

SK307

SB322の東に隣接して検出した。搅乱により南半分が破壊されているが、直径0.65mの円形に復元できる。検出面からの深さは0.15mである。中からは須恵器の塊と土師器の小皿が並べた状態で出土している。地鎮祭祀を行った可能性が考えられる。

図77の83～88はSK307出土の遺物である。83・84は「ての字」口縁の土師器小皿で、83は口径9.7cm、器高1.8cm、84は口径9.4cm、器高1.5cmである。85は底部外面に糸切り痕のある土師器小皿で、口径9.0cm、器高1.4cmである。86は口径11.0cm、器高1.7cmの土師器小皿である。87は土師器の环で、口径14.0cm、器高4.3cmを測る。底部外面に糸切り痕がある。88は束縛系須恵器塊で、口径15.8cm、器高6.1cmである。11世紀末頃のものと考えられる。

SK308

長径0.7m、短径0.65mの楕円形の土坑で、深さは0.15mである。遺物は出土していない。

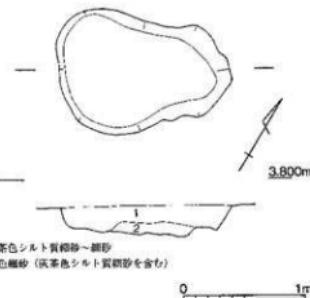


図72 SK304平面・断面図

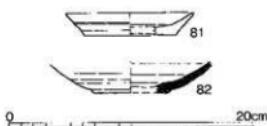


図73 SK304出土遺物実測図

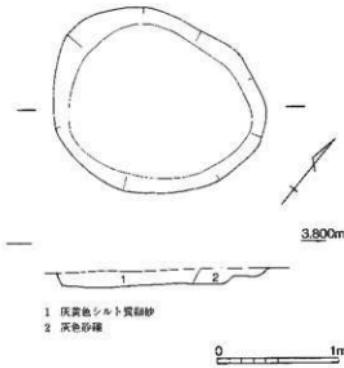
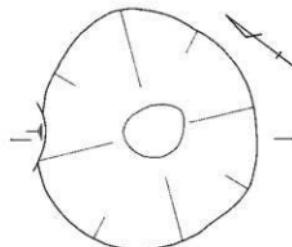


図74 SK305平面・断面図

SK309

直径1.5m、深さ0.7mの円形の土坑で、断面は逆台形で、部分的に袋状にオーバーハンプする。遺物は出土していない。



SK310

直径1.5m、深さ0.8mの円形の土坑で、部分的に袋状にオーバーハンプする。数条の溝の水を受け、あふれた水を別の溝へ流す、小さな調整池のような機能が考えられる。

図81の89はSK310出土の須恵器小壺である。高台径4.7cm、現高5.3cmである。平安時代前期のものと思われるが、小片のため確定できない。

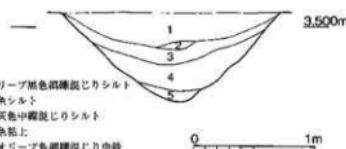


図75 SK306平面・断面図

SK311

長径0.8m、短径0.65m、深さ0.6mの楕円形の土坑である。底部から結晶片岩を含む扁平な石と共に須恵器壺、瓦器壺が出土している。土坑の用途は不明である。

図83の90～92はSK311から出土した遺物である。90・91は瓦器壺で90は口径15.2cm、器高5.7cmで内面の調整は廃止のため不明だが、外面上半にヘラミガキが残る。91は口径15.3cm、器高5.4cmで内面に丁寧なヘラミガキを施す。92は東播系須恵器壺で、口径15.6cm、器高5.1cmである。12世紀前半のものと考えられる。



SK312

直径約2.7mのやや楕円形の土坑で、深さは約0.3mである。耕作地に伴うものであろうと思われるが、用途は不明である。

図84の93・94はSK312から出土した遺物である。93は土師器小皿で口径12.3cmである。94は東播系須恵器壺の口縁部片で、口径14.7cmである。12世紀代と思われるが確定できない。

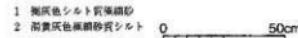


図76 SK307平面・断面図

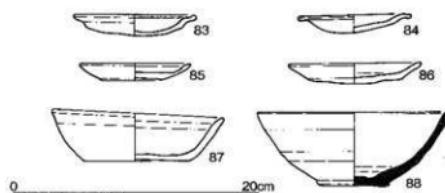
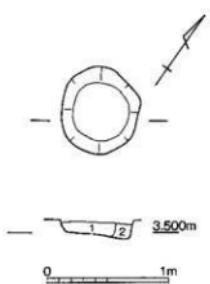
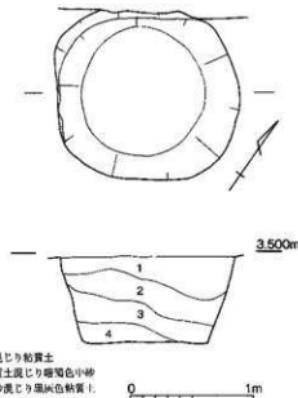


図77 SK307出土遺物実測図



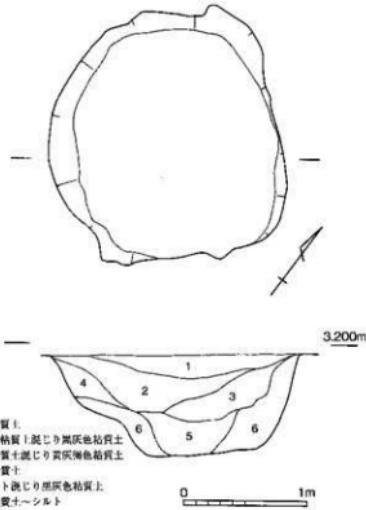
1 線状灰色シルト質粘土
2 淡灰褐色シルト質細砂

図78 SK308平面・断面図



1 淡灰色薄泥じり粘質土
2 黒灰色粘土泥じり暗褐色小砂
3 暗褐色中砂泥じり淡灰色粘質土
4 暗褐色中砂

図79 SK309平面・断面図



1 黒灰色粘質土
2 黒灰褐色粘質土泥じり黒灰色粘質土
3 黑灰色粘質土泥じり黄灰褐色粘質土
4 黑灰色粘質土
5 四色シルト泥じり黑灰色粘質土
6 黑灰色粘質土シルト

図80 SK310平面・断面図

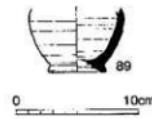


図81 SK310出土遺物実測図

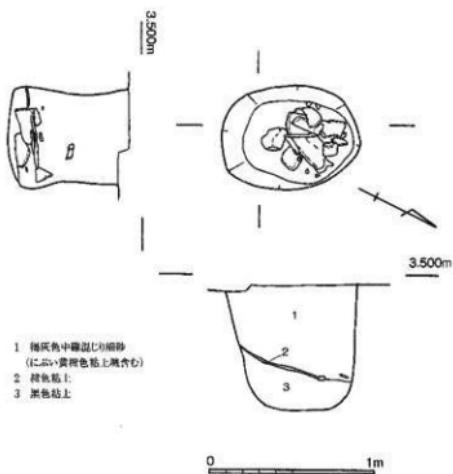


図82 SK311平面・断面図

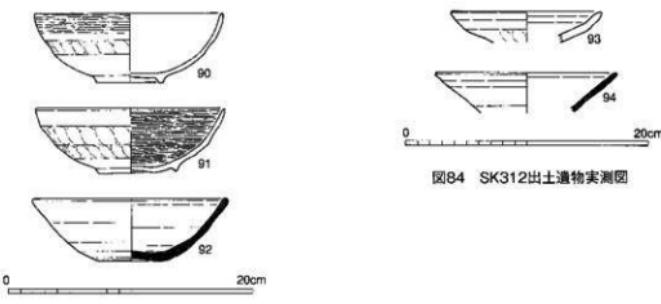


図83 SK311出土遺物実測図

図84 SK312出土遺物実測図

(5) 木棺墓

ST302

南北方向に主軸を置く木棺墓で、南北長1.9m、東西幅0.6mの長方形土壇内に南北長1.8m、東西幅約0.44mの木棺を安置している。棺材の厚さが約0.03mであることが、土色変化部から推定される。棺底には薄い粘土層が広がっており、それを除去したところ、棺の棟の痕跡を検出した。

棺内北西隅に土師器小皿2枚と、その上に赤漆塗りの皿、黒漆塗りの皿各1枚があり、それらの西に2個体の白磁碗の破片が3片と、長さ0.2mの鉄刀が先を南に、刃部を西に向かう状態で検出した。

図86の95～100はS T 302出土の遺物である。95・96は土師器小皿で、95は口径8.6cm、器高1.6cm、96は口径8.6cm、器高1.6cmである。97～99は中国製白磁碗で、97は山本分類IV 1 a類、99は瓈類と思われるが小片のため不明である。98は口径16.0cm、99は口径22.0cmである。99は97と同一固体の可能性がある体部片であるが接合はしない。100は全長20.4cm、茎長5.2cm、刃最大幅2.5cmの鉄小刀である。茎端部と切先部が欠損するがほぼ完形を保つ。茎から関部にかけ木質部が残る。12世紀末～13世紀にかけての時期が考えられる。

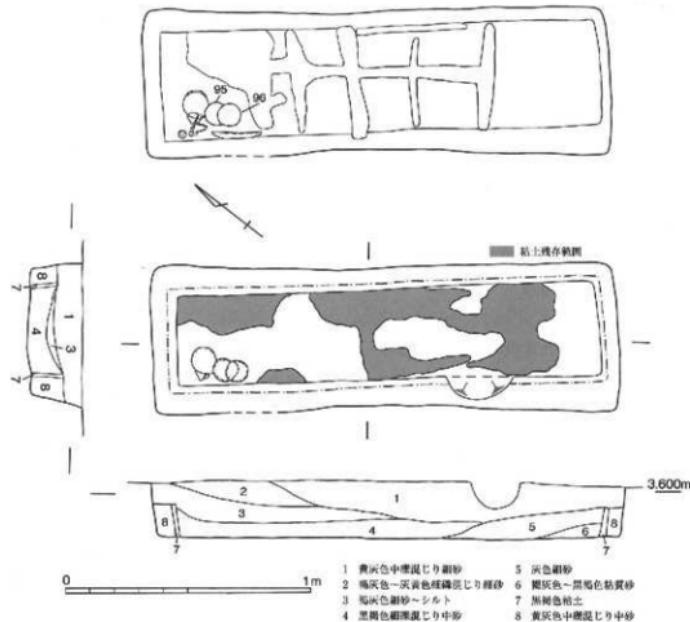


図85 ST302平面・断面図

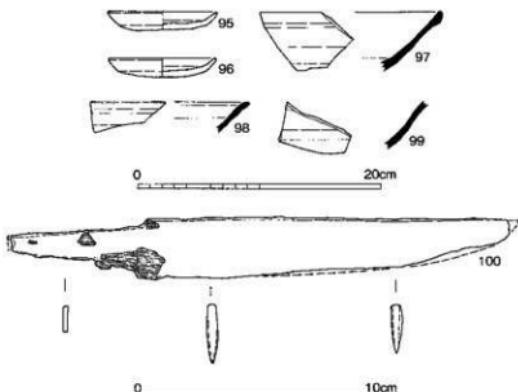


図86 ST302出土遺物実測図

(6) ピット

SP305

SK304の北西側にある直径0.35m、深さ0.35mの円形のピットである。

図87の101はSP305から出土した土師器小皿で、口径9.2cm、器高1.5cmである。12世紀代と考えられる。

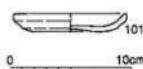


図87 SP305出土遺物実測図

SP306

SB317の付近にある直径0.3m、深さ0.42mの円形のピットである。

図88の102はSP306から出土した土師器小皿で、口径8.7cm、器高1.4cmを測る。摩滅のため調整等不明だが13世紀代と思われる。



図88 SP306出土遺物実測図

SP307

SD309の東側にある直径0.3m、深さ0.3mの円形のピットである。

図89の103はSP307出土の土師器小皿である。底部外面はナデで仕上げる。口縁部が大きく歪むが口径は約10cm、器高1.7cmである。13世紀代と思われる。



図89 SP307出土遺物実測図

SP308

SE308の北西側にある直径0.25m、深さ0.25mの円形のピットである。

図90の104はSP308出土の東播系須恵器捏鉢である。口径26.2cmで、口縁端部外面を外方に滴み出す。12世紀初め頃のものと考えられる。

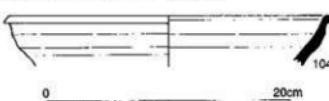


図90 SP308出土遺物実測図

SX309 SX310の東側にある直径0.2m、深さ0.35mの円形のピットである。

図91の105はSX309出土の同安窯系青磁碗、山本分類のI 4 aである。口径17.0cmである。12世紀中頃～後半頃と考えられる。



図91 SP309出土遺物実測図

(7) 不明遺構

SX301 2001年刊行の報告書において、SX301とした不明遺構の北端部を検出した。

図92の106～112はSX301出土の東播系須恵器壺である。106は口径16.8cm、107は口径15.8cmである。108は底径6.0cm、109は4.6cm、110は6.0cm、111は5.0cm、112は6.0cmで、底部と体部の境界がやや曖昧になっているものが多い。12世紀後半以降のものと考えられる。

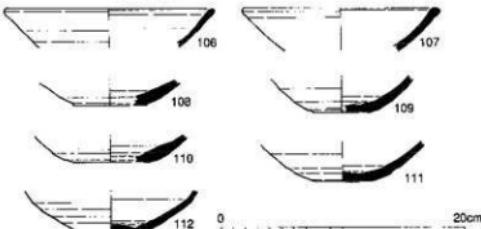
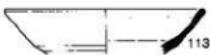


図92 SX301出土遺物実測図

SX305 長径1.7m、短径1.0mの楕円形の遺構で、深さは0.9mである。水溜の可能性が考えられる。

図93の113～115はSX305出土の東播系須恵器壺である。113は口径16.0cm、114は底径5.8cm、115は底径5.0cmを測る。12世紀前半頃と思われる。

SX306 短径1.4m、長径1.6m以上、深さ約0.1mの楕円形の窪みで、用途は不明である。



SX307 長辺1.3m、短辺1.1mの隅円方形の遺構で、深さは1.33mである。水溜の可能性が考えられる。



SX308 長径0.72m、短径0.46m、深さ0.09mの遺構である。土師器の破片が出土しているが、器種、時期共に不明である。



図93 SX305出土遺物実測図

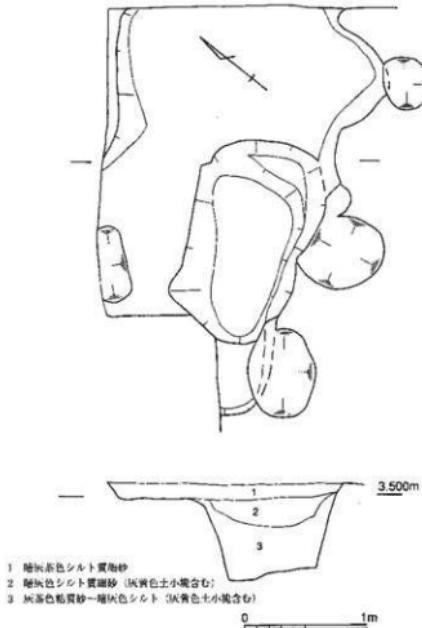


図94 SX305平面・断面図

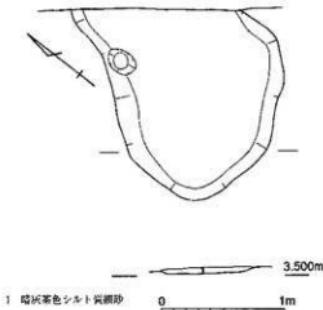


図95 SX306平面・断面図

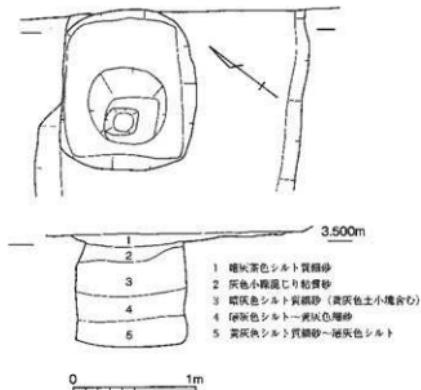


図96 SX307平面・断面図

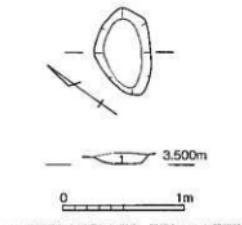


図97 SX308平面・断面図

SX309

直径約2.0m、深さ約1.0mの円形の造構である。付近に建物跡がないため、耕作地に関係する水溜と考えられる。

図99の116～118はSX309からの出土遺物である。116は口径17.0cmの東播系須恵器壺である。117は中国製白磁碗で山本分類のⅡ1類である。口径17.2cmを測る。118は上師器甕で口径30.8cm、胴部最大径32.0cmである。体部内面は摩滅のため調整不明だが、外面はタテ方向にヘラケズリを加える。12世紀代と考えられる。

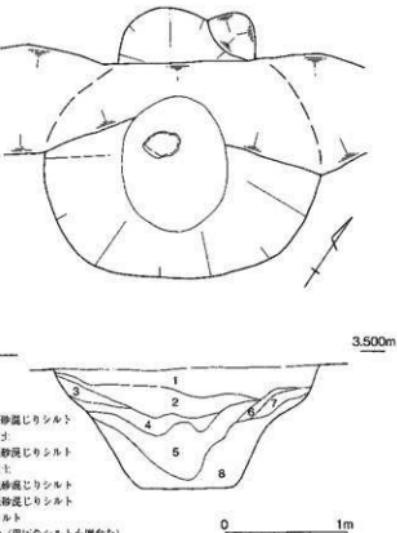


図98 SX309平面・断面図

SX310

～ SX312

SX310は、直径約8.0m、深さ1.5mの円形の造構で、埋土はレンズ状の堆積である。

SX310に切られて、北側に2箇所ある三角形状の造構がSX311で、同じくSX310に切られている、東側の舌状の造構がSX312である。

それぞれの初期堆積は、黄褐色系の細砂であり、造構面での検出時には、輪郭が明瞭に確認された。埋土の堆積状況から、洪水などで埋もれた水溜を、掘り返して修復しながら使用していたものと考えられる。

図102の119～128

はSX310から出土した

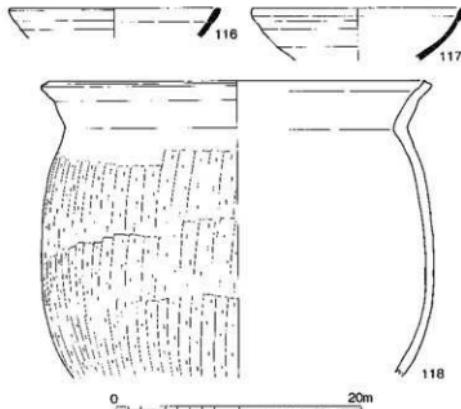


図99 SX309出土遺物実測図

遺物である。119は土師器小皿で口径12.6cm、器高は約2.1cm。120は土師器鉢で口径22.2cmである。121は瓦器塊で高台部を欠く。口径15.0cm、現器高4.3cmである。内面は摩滅により暗文を確認することができない。122も瓦器塊で口径13.0cm、器高4.4cmである。内面の暗文は難で、外面はない。123は綠釉陶器塊の底部片で、底径8.1cmである。124・125は中国製山磁碗で、山本分類のIV 1a類である。124は口径16.8cm、125は口径17.1cmである。126は同類の碗底部と思われるもので、高台径5.6cmである。127・128は

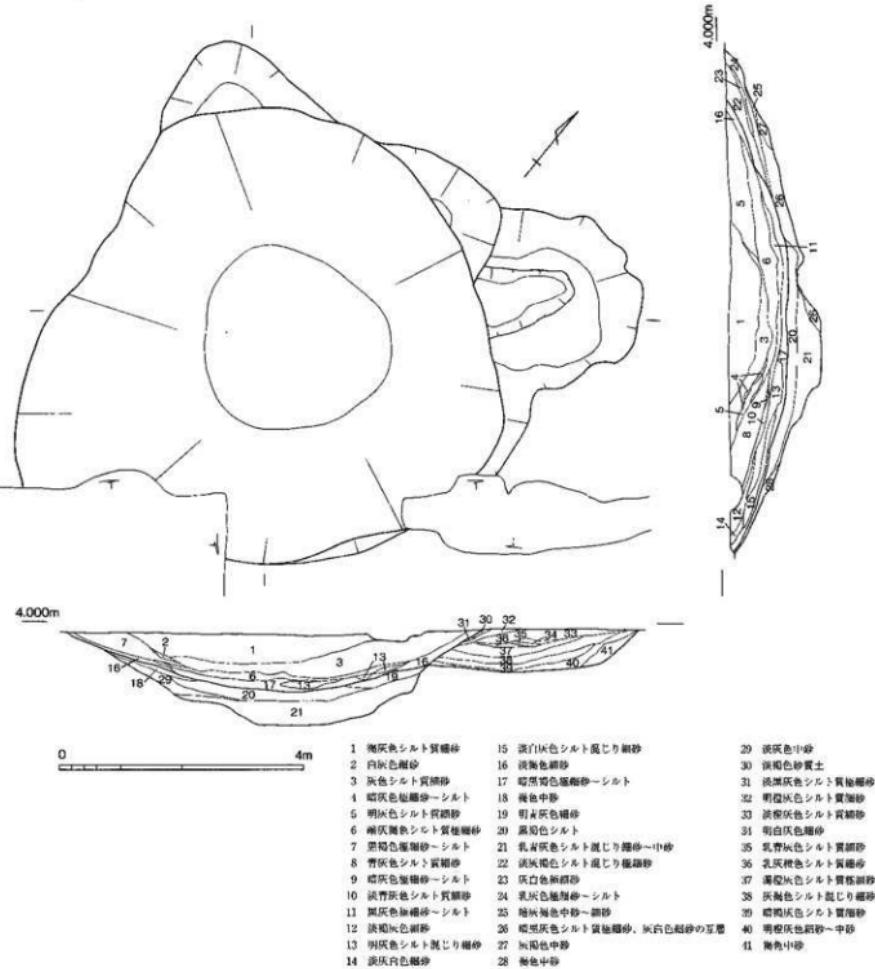


図100 SX310 ~ SX312平面・断面図

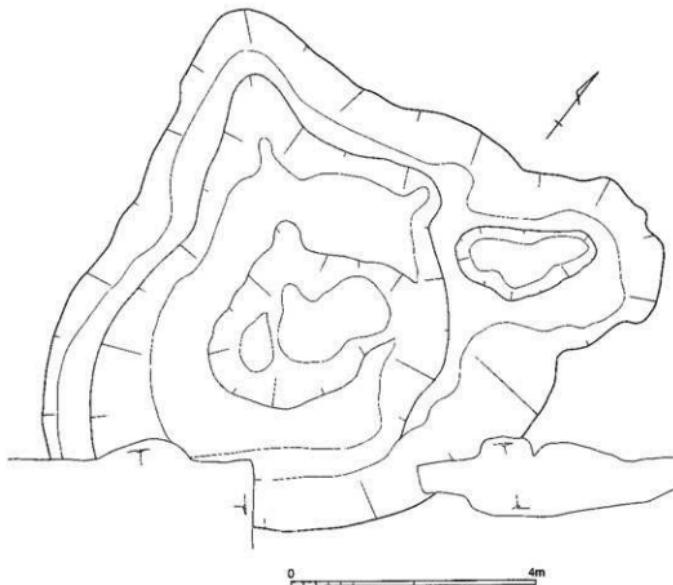


图101 SX310～SX312发掘平面图

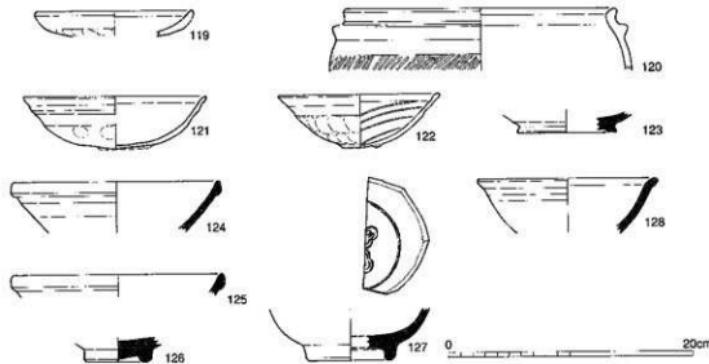


图102 SX310出土遗物实测图

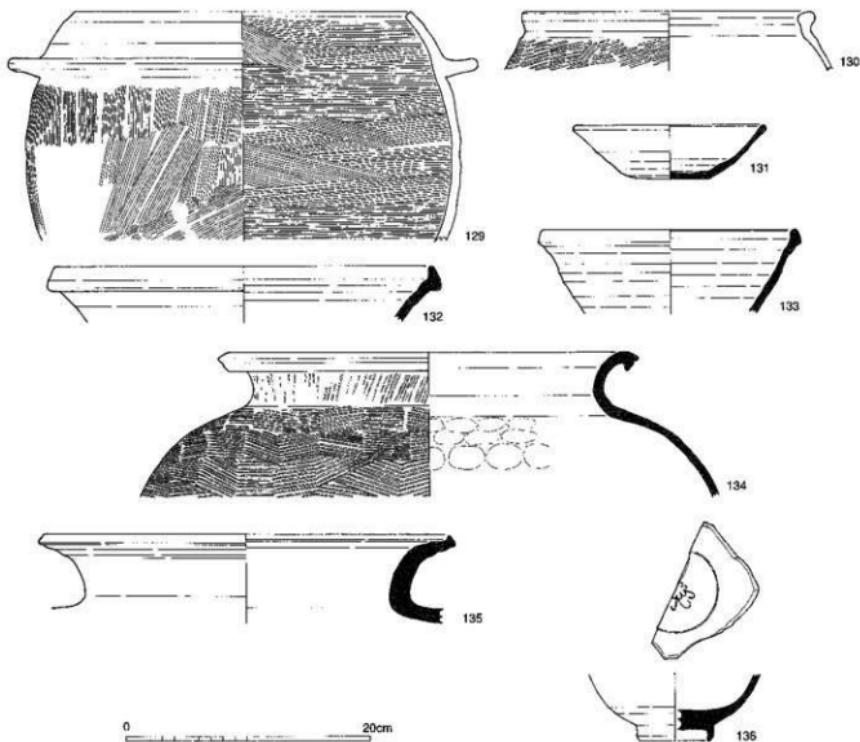


図103 SX312出土遺物実測図（1）

中国製青磁碗で127は高台径6.6cmを測り、見込みに花弁の印刻がある。128は口径14.4cmを測る。SX310の時期は12世紀～15世紀に及んでいる。

図103の129～136はSX312から出土した遺物である。129は土師器羽釜で、口径27.6cm、体部の内外面をハケで仕上げる。130は上師器鍋で口径23.0cm、体部外面に右上がりのタタキを施す。131は東播系須恵器塊で口径15.5cm、器高4.5cmである。132・133は東播系須恵器挂鉢で132は口径31.0cm、133は口径20.6cmである。134は東播系須恵器壺で口径34.4cmを測る。口縁端部は上下に肥厚する。体部外面に平行タタキ、頸部外面はタタキをナデで消している。体部内面はユビオサエ痕を残す。135も東播系須恵器壺と思われる。口径34.2cmで、口縁端部を上方に摘み上げて終わる。136は中国製青磁碗で見込みに花弁の印刻がある。高台径5.7cmである。これらの遺物は13世紀～14世紀代と思われる。

また、SX310から6点とSX312から1点の木質遺物が出土している。SX310からの出土品は丸材、板材などの加工材であるが、用途は判然としない。SX312出土の137は、丸材の一端を加工し、円筒に円盤を被せたような形状を削りだしている。一端を欠損するため全長は不明であるが、残存長16.5cm、直径2cmを測る。欠損側の対応の端部付近

について、端から約4～5mm残して幅約1cm削りこみ、端部を1mm前後突出させている。用途としては何らかの工具または器物の柄としての使用が考えられるが、詳細は不明である。

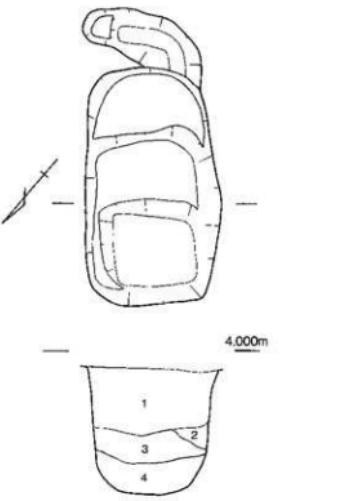
SX313 北西方向に主軸を置く、長辺2.0m、短辺1.0m、深さ1.0mの隅丸長方形の遺構である。南側短辺には東へ延びる溝が取り付いている。遺構内部の、南側から北側に向かって、階段状のテラスがある。遺物は出土していないので、時期は不明で、用途についても不明である。

SX314 SD304の北に隣接した、幅0.7m、長さ2.0m以上、深さ約0.1mの遺構で、南側がSD304に切られている。用途は不明である。

図106の138～140はSX314から出土した遺物である。138は「ての字」口縁の土師器皿で、口径9.4cm、器高1.4cmである。139は土師器壇で口径18.0cmである。140は東播系須恵器壇で口径19.2cmである。11世紀後半～末頃と思われる。



図104 SX312出土遺物実測図(2)



- 1 乳白色小嘴沿じりシルト質窓形（乳白）灰色シルト質細繊小窓合口
- 2 乳白色セシルト質窓形
- 3 乳白色セシルト質窓形
- 4 細黒灰包縫繊シルト

図105 SX313平面・断面図

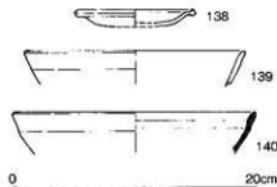


図106 SX314出土遺物実測図

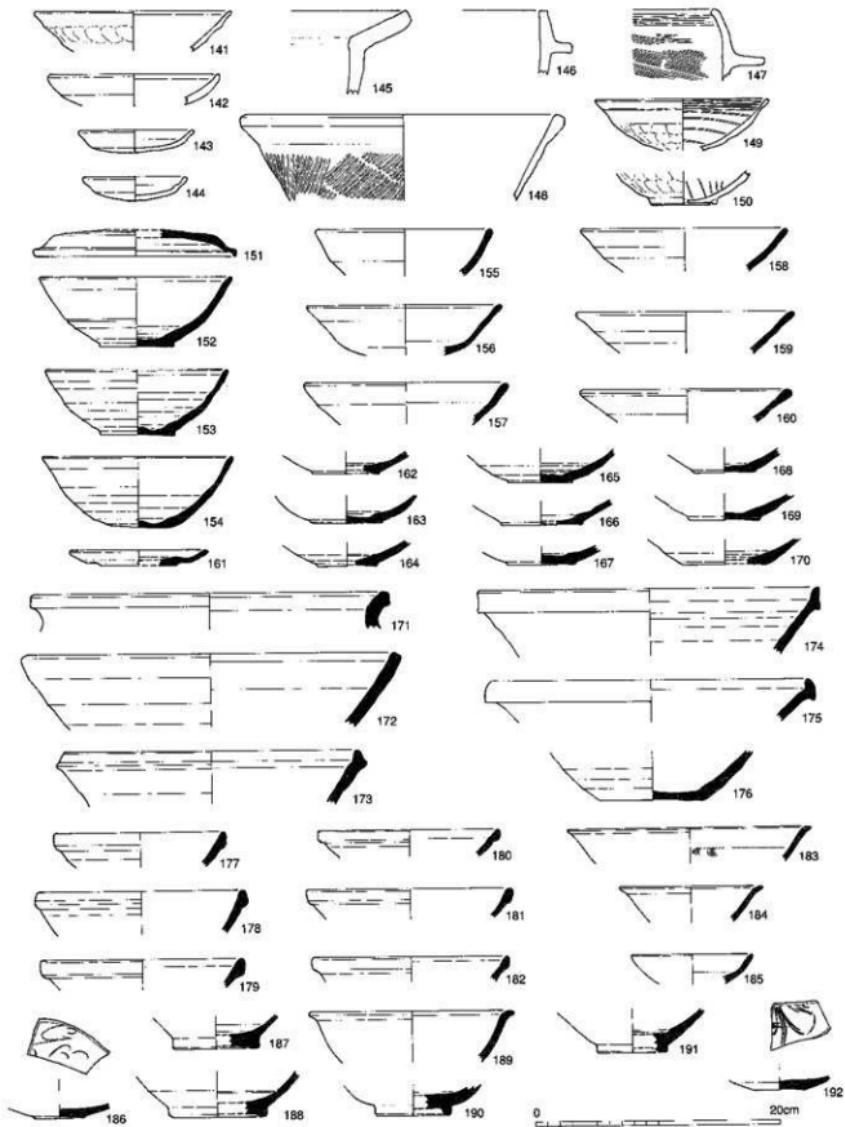


图107 久保町6丁目地区包含層出土遺物実測図(1)

(8) 包含層出土遺物

図107の141～192及び図108の193～195は久保町6丁目地区の包含層出土遺物である。図107の141～148は土師器、149・150は瓦器、151～176は須恵器、177～188は中国製白磁で189～192は中国製青磁である。11世紀～12世紀代のものを中心とするが、152は9世紀代、174・175などは13～14世紀代と思われる。

図108の193～195は平安時代の瓦類で、193は東播系の軒平瓦である。11～12世紀と考えられる。194・195はそれぞれ丸瓦、平瓦の破片である。

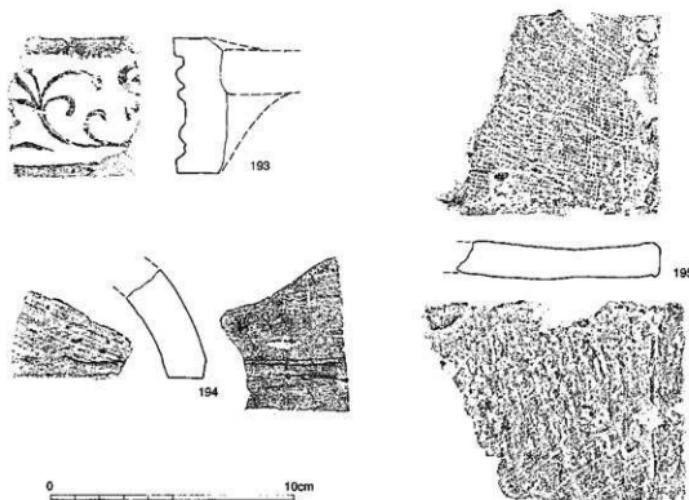


図108 久保町6丁目地区包含層出土遺物実測図(2)

(注1) 丹治康明「東播系須恵器について」『中近世土器の基礎研究』 日本中世土器研究会 1985年10月

森田稔「東播系中世須恵器化窯の成立と展開」『神戸市立博物館紀要』第3号 神戸市立博物館 1986年3月31日
池田征弘編「神出窟跡群・神出浄水場鉢張工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 -」兵庫県文化財調査報告第171号
兵庫県教育委員会 1998年3月31日

(注2) 山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の上器・陶磁器』 中世土器研究会 1995年12月9日

(注3) 伊野近富「土師器皿」『概説中世の上器・陶磁器』 中世土器研究会 前掲書

小森俊寛・上村憲寧「京都の都心遺跡から出土する上器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財團法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年11月29日

(注4) 尾上実・森島康雄・近江秀秀「瓦器碗」『概説中世の上器・陶磁器』 中世土器研究会 前掲書

(注5) 森隊「黒色土器」『概説中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会 前掲書



図109 二葉町6丁目 遺構平面図

第5章 二葉町6丁目の調査

二葉町6丁目では、掘立柱建物8棟、井戸6基、土坑14基、墓1基、ピット、溝、鶴嘴溝多数を検出した。また、調査区南端より約20m北の地点より南は、約0.4mの段を成して下がっており、殆ど遺構が存在せず、近世以降の耕地化により遺構面が削平を受けたものと思われる。

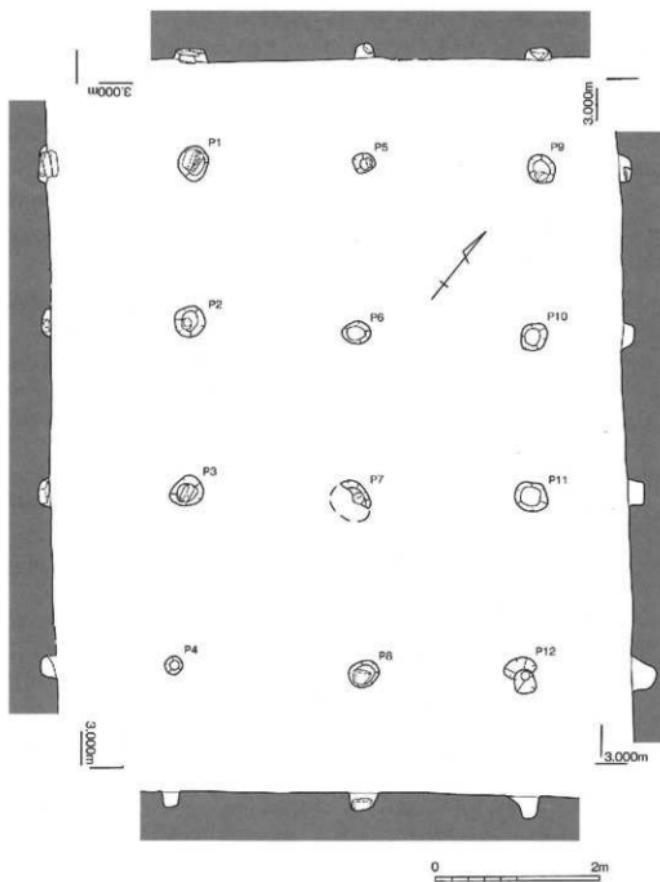


図110 SB322平面・断面図

(1) 挖立柱建物

SB322

東西2間(4.25m)、南北3間(6.1m)の総柱の建物である。柱間は、東西のP1～P5～P9が、2.1m、2.15m、南北のP1～P2～P3～P4が2.0m、2.0m、2.1mである。柱穴の掘形は直径0.2～0.4mの円形で、根石を据えているものが多い。柱痕は確認できなかった。

図111はSB322からの出土遺物である。196は土師器小皿で口径13.4cmである。197は右溝土鉢で現長4.3cmを測る。表裏両面に溝を設ける。12世紀末以降のものと思われるが、小片のため断定できない。

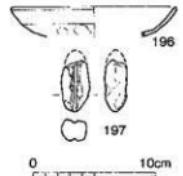


図111 SB322出土遺物実測図

SB323

搅乱や井戸によって柱穴のいくつかは破壊されているが、東西3間(6.1m)、南北4間(7.6m)の総柱の建物に復元できる。柱間は、東西のP1～P6～P11～P16が、2.0m、2.0m、2.1mで、南北のP1～P2～P3～P4～P5が、1.8m、2.1m、1.9m、1.8mである。柱穴の掘形は直径0.2～0.4mの円形である。柱痕は確認できなかった。

図112の198はSB323出土の土師器小皿である。口径7.0cm、器高1.4cmである。12世紀後半頃と考えられる。

SB323より西については柱穴が密集しており、以下に述べる掘立柱建物4棟の他、建物としてまとまらない柱穴を多数確認した。



図112 SB323出土遺物実測図

SB324

西側が從前建物の基礎により破壊されているが、東西2間(4.2m)以上、南北5間(10.9m)の総柱の建物である。柱間は、東西のP1～P7～P13が、2.1m、2.1m、南北のP13～P14～P15～P16～P17～P18が2.4m、2.0m、2.3m、2.0m、2.2mを測る。柱穴の掘形は直径0.2～0.6mの円形で、根石を据えているものもある。柱痕は確認できなかった。

図113の199はSB324出土の東播系須恵器碗底部である。底径5.7cmを測る。11世紀末～12世紀のものと思われる。



図113 SB324出土遺物実測図

SB325

内側及び南側が從前建物の基礎により破壊されているが、東西1間(2.0m)以上、南北5間(9.7m)以上の総柱の建物である。柱間は、東西のP1～P7が2.0m、南北のP7～P8～P9～P10～P11～P12が、1.7m、2.1m、1.8m、2.0m、2.1mである。柱穴の掘形は直径0.2～0.4mの円形で、根石を据えているものもある。柱痕は確認できなかった。

SB326

東西1間(2.4m)、南北2間(3.5m)の建物で、柱間は、東西のP1～P4が2.4m、P3～P6が2.1mであり、南北のP4～P5～P6は1.8m、1.7mを測り、平面形とし

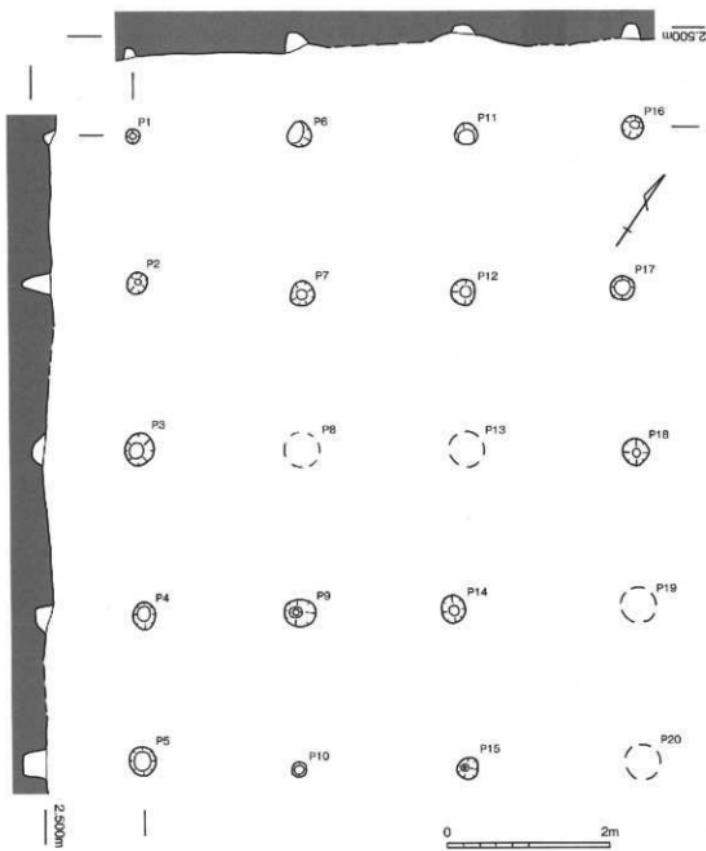


图114 SB323平面·断面图

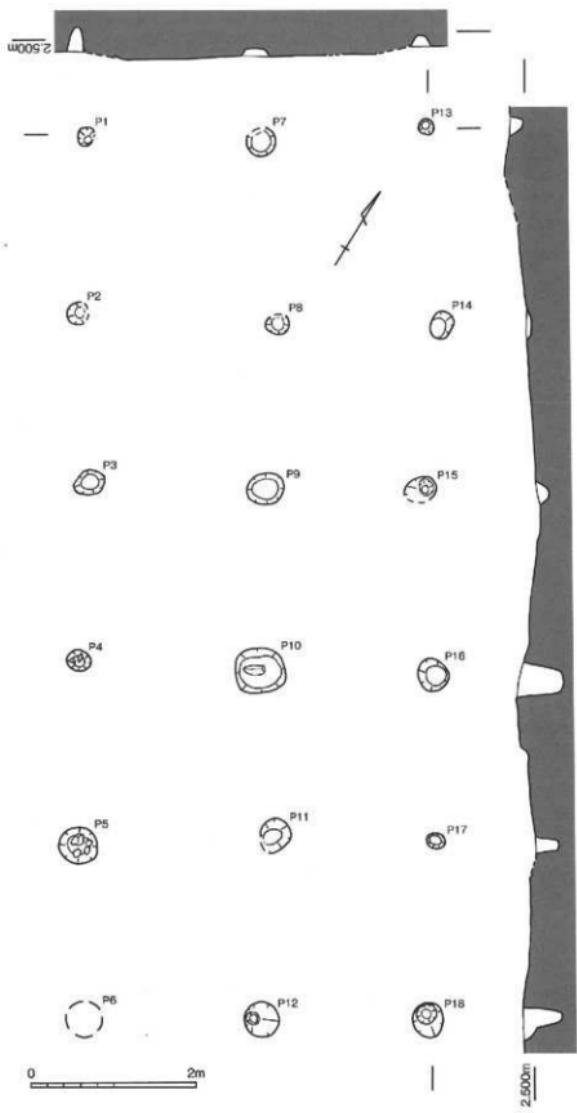


图115 SB324平面·断面图

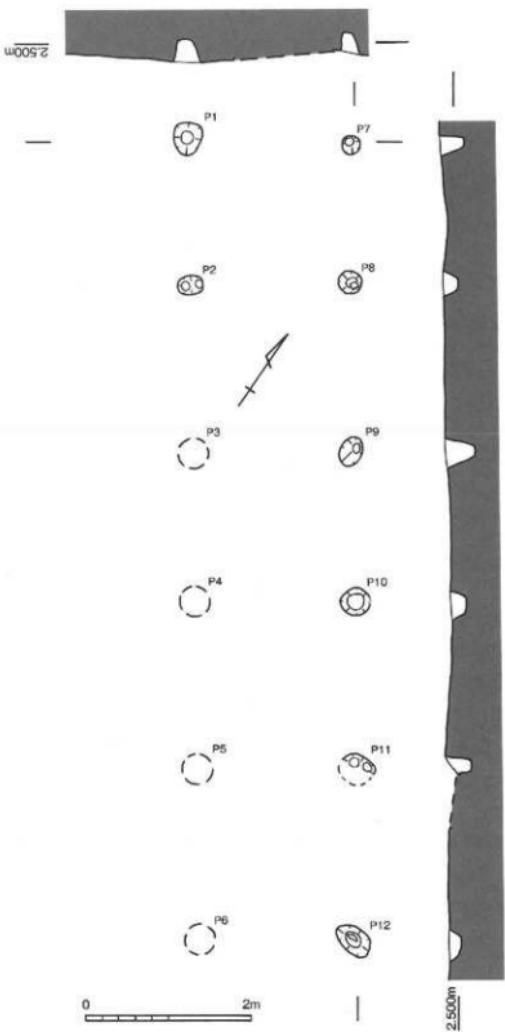


圖116 SB325平面・断面図

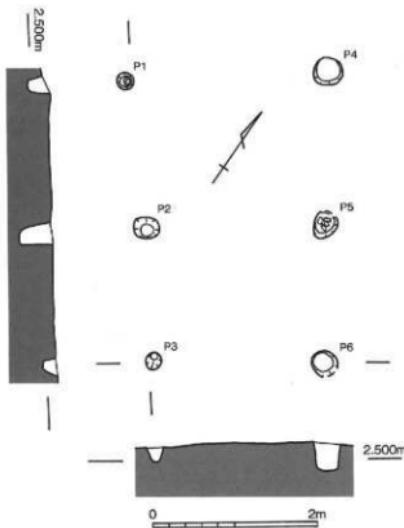


図117 SB326平面・断面図

てはわずかに台形を呈する。柱穴の掘形は直径0.2～0.4mの円形で、根石を据えてあるものも見受けられる。柱痕は確認できなかった。

図118の200はSB326出土の土師器小皿である。口径9.7cm、器高1.8cm以上で、「ての字」口縁の形態を残すものである。11世紀末～12世紀のものと考えられる。

SB327 東西1間(2.2m)、南北2間(3.2m)の建物である。柱間は、東西がP1～P4で2.2m、南北がP4～P5～P6で、1.7m、1.5mを測る。柱穴は直径0.2～0.4mの円形で、柱痕は確認できなかった。

図120の201は土師器大皿で、口径15.4cm、器高3.3cmである。体部外面に指頭圧痕を残す。13世紀代と思われるが明確ではない。202はSB327出土の中国製白磁皿で、口径10.0cm、器高2.2cmである。見込みに草花の印刻がある。山本分類のⅢ2 b類で13世紀前後のものと思われる。

SB328 調査区南東部で、隣接した2棟の建物を検出した。SB328は東西5間(10.8m)、南北3間(4.9m)の総柱の建物である。柱間は、東西のP1～P2～P3～P4～P5～P6が、2.2m、2.2m、1.9m、2.2m、2.3mで、南北はP6～P12～P18～P24が、1.2m、1.9m、1.8mを測るが、P2～P8～P14～P20では、1.2m、2.6m、1.2mを測り、中央の



図118 SB326出土遺物実測図

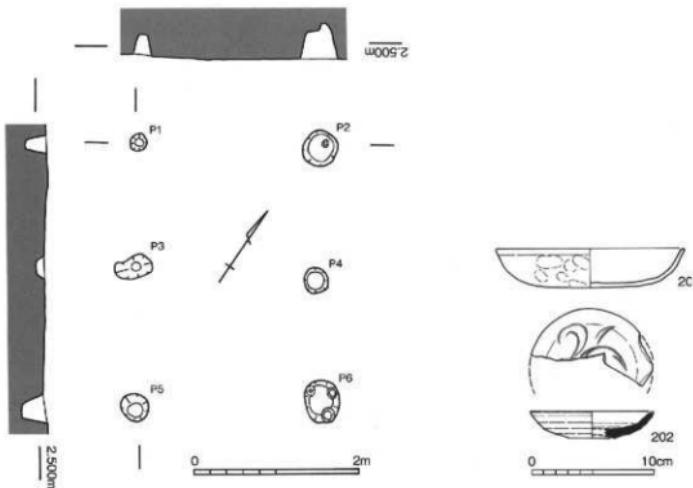


図119 SB327平面・断面図

図120 SB327出土遺物実測図

柱間が、両側に比べてかなり広くなっている。柱穴の掘形は直径0.3～0.5mであるが、柱痕は確認できなかった。

図122はSB328から出土した遺物である。203は土師器壺で口径12.8cm、器高3.8cmである。内面一部にハケ目が残る。204は黒色土器Aである。口径15.0cmで内面を丁寧にヘラミガキする。10世紀代のものと考えられる。

SB329

東西2間(4.5m)、南北2間(3.3m)の純柱の建物である。柱間は、東西のP1～P2～P3が、2.1m、2.4m、南北のP1～P4～P7が1.6m、1.7mである。柱穴の掘形は直径0.3～0.5mで、柱痕が確認できるものもある。SB329はSB328の附属屋と考えられる。

図123の205はSB329出土の棒状有孔土錘である。完形で全長6.6cm、最大径1.2cmを測る。両端部に直径4mmの穿孔がある。時期は不明である。

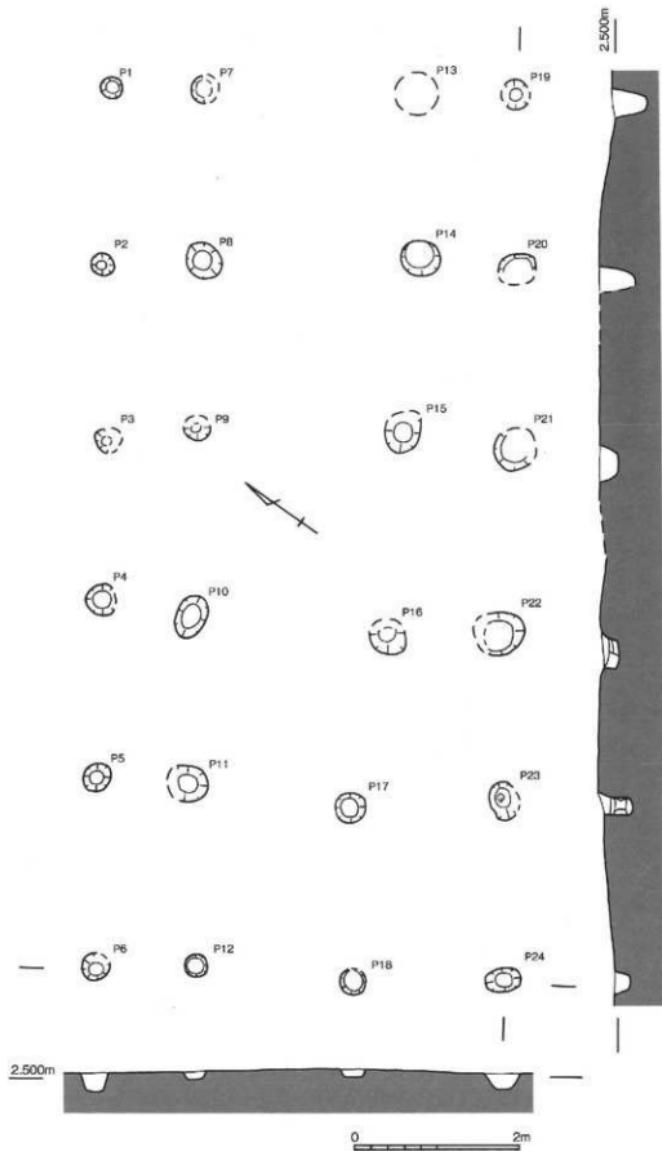


図121 SB328平面・断面図



图122 SB328出土遗物实测图

图123 SB329出土遗物实测图

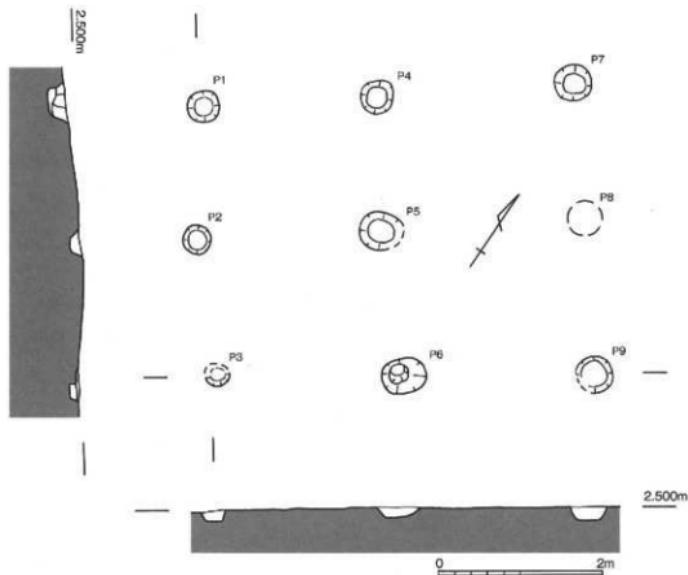


图124 SB329平面·断面图

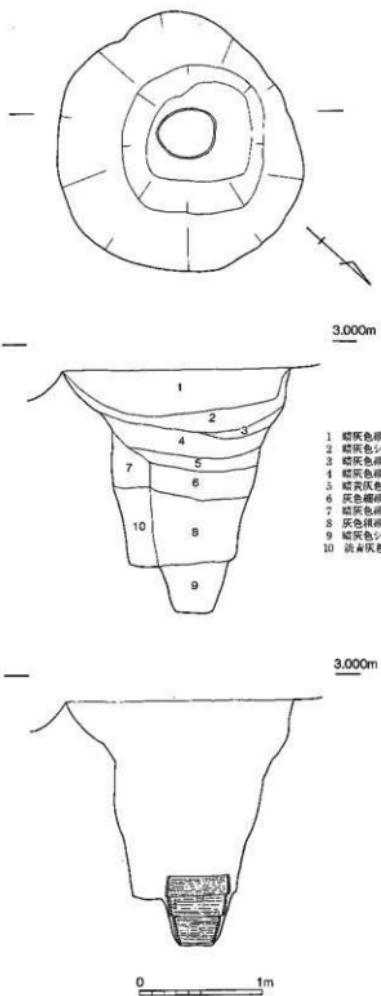


図125 SE315平面・断面図

(2) 井戸

SE315

東西約2.1m、南北約2.0mを測る円形の掘形の井戸で、深さは約1.95mを測る。

井戸の構築部材は廃棄時に全て抜き取られ、底部に径約0.4～0.5mの曲物を3段据え付けている。曲物の高さは3段で約0.55mである。

廃棄時に構築部材をすべて抜き取り、それ以前の堆積土層もあまり確認できない。た

だし、井戸底部の曲物内部から須恵器塊が出土している。井戸廃棄後の埋土からも同じく須恵器塊が出土している。

図126はSE315から出土した遺物である。206～209は井戸埋土上層から、210・211は同下層から、そして212・213は底部曲物内からのものである。206・207は土師器小皿で前者は口径9.2cm、器高13cm。後者は口径8.8cm、器高1.5cmである。两者共底部外面に糸切り痕を残す。208・209は東播系須恵器で208は口径16.8cm、209は底径4.8cmである。210は土師器小皿で口径10.0cm、器高1.9cm。211は東播系須恵器で口径15.0cm、器高5.2cmである。212・213も東播系須恵器で前者は口径15.2cm、後者は口径16.2cm、器高6.4センチである。井戸底部の曲物内出土の須恵器は11世紀代であるが、埋土上層～下層出土の遺物は12世紀初頭～前半と考えられる。これらのことから11世紀代に機能し、12世紀前半に廃絶した井戸だと考えられる。

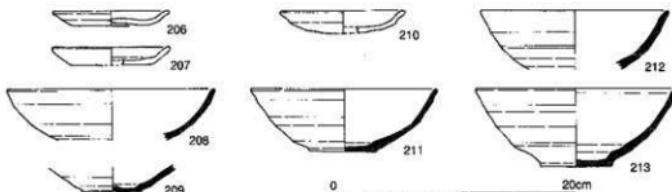


図126 SE315出土遺物実測図(1)

図127は、SE315を構成する井戸材と、井戸内部より出土した遺物である。なお井戸材の内、底部に据えられていた曲物が3点あったが、2点については取り上げ時に崩壊しており、写真・図に反映できていない。

SE315の構造は出土状況からは推測が困難であるが、出土木材の構成から、縦板組みの井戸であったことが想像される。多数の板材が出土しており、その内9点について図示している。これらは大きく3型式に分類できる。第1は比較的幅が狭く(12～14cm)平坦に調整されたもの(214、215、220)。第2は幅が20～23cm幅の割り板で、平板調整するものの、芯材面の中央部および芯材面の両側部に湾曲面を残すもの(216～218、219、221)。第3は幅44cm、厚さ約5cmと重厚で、大きく湾曲するクスノキ製のもの(222)である。前二者については縦板組み井戸の専用材と考えられるが、第3の部類は割り貫き井戸の非筒として製造されたものの転用とも考えられるが、定かではない。また、クスノキは船材としての使用例があり、船材の転用の可能性もある。

223、225はヒノキ製の曲物である。直径については定かではない。223は高さ12.6cmで檜皮継ぎ、内面に墨書き線が施されている。

224は縦板組みの桶板の1枚である。幅5cm、高さ15.4cmのヒノキ製である。

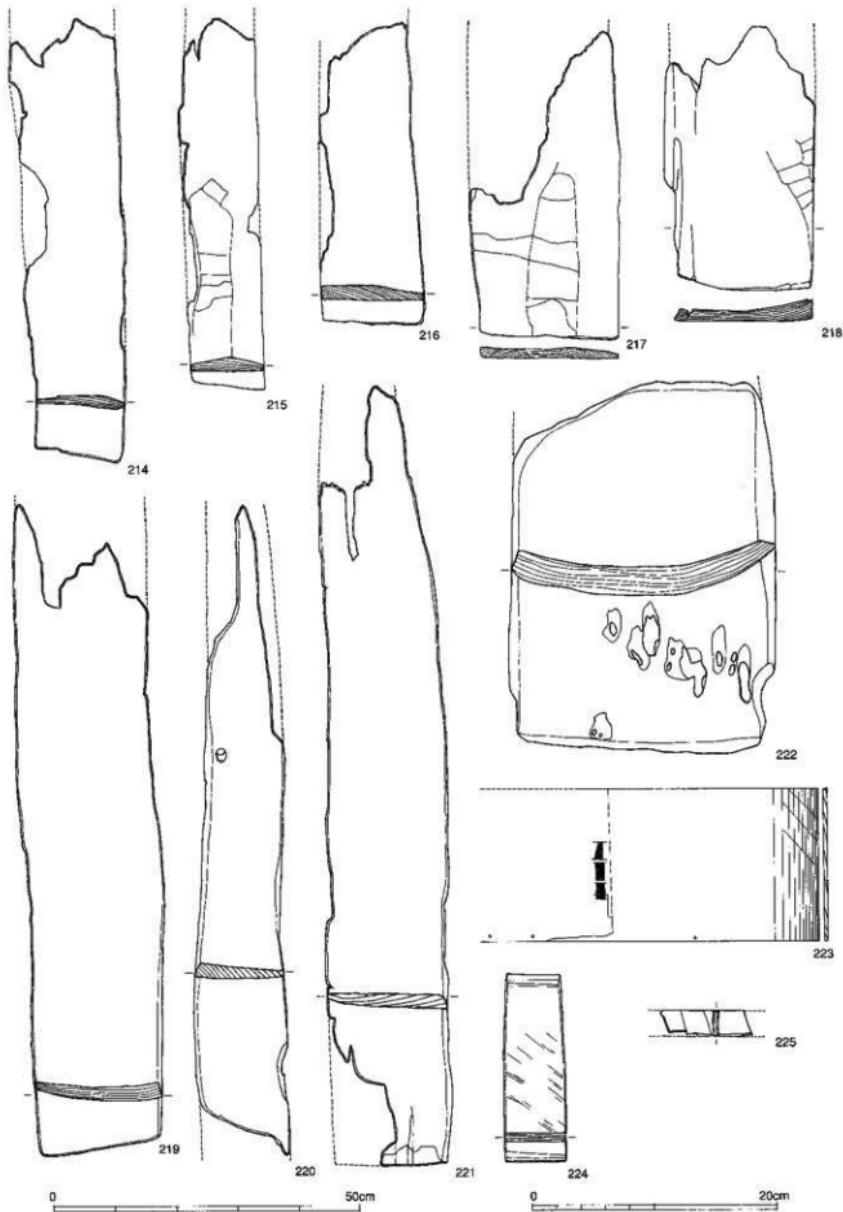


図127 SE315出土遺物実測図(2)

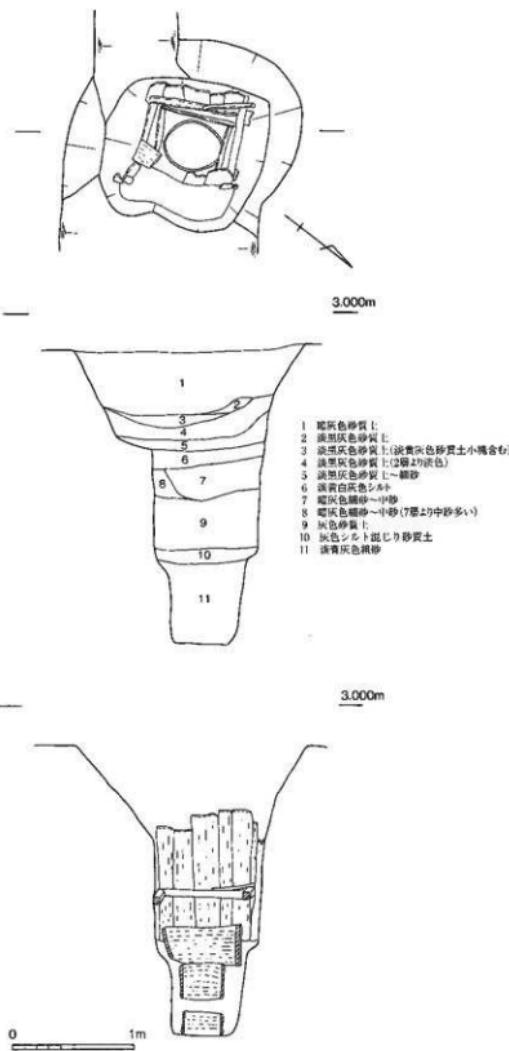


図128 SE316平面・断面図

SE315の東で確認した、東西約2.0m、南北約1.8mの方形の掘形を持ち、深さ約2.4mを測る木組み井戸である。木組みは東西約0.7m×南北0.8mで、縦板と横棟、根石に据えた隅柱により、井戸上面から深さ約1.8mまで構築している。その下面で、縦幅（長さ）東西0.55m、南北0.6mで横幅（深さ）約0.3mの方形の横板による、蒸籠組みの木枠を埋め込んでいる。木枠の内面底部に中疊を敷き詰め、中央に2段の曲物を埋め込み、集水施設としている。曲物の径は約0.5mで、敷き石上面から曲物底部までは、深さ約0.6mを測る。

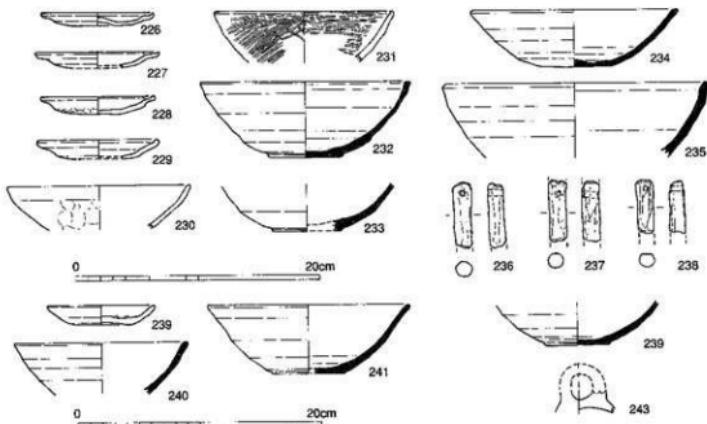


図129 SE316出土遺物実測図（1）

図129の226～243はSE316から出土した遺物で、226～238は上層から、239～241は下層及び曲物内から、242・243は井戸掘形内から出土した。226～229は「ての字」口縁の土師器小皿で226は口径9.0cm、器高1.1cm、227は口径10.0cm、228は口径9.2cm、器高1.4cm、229は口径9.8cm、器高1.6cmである。230は土師器塊で口径14.8cmを測る。231は口縁端部内面に一条の沈線を巡らす補渠型の瓦器塊で口径14.6cmである。232～235は東播系須恵器で、232は口径17.0cm、器高6.1cm、233は底部の破片で底径5.5cmである。234は口径16.5cm、器高4.8cm、235は捏鉢で口径21.2cmを測る。236～238は棒状有孔土錐でいずれも完形ではない。236は現長5.5cm、最大径1.5cm、237は現長5.1cm、最大径1.4cm、238は現長4.5cm、最大径1.4cmである。239は土師器小皿で底部外間に糸切り痕がある。口径8.6cm、器高1.6cmである。240は東播系須恵器塊で口径14.0cmである。241も東播系須恵器塊で口径16.2cm、器高5.7cmである。242は同じく東播系須恵器塊の底部破片で底径5.0cmを測る。243は土師器の飯蛸壺である。井戸上層には11世紀～12世紀後半の遺物を含むが、下層は12世紀前半までのものである。

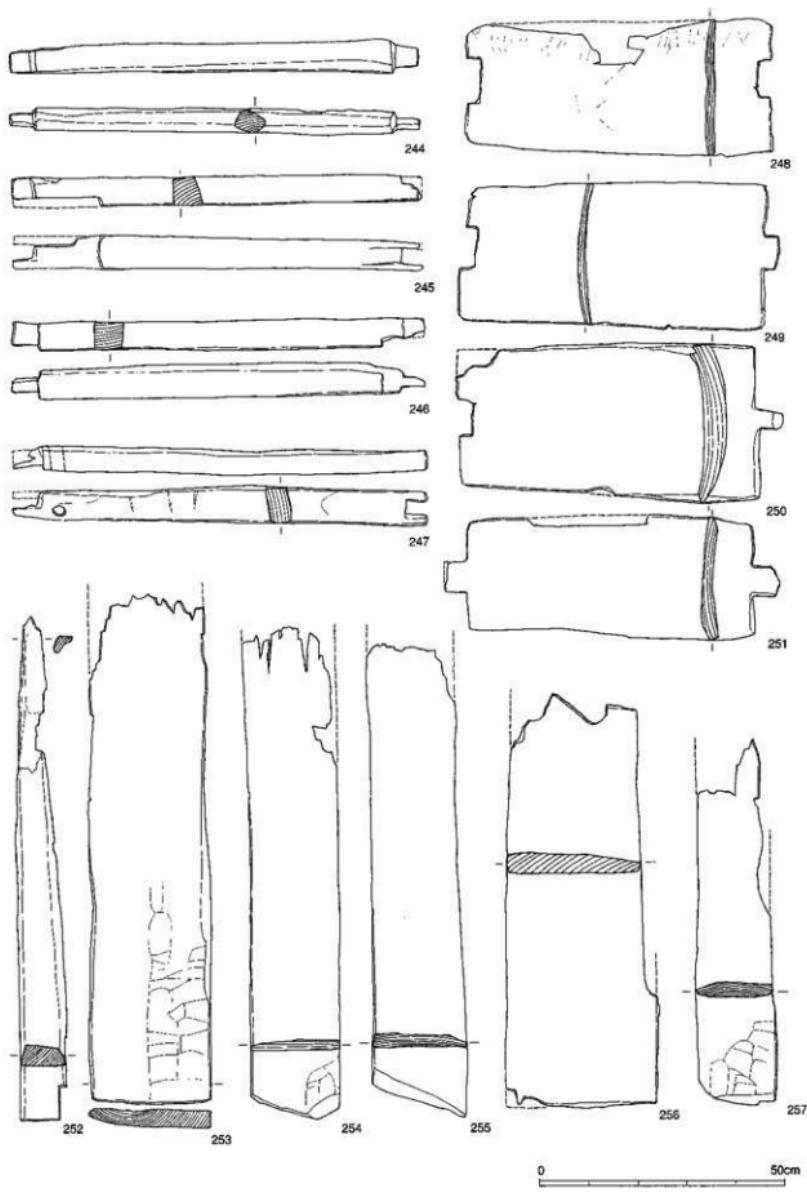


図130 SE316出土遺物実測図（2）

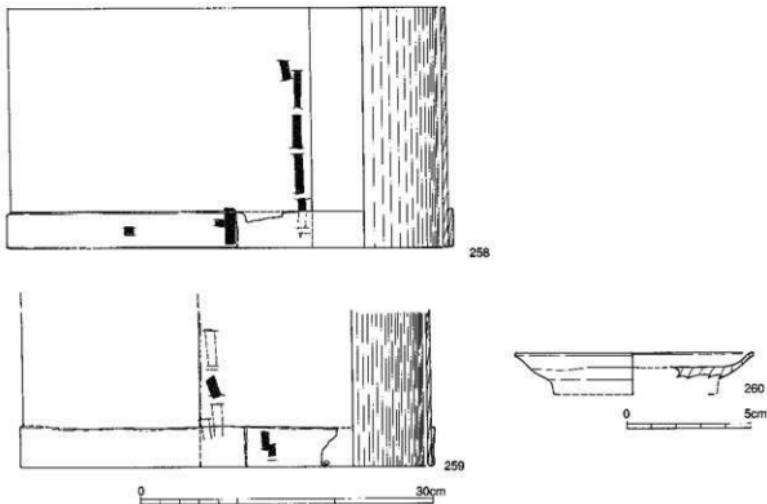


図131 SE316出土遺物実測図(3)

図130・131はSE316出土の木製品である。井戸は内側底から、2段の曲物、4枚の横板蒸籠組み、隅柱+横桟+縦板組みの、3構造で構成されている。

252はヒノキ製の隅柱で、1本のみ出土している。9.5cm×4cmの全面調整された角材を使用しており、長さは上端を欠損しつつ103cmを測る。枘穴は開けられていない。

244～247は横桟である。端部形状に2通りあり、長方形断面の太納を形成するもの(244、246)と、側面観が「コ」状を呈するもの(245、247)がある。これらは互いに組みあい、「ロ」字を構成していた。有効内寸は75cm内外を測る。図示したものについてはすべてヒノキ製であるが、それ以外にスギ材を使用したものもある。これらに補助されて縦板が立て並べられていた(253～257)。いずれも割り板を平板加工したものであるが、法量は幅18cm～31cmとまちまちで、画一性に乏しい。材にはモミ属が使用されている。

横板の蒸籠組みされた枠は4材構成である。有効内寸は56～58cmで、高さ28～32cm、厚さは2cm程度の薄いものと約5cmの厚いものがある。これらは端の組み合わせ部の形状に3型式が存在する。第1は両端を切り欠き、「凹」状を呈するもの(248)。第2は片面が「凹」、反対が「凸」となるもの(249、250)。第3は両端に「凸」部を形成するもの(251)である。

井戸底部中央にはヒノキ製の曲物が縦並びに据えられていた(258、259)。下部が259で上部が258であるが、両者の間には数cmの間隔が空き、259の腐食によるものか元來の空きと考えられる。258は直径46cm、高さ28cmを測る。本体は樺皮により縫じられる。また下辺には幅38cmの縁がめぐり、強度を与えられている。

259も258と同様の形状を呈するが、こちらは直径42cmとやや小ぶりで、高さは上端を欠損するため未詳である。

260は井戸内より出土した木皿片で、ケヤキを材に用いる。復元できる法量は直径9.8cmで、高台は欠損しており、身の高さのみ11cm以上と計測される。内面に赤漆、外面を黒漆塗りで飾る。

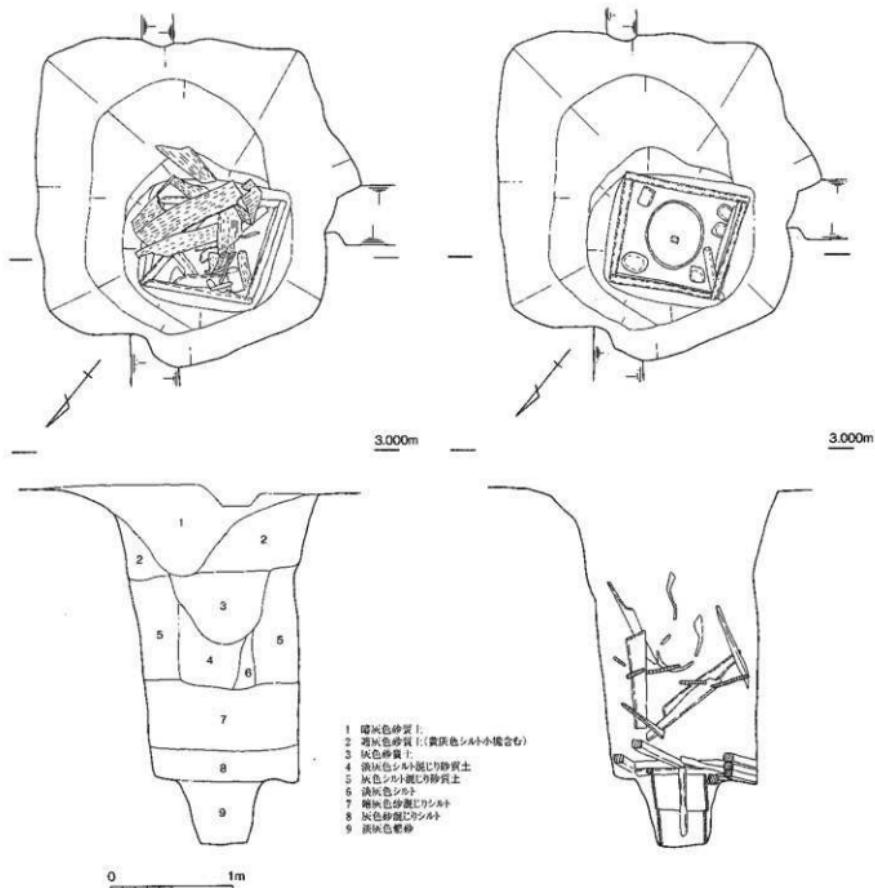


図132 SE317平面・断面図

SE317

SE316の東で検出した、東西約2.7m、南北約2.8mの掘形を持ち、深さ約2.8mを測る方形の木組み井戸である。

井戸枠材は底部付近を除き倒壊しており、一部は抜き取られている可能性も考えられ

る。倒壊している材は縦板とわかる材が多い。また井戸底部から隅柱を据えるための根石も確認されている。これらのことから、井戸上部は縦板、隅柱等による木枠組みが構築されていたと考えられる。

井戸下部は良好に残存している。縦長の角材により、東西約1.0m、南北約0.9mで深さ約0.2mの方形に枠組みされている。この角材は、3段まで重ねられた状況が、確認できる。この角材による方形木枠内の底部には、四隅に隅柱を据える根石と、中央に曲物が2段に据え付けられている。曲物は径約0.44mで、2段で高さ約0.6mを測る。

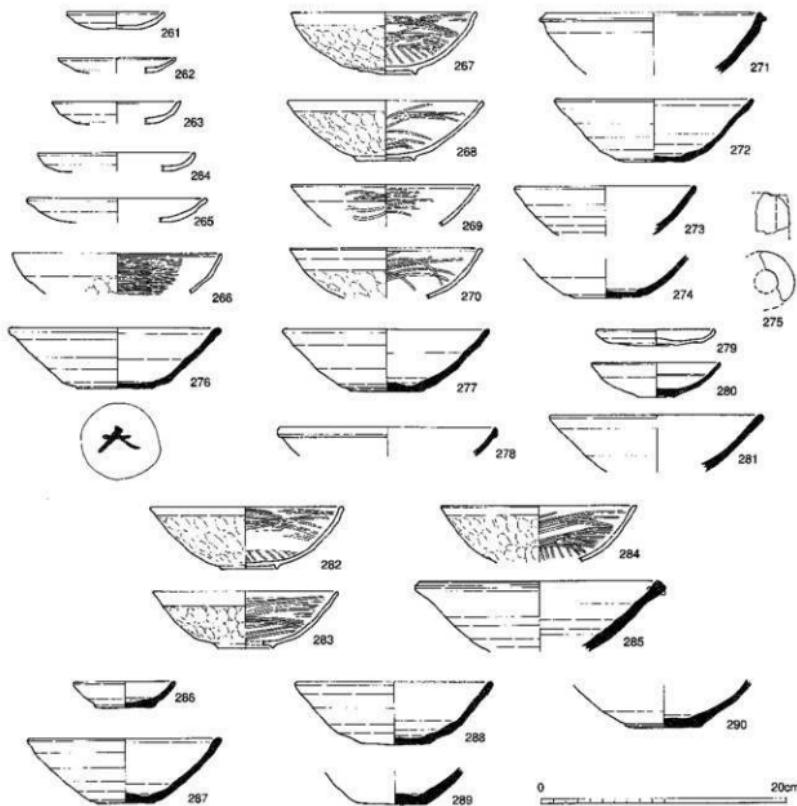


図133 SE317出土遺物実測図（1）

図133の261～290はSE317出土遺物である。261～275は上層、276～278は中層、279～281は木枠内、282～285は底部の曲物内のもので、286～290は井戸掘形から出土したものである。

261～265は土師器小皿で261は口径7.8cm、器高1.4cm、262は口径9.6cm、器高1.2cm、263は口径10.4cm、器高1.3cm、264は口径12.8cm、器高1.5cm、265は口径14.4cm、器高2.0cmである。266は土師器塊で口径17.0cmである。内面を丁寧にヘラミガキし、口縁端部に一条の沈線を巡らす。267～270は瓦器塊である。267は口径15.0cm、器高5.1cm、268は口径15.8cm、器高5.0cmである。269は口径15.2cm、270は口径15.4cmでいずれも和泉型である。271～274は東播系須恵器である。271は小型の捏鉢で口縁端部を外方に摘み出す。口径17.4cmである。272～274は塊で272は口径16.0cm、器高5.2cm、273は口径14.6cm、274は底径5.5cmである。275は管状土錐の破片である。

276・277は東播系須恵器塊で276は口径17.2cm、器高4.9cmで底部外間に「大」の字の墨書きがある。277は口径17.0cm、器高4.9cmである。両者共12世紀中頃と考えられる。278は中国製白磁碗で山本分類のⅡ 1類である。279は土師器小皿で口径9.6cm、器高1.3cmである。280は中国製白磁小皿で山本分類のⅣ 1 b類である。281は東播系須恵器塊で口径17.2cmを測る。

282～284は瓦器塊で282は口径15.6cm、器高5.1cm、283は口径15.2cm、器高4.7cm、284は口径15.6cmである。いずれも12世紀中頃のものと考えられる。285は東播系須恵器捏鉢で口径19.0cmである。

286～290は東播系須恵器である。286は小皿で口径8.4cm、器高2.2cm、287は口径15.5cm、器高5.3cm、288は口径15.8cm、器高5.1cmである。289・290は底部の破片で前者は底径5.0cm、後者は底径6.4cmを測る。井戸内部から出土した遺物と時期的には大きな差異はないものと思われる。

図134の291～294はSE317から出土した平瓦類である。292・293は木枠内から、291・294は井戸掘形から出土した。291は凹面に布痕、凸面にタクシ痕を残す。292は凹面に粗い布痕、凸面は指ナデ痕を残す。293も凹面に粗い布痕を残す。凸面はナデ痕と思われるが残存状態が悪く不明である。294も凹面に粗い布痕を残し、凸面はナデ痕が認められる。伴出遺物から見て12世紀代のものと思われる。

図135・136はSE317出土木製品である。井戸は、縱板(295～302)を横棟で補強する構造であり、底部に2段の曲物を据えていた。しかし縱板および横棟は崩壊し、セット関係が定かでない。横棟については両端部が「凸」状を呈するもの(303, 304)が4点、「凹」状を呈するもの(305, 306)が4点数えられるため、これら2種による組み合わせが2セット想定できる。また長さ57cm前後で、断面が4.5～5cm角の角材が6点出土している(307～310)。これらも枠を構成した部材であろうが、その使用部位については明らかでない。

端部「凸」状・「凹」状の材はモミ筋を使用しており、全面を加工する角材である。有効内寸は79～80cmに仕上げられ、断面形は一辺が5.5～6cm程度の正方形を呈する。

底部曲物は3段(312～314)で、上から313・312・314の順に据えられていた。

312はヒノキ製で直径44cm、高さ12.4cmを測る。緞じは檜皮で、1列内3段緞じである。

313はヒノキ製で直径48cm、高さ29.4cmを測り、1列外7段の檜皮緞じである。底部付近に檜皮が2箇所1・2列確認できるため、緞などの付帯物が存在した可能性もある。

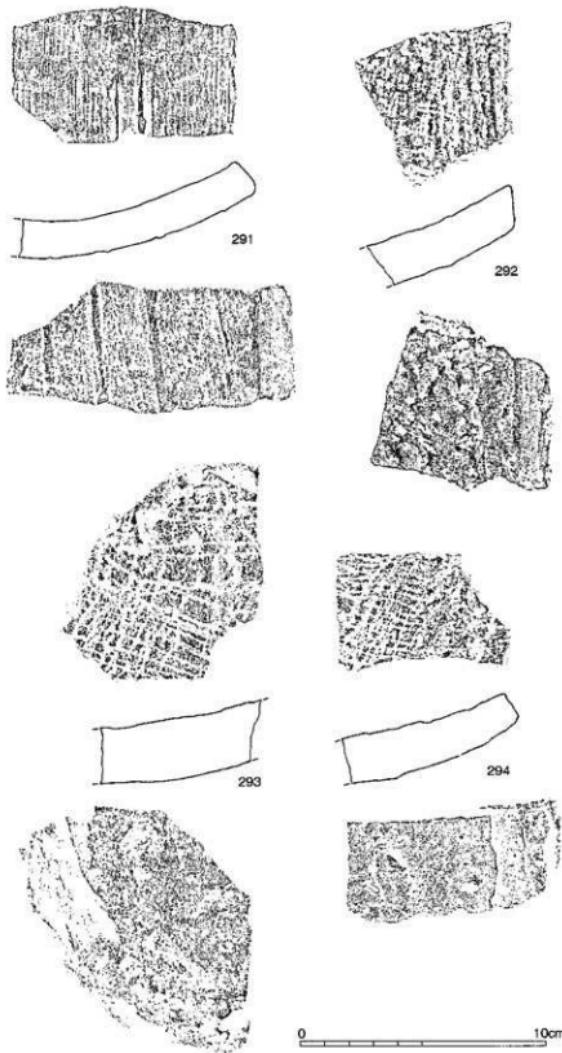


図134 SE317出土遺物実測図(2)

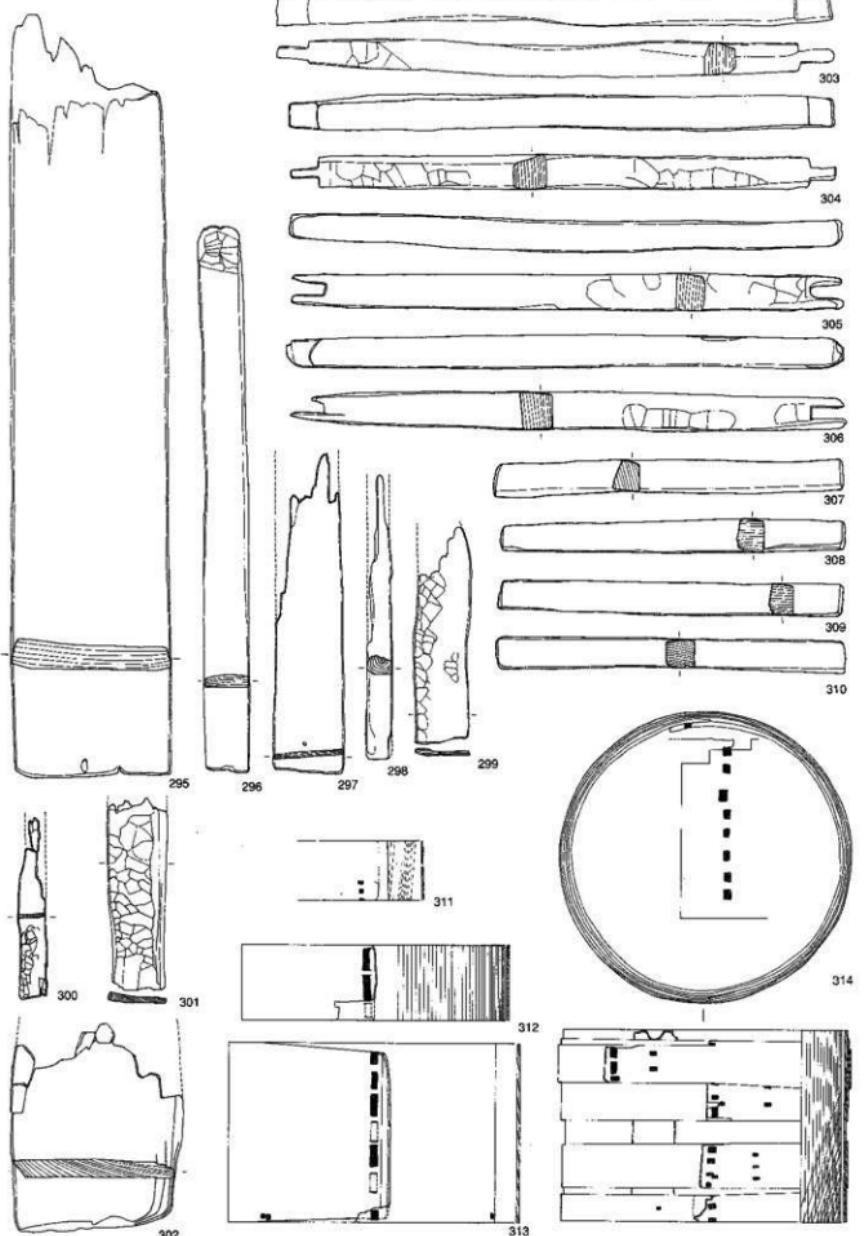


図135 SE317出土遺物実測図 (3)

0 50cm

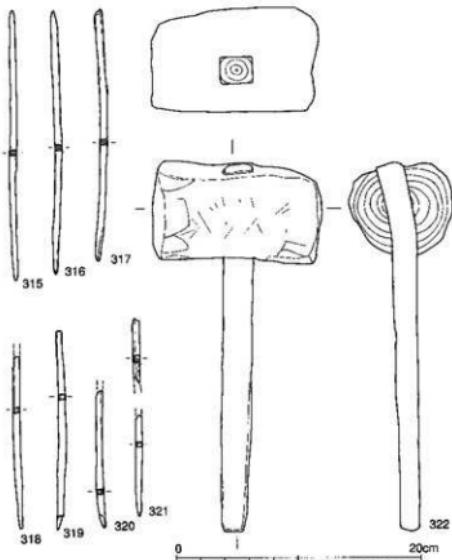


図136 SE317出土遺物実測図 (4)

314は直径54cm、高さ31.6cmを測るヒノキ製の曲物である。上記2点に比して非常に丁寧な作りで、本体は1列外10段継じと推定され、幅7cmの副板、幅13.5cmの内側板、さらにその外側に、上から幅6cm、7cm、4.5cmの板で補強されている。継はそれぞれ2箇所で継じられ、異なる強化が施された重厚なものである。

井戸の構造材以外にも、木質遺物が出土している。311は曲物片で、桿皮による継じが残るが、法量については小片のため不明である。

315～321は箸である。いずれも面取り加工がなされ、完形品の315、316がそれぞれ全長22cm、21.5cmを測る。また断面は太さ4～6mmを測る不定な多角形を呈する。材はスギ・ヒノキ・ツガがある。322は横柾であるが、60と違い、頭部と柄が別材の2材構造をとる。頭部はアカガシ亞属製で、直徑8～8.5cm、長さ14cmの円筒形である。全面加工されており、中央付近には横断貫通する長方形(2.6cm×2cm)の柄孔を穿つ。端面は摩滅しており、使用的痕跡と推測できる。柄はクリ材で、頭部に挿入される部分は柄孔に順ずるが、把握部は2.2cm×1.9cm程度の隅円方形に磨耗しているようである。

SE318

東西1.6m以上×南北2.1mの規模で、平面が梢円形を呈する掘形の素掘りの井戸である。深さは1.33mを測る。SE317によって西側の一部が破壊されている。埋土は、暗褐色砂質土と炭混じり淡黒灰色砂質土が互層になっている。

図138の323～338はSE318から出土した遺物で、323～334が上層、335～338が下層出土である。323～329は土師器小皿で、323は口径8.8cm、器高1.1cm、324は口径9.7cm、

器高1.3cm、325は口径9.5cm、器高1.5cm、326は11.0cm、器高1.5cmである。以上4点の土師器小皿は「ての字」口縁のものである。327は口径9.6cm、器高1.6cm、328は口径9.0cm、器高1.8cm、329は口径9.2cm、器高1.9cmである。329は底部外面に糸切り痕を残す。330は口径14.5cm、器高3.3cmの土師器皿である。摩滅のため調整等は不明である。331～333は東播系須恵器である。331は口径14.6cm、332は口径15.0cmの壺である。333は短頸壺で口径10.2cm、器高18.6cm、胴部最大径は20.8cmである。底部外面に糸切り痕がある。334は

管状土錐で、全長4.7cm、最

大径は1.2cmである。335・336は「ての字」口縁の土師器小皿で335は口径9.2cm、器高1.5cm、336は口径8.3cm、器高1.4cmである。337・338は東播系須恵器壺で337は口径15.0cm、338は口径15.4cm、器高5.8cmである。11世紀末～12世紀初頭頃のものと考えられる。

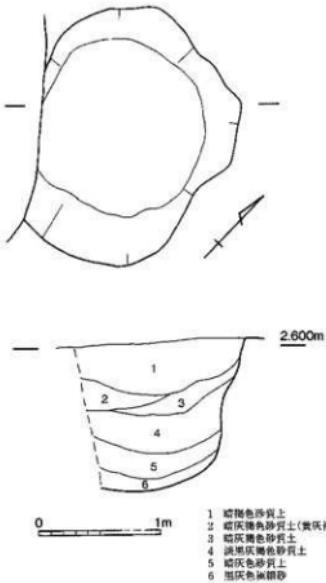


図137 SE318平面・断面図

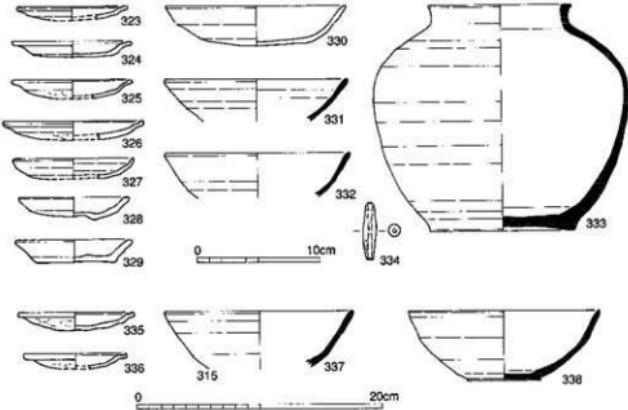


図138 SE318出土遺物実測図

SE319

SB329の南側にある直径約1.0mの円形の素掘りの井戸で、深さは0.7mを測る。検出面が、擾乱で0.5m程度削平されているので、本来は1.2m程度の深さであったと考えられる。垂直に掘り込まれており、埋土の状況から長期間中に水が溜まっていたものと思われるが、底面が湧水地点よりも浅く、水は湧き出ていなかった可能性が高い。遺物は出土していない。

SE320

SE319の東に隣接した場所で検出した井戸で、長径2.3m、短径1.8mの楕円形の掘形で、深さは約2.6

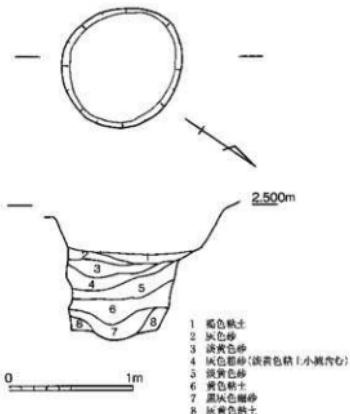


図139 SE319平面・断面図

mある。内部は、検出面から約0.8m、1.3m、2.1m下で各々段ができ、井戸の底では直径約0.5mの掘形となっている。底には、曲物が7段積み重ねてあり、井戸の掘形に合わせて、下に行くにつれて小さな曲物が使用されている。井戸枠のような構造物は出土せず、抜き取られたものと考えられる。

図141の339～356はSE320から出土した遺物である。339～342は土師器壺で339は口径12.5cm、器高3.3cm、340は口径13.0cm、341は口径11.2cm、342は底径6.8cmである。343～346は土師器壺で343は口径26.2cm、344は口径33.8cm、345は口径51.2cm、346は口径28.8cmである。347・348は土師器の羽釜で347は口径22.2cm、348は口径28.6cmである。349～351は黒色土器A類の壺である。349は口径16.6cm、350は高台径7.8cmで、外方に大きく開く。351は低い断面三角形の高台を貼り付ける。高台径7.6cmである。352・353と355・356は須恵器で352は口径14.8cmの壺、353は壺底部で底径6.8cm、355は鉢で口径19.2cm、胴部最大径も19.2cmである。356は京都篠塚産^⑪と考えられる鉢で、口径24.0cmを測る。354は緑釉陶器壺で蛇の目高台である。高台径6.4cmである。357は飯蛸壺で現高8.5cm、口径4.5cmである。358～360は土鍤でいずれも完形ではない。358は現長5.8cm、最大径1.3cm、359は現長4.8cm、最大径1.5cm、360は現長3.9cm、最大径1.1cmである。3者共棒状土鍤である。SE320出土遺物は10世紀中頃から後半のものが中心と考えられる。

図142の361は曲物や桶など、円形容器の底板もしくは蓋と考えられるヒノキ材の円形板残欠である。柾目板であり、横引鋸の普及を推察できる資料といえる。厚さは約8mmである。

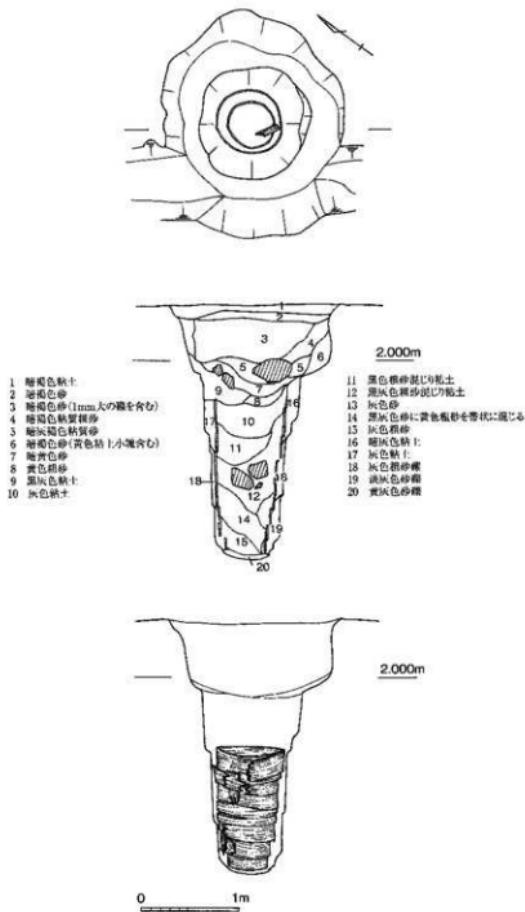


図140 SE320平面・断面図

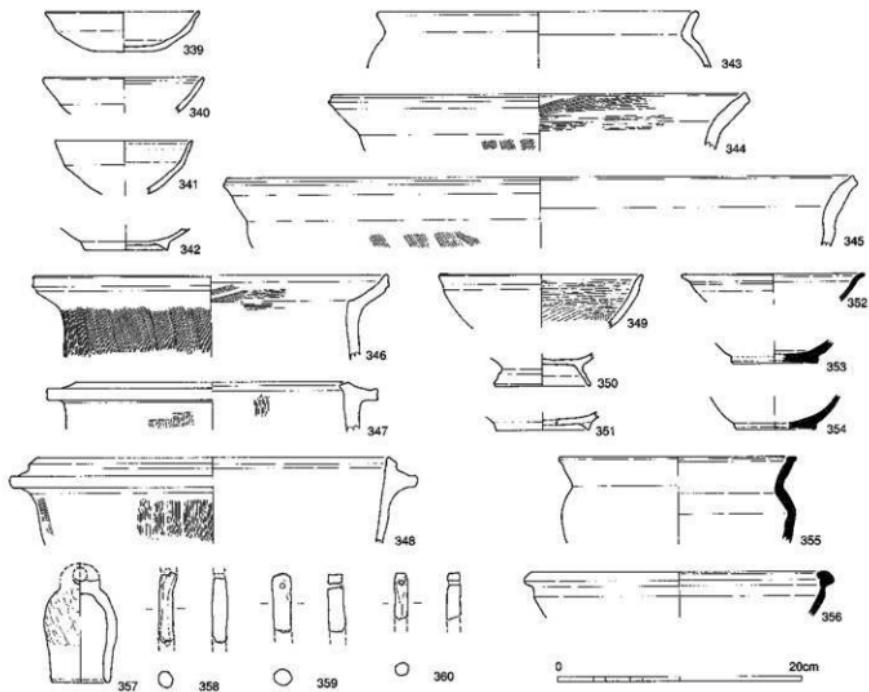


図141 SE320出土遺物実測図(1)

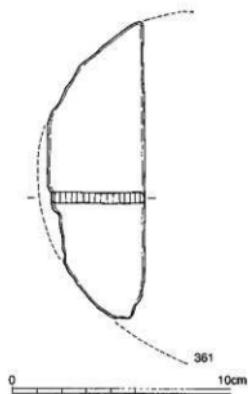


図142 SE320出土遺物実測図(2)

(3) 土坑

SK203

東西約1.9m、南北約1.8m、深さ約0.77mを測る不整円形の土坑である。上層は暗褐色砂質土が堆積し、中層～下層は、一部でラミナが認められる淡灰灰色砂質土と黒灰色シルト混じり砂質土が堆積している。用途は不明である。

図示できないが、奈良時代の須恵器蓋と土師器壺の小破片が出土しており、SK203は奈良時代の遺構と考えられる。

SK303

SE318の南で検出した、長径2.8m以上、短径1.2m、深さ0.45mの楕円形の土坑である。上層は暗褐色砂質土が堆積し、下層は淡灰灰色砂質土が堆積している。用途は不明である。

図145はSK303か

ら出土した遺物である。362・363は土師器小皿で、前者は口径9.0cm、器高1.9cm以上、後者は口径14.6cm、器高2.2cmである。364～366は束縛系須恵器壺である。364は底径5.6cm、365は口径15.4cm、器高5.3cm、366は口径16.4cm、器高5.4cmである。366にやや新しい形態が見られるが、12世紀前半～中頃と思われる。

SK304

SB322の北で検出した、東西約1.3m、南北1.0m、深さ0.93mの楕円形の土坑である。用途は不明である。遺物は出土していない。

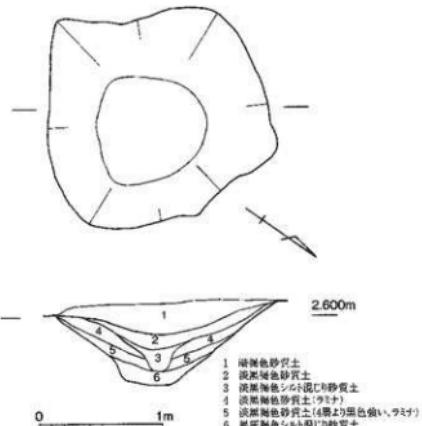


図143 SK203平面・断面図

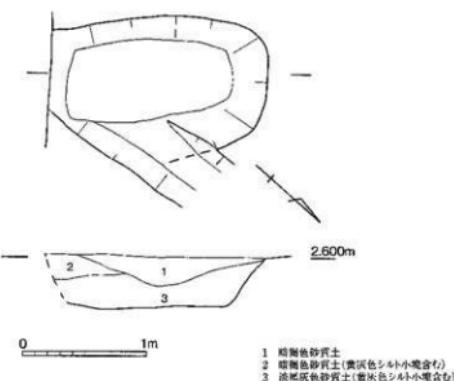


図144 SK303平面・断面図

- SK305 長径2.1m、短径1.5m、深さ0.35mの楕円形の土坑である。用途は不明である。図示できるような遺物は出土していない。
- SK306 SE320の南で検出した、長辺3.4m、短辺1.8mの方形の土坑で、深さは最深部で0.4mである。造構面が0.4～0.5m削平を受けているため、本来は1m近い深さがあったはずであるが、用途は不明である。須恵器、上師器の細片が出土しているが図示できなかった。
- SK307 SK306の西で検出した、直径1.2m、深さ0.2mの円形の土坑である。用途は不明である。土師器の小破片が出土したが時期は不明である。
- SK308 長径1.7m、短径1.3m、深さ0.2mの楕円形の土坑である。造構面が0.4～0.5m削平されているため、本来はもっと深く、水溜のようなものかと思われる。
- 図151の367はSK308から出土した瓦器碗である。高台は低く退化し、径4.2cmを測る。13世紀代と思われる。
- SK309 直径1.1m、深さ0.25mの円形の土坑である。造構面が0.4～0.5m削平されているため、本来はもっと深く、水溜のようなものかと思われる。図示できるような遺物は出土していない。

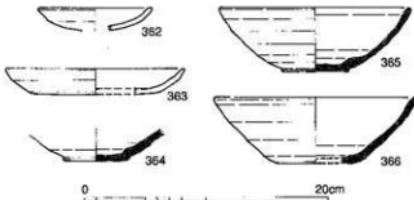


図145 SK303出土遺物実測図

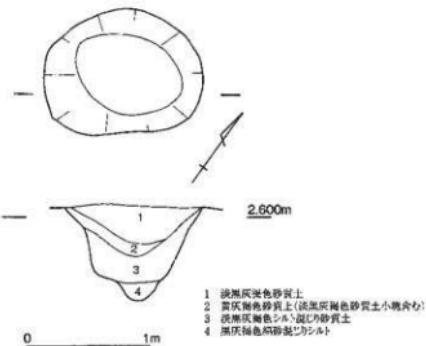


図146 SK304平面・断面図

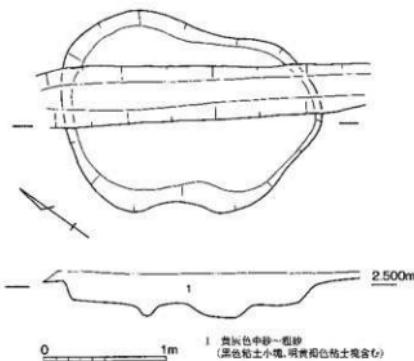


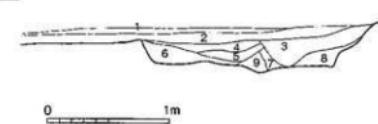
図147 SK305 平面・断面図

SK310 長径1.5m、短径1.2m、深さ0.5mの楕円形の土坑である。搅乱により遺存状況は良くない。須恵器と土師器の細片が出土しているが、明確な時期は不明である。

SK311 長径1.0m、短径0.7m、深さ0.35mの楕円形の土坑である。鋤溝に切られている。須恵器と土師器の細片が出土しているが、明確な時期は不明である。



SK312 長径1.1m、短径0.8m、深さ0.55mの楕円形の土坑である。遺物は出土していない。



SK313 長径1.4m、短径0.5m、深さ0.3mの楕円形の土坑である。須恵器と土師器の細片が出土しているが、明確な時期は不明である。

SK314 長径1.0m、短径0.6m、深さ0.35mの楕円形の土坑である。須恵器と土師器の細片が出土しているが、明確な時期は不明である。

SK315 東西約1.5m以上、南北2.0m、深さ約0.2mの不整形の土坑である。
図158はSK315から出土した遺物である。
368は土師器小皿で口径8.2cm、器高1.7cmである。
369も土師器の大型の皿で口径16.5cmを測る。
370は瓦器塊である。371は棒状有孔土鍤で現長4.2cm、最大径1.5cm、372は完形の管状土鍤で全長5.0cm、最大径1.6cmである。出土遺物は13世紀代と思われる。



図149 SK307 平面・断面図

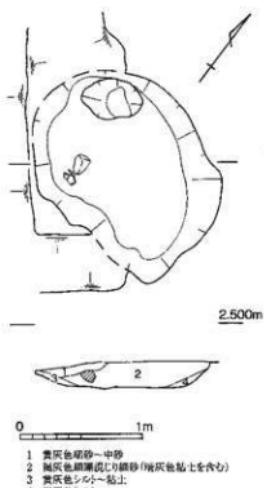


図 150 SK308 平面・断面図

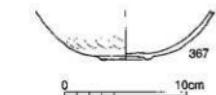


図 151 SK308 出土遺物実測図

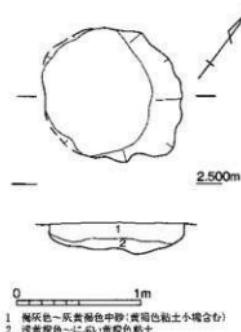


図 152 SK309 平面・断面図

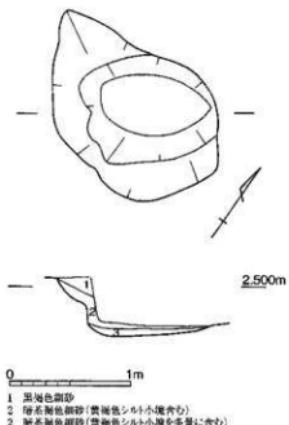


図 153 SK310 平面・断面図

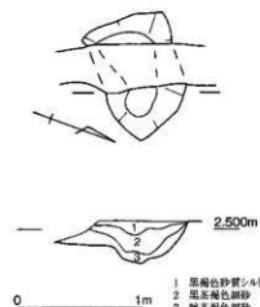


図 154 SK311 平面・断面図

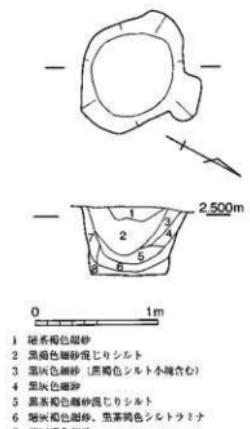


図 155 SK312 平面・断面図

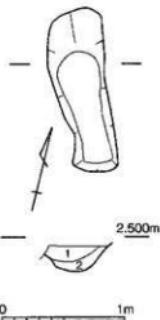


図 156 SK313 平面・断面図

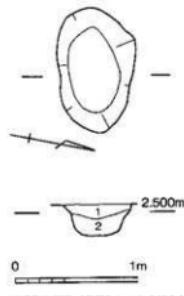


図 157 SK314 平面・断面図

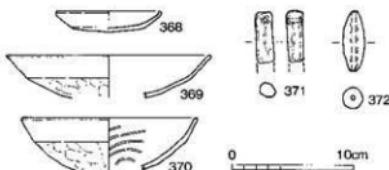


図 158 SK315 出土遺物実測図

(4) 木棺墓

ST304

SB325の約20m南で検出した木棺墓で、南北方向に主軸を置く。南端部分が後世の搅乱で破壊されており、東西幅0.7m、南北長1.8m以上の長方形土坑内に幅0.45m、長さ1.6mの木棺を安置している。棺材の厚さが約3cmであることが土色変化部から判る。なお、棺の蓋材と底材が若干残存している。棺内中央部から土師器皿4枚と土師器皿1枚、長さ約16cmの鉄刀1点が先を西に刃部を北に向けた状態で検出した。

図160はST304出土の遺物である。373～377は上師器皿である。373は「ての字」口縁で口径9.0cm、器高1.4cm、374は口径9.6cm、器高2.1cmである。375は口径9.0cm、器高1.4cm、376は口径9.4cm、器高1.9cmである。377は小型の皿で口径15.0cm、器高3.0cmである。374・376及び377の体部には指オサエ痕が見られる。378は鉄小刀で切先が欠損している。現長16.2cm、茎長8.5cm、刃最大幅1.5cmである。茎部の一部に木質部が残る。379・380は鉄釘である。いずれも先端部が欠損する。379の断面は一辺5mmの方形で現長2.8cm、

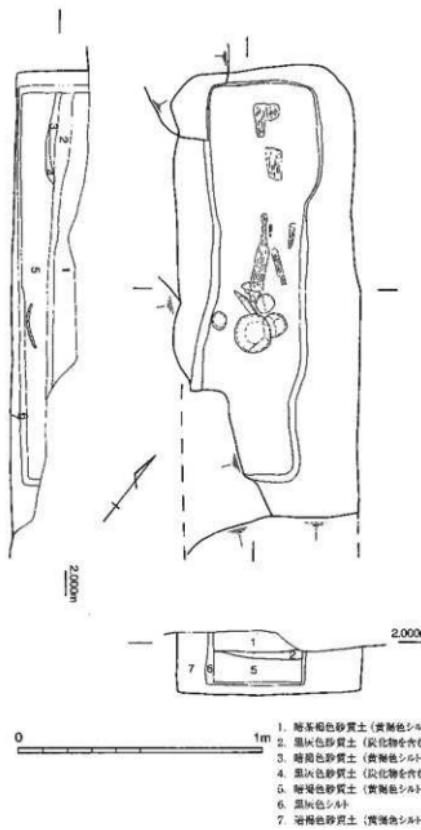


図 159 ST304 平面・断面図

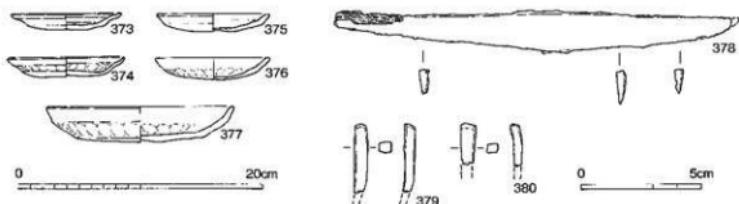


図 160 ST304 出土遺物実測図

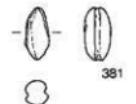
380は断面4×5mmの長方形を呈し、現長1.7cmである。遺物の時期は11世紀末～12世紀頃と考えられる。

(5) ピット

SP303

直径約0.3m、深さ約0.25mのピットである。

図161の381はSP303出土の有溝土錐である。完形で全長4.2cm、最大径2.0cmである。時期は確定できない。



SP304

直径約0.3m、深さ約0.4mのピットで、根石を据えている。

掘立柱建物の柱穴と思われるが、建物としてはまとまらなかつた。

図162の382はSP304出土の中国製白磁碗である。山本分類IV 1 aで12世紀代のものと考えられる。口径16.2cmである。



図162 SP304出土遺物実測図

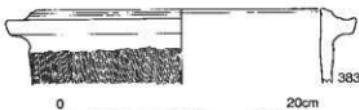


図163 SP305出土遺物実測図

SP305

直径約0.5m、深さ約0.15mのピットである。

図163の383はSP305から出土した土師器羽釜である。口径23.0cmである。10世紀後半から11世紀にかけてのものと思われる。

SP306

直径約0.5m、深さ約0.25mのピットである。

図164の384はSP306出土の管状土錐である。両端を欠損する。現長4.0cm、最大径1.0cmである。時期は確定できない。

SP307

擾乱により南半部が破壊されているが、直径約0.5mのピットに復元できる。深さは約0.25mである。

図165の385はSP307出土の束縛系須恵器塊で、口径15.4cmである。小片のため時期は確定できない。

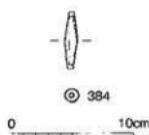


図164 SP306出土遺物実測図

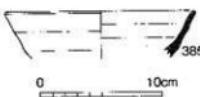


図165 SP307出土遺物実測図

(6) 包含層出土遺物

図166は二葉町6丁目地区の包含層出土遺物である。386・387は土師器小皿、388・389は黒色土器A類の塊、390～393は東播系須恵器塊、394～396は土錐である。

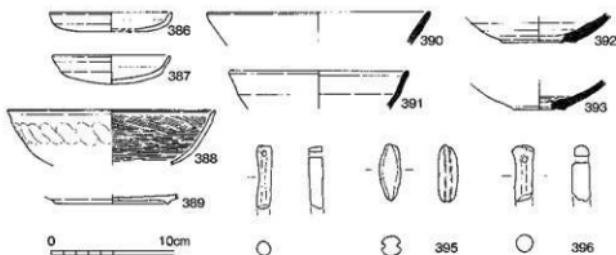


図166 二葉町6丁目地区包含層出土遺物実測図

(7) その他

二葉町6丁目の南西端に位置する、以前はかなり店が存在した場所の搅乱中から磁器製定量錐が約500個体まとまって出土している。出土した磁器錐は3種類あり、大型のもので高さ13cm、重量約1460g、中型のものは高さ9cm、重量約420g、小型のもので高さ8cm、重量約300gである。いずれも背後に重量調整用の穴があり、穴の蓋が残っているものも若干ある。それぞれには銘文があり、大型のものは「岐阜 中 定錐 秤量貳拾五匁」と記され、中型のものは「岐阜 中 定錐 秤量七匁」、「岐阜 K 定錐 秤量七匁」の2種類、小型のものは「岐阜 中 定錐 秤量五匁」、「岐阜 K 定錐 秤量五匁」の2種類の銘文が記されている。

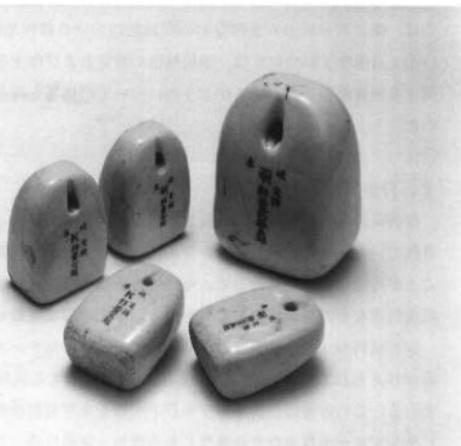
これらは、棒はかり用の磁器錐であり、太平洋戦争の激化により、鉄鋼資源が枯渇したため、鉄製定量錐の代用品として、昭和17年から戦後しばらくの間、製造されたものである。長岡昭雄氏の資料紹介¹²によると、製造したのは岐阜県恵那郡陶町の金中製陶所で、昭和16年から開発に取り組み、昭和17年末に完成したものとされる。材質が磁器であり、個々の製品について、焼成後の重量に誤差が生じるため、背後の穴の内部に鉛などを充填して重量を調整していたものである。なお、今回出土したものには、穴の蓋がついているものも見受けられるが、すべて内部には何も充填されていなかった。工場出荷時には何も充填せず、小売店での販売時に、重量を調整したものと考えられる。

銘文の製造名に、「中」と「K」の2種類あるのは、当時金中製陶所に錐の製造免許がなく、岐阜市のメーカーの名前で製造したためである。その後昭和19年に製造免許を受け、自社の名前を入れるようになった。そのため製造名により、昭和17年から昭和19年7月までの記号「K」と、それ以後の自社ブランドの記号「中」に区別することができる。

今回の出土資料は、戦後金属製の錐が出回り、不要になったので廃棄されたものと考

えられる。近現代の製品であるが、戦争遺物として位置づけられるものであり、ここに紹介する。なお、過去に大坂城下町跡で、今回紹介した中型のものが出土している⁽³⁾。

- (注1) 石井清司「篠塚跡群出土の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報』第7号 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1983年3月31日
石井清司「篠塚須恵器」『概説中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会 前掲書
- (注2) 長岡昭雄 「岐阜県の「ます」及び陶磁器製定量錘の製造に関して」『計量史研究』 Vol.29 No.2 (No.33) 日本計量史学会 2007
- (注3) 八木久栄・黒田慶一「進藤一代氏による建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査 (OJ92-36) 略報」 財団法人大阪市文化財協会 1993



挿図写真1 二葉町6丁目地区出土磁器製定量錘

第6章 二葉町遺跡古環境の調査

パリノ・サーヴェイ株式会社
辻 康男・金井慎司・辻本裕也

はじめに

本報告は、出土遺物の相対年代から、縄文時代晩期～弥生時代前期と推定される黒色有機質堆積層と、11～12世紀代に比定される耕作土および遺構埋土の花粉・植物珪穀体分析に関する結果および考察を記載するものである。

各分析層準に共通する目的は、調査地点およびその周辺の堆積環境や古植生を推定することにある。

上記した共通目的の他に、縄文時代晩期～弥生時代前期頃の黒色有機質堆積層については、微化石分析から水田などの当該期における耕作地跡の存在、11～12世紀代の耕作土・遺構埋土については、栽培植物の推定および作土と遺構埋土での微化石の産状に関する差異が存在しているかどうかについての情報を得ることが課題として認識されていた。

1. 分析層準の記載

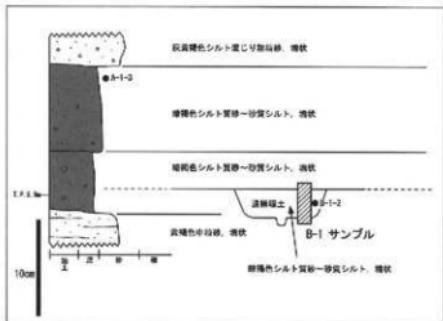
分析試料は、幅12cm前後、長さ27cm前後のタッパー等内に不搅乱の状態で収納されていた。そのため、各サンプルについては、堆積構造などの詳細な層相観察を行うことが可能であった。そこで、今回の分析報告では、肉眼観察による試料の堆積構造や粒度組成などの記載についても出来る限り、詳細に記載することに努めた（図167）。

分析試料のうち、堆積層の下部付近で採取されたサンプルについては、A-2とC-2の名称が与えられている。T.P.2.5～27m付近に位置する試料の最下部には、砂層が存在している。この砂層は、Aサンプルが不明瞭な水平葉理をなす比較的淘汰の良い中粒砂、Cサンプルが塊状をなす砂礫混じりの粗粒～極粗粒砂によって構成されている。層相から、最下部の砂層は、層状地面上に広がった氾濫堆積物であることが推定される。

これらの砂層上部、T.P.2.6～29m付近には、有機物を多量に含み黒色を呈す塊状の細礫混じり砂質シルト層が累重している。黒色細礫混じり砂質シルト層の層厚は、8cm前後を測る。A、Cサンプルとも、堆積層内には、植物遺体の残存がほとんど認められず、分解がほぼ完全に進行した状態となっている。また、本層準では、下方に向かって漸移的な変化を示し、砂層との境界付近には多くの根痕が観察される。本層準で黒色を呈す土色の起源は、堆積物中に含まれる多量の腐植由来していることが推定される。このような現象は、一般的に堆積速度が小さくなることによって安定化した地表面上に、植生が継続的に被覆することによって生じるものと考えられている。

これらのことから、黒色を呈す細礫混じり砂質シルト層は、安定した堆積環境下において時折流入する氾濫堆積物を母材として形成された古土壤であることが想定され、当該期に本調査地周辺の層状地盤が離水していたことが示唆される。

その直上には、有機物を多量に含み黒色～暗褐色を呈す塊状の砂質シルト層が、5～



凡例

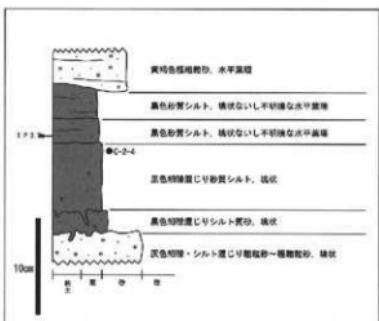
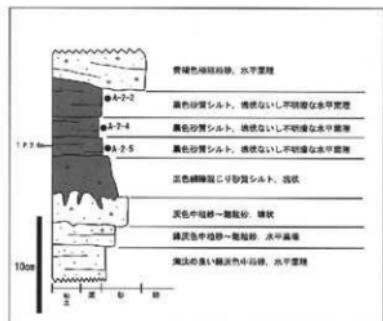
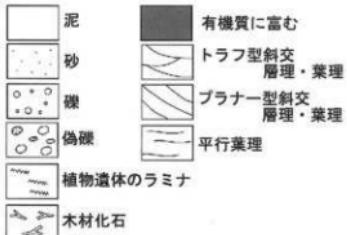


図167 分析サンプルの堆積層柱状図と分析実施層準位置図

8cm前後の層厚で形成されている。この砂質シルト層の上半部には、上からの酸化鉄の顯著な沈着が観察される。本層準は、下位に比べ細粒な堆積物によって構成されている。層相から、黒色砂質シルト層は、下位の堆積層と同じく、安定した堆積環境下で形成されたことが推定される。下部の層準からの層相変化から判断すると、黒色砂質シルト層は、離水していた扇状地面周囲の埋積による局地的な基準面の上昇に伴って、しだいに湿润化するような土壤環境下で形成された堆積物であることが想定される。黒色砂質シルト層の直上には、弥生時代前期の土器を包含する水平葉理をなす極粗粒砂層が載る。層相から、この砂層は氾濫堆積物と判断される。

堆積層の上部付近で採取されたサンプルには、A-1とB-1の名称が与えられている。これらのサンプルの最下部、T.P.3.4～3.5m付近には、中粒砂層が存在している。本層は、土壤化が進行しており、塊状の堆積構造をなすとともに上位の堆積層によって充填される根痕や管状酸化鉄の斑紋が顯著に観察される。

A-1では、砂層の上部に耕作土である暗褐色を呈し塊状をなす砂質シルト～シルト質砂層が形成されている。出土遺物の相対年代から、暗褐色砂質シルト層は、11～12世紀頃に形成されたことが推定されている。本層準の下部では、幅2～3mm前後のシルトや砂からなるブロック土が頗る観察される。これらのブロック土は、耕作土内に発達した粒團であると推定される。層準の上部では、下部に比べ砂質な粒度組成なし、ブロック土の發達度も弱くなる傾向が存在している。

B-1では、砂層の上部に暗褐色を呈す遺構埋土が累重している。この遺構埋土内には、幅1cm前後を測る耕作土内に比べ粗粒なブロック土が多く含まれている。遺構埋土上部には、A-1で観察された耕作土の上部と類似した層相をなす暗褐色をなす耕作土が形成されている。A-1サンプルの最上部には、塊状をなす褐色のシルト混じりの砂層からなる現代の盛土が認められる。

2. 試料

分析試料については、タッパー・ウェヤー内に存在している不搅乱堆積物サンプルから、層相を考慮しながら採取を行った。採取した試料は、縄文時代晩期～弥生時代前期の黒色有機質堆積層から4点、11～12世紀代の耕作土および遺構埋土の暗褐色砂質シルト～シルト質砂層からの2点である。

黒色有機質堆積層については、A-2サンプルから3点(A-2-2・4・5)、C-2サンプルから1点(C-2-1)の分析試料を採取した。暗褐色砂質シルト～シルト質砂層では、耕作土であるA-1サンプルから1点(A-1-3)、遺構埋土であるB-1サンプルから1点(B-1-2)の分析試料を採取した。

3. 分析方法

(1) 花粉分析

試料を湿重で約10g秤量し、水酸化カリウム処理、篩別、重液分離(臭化亜鉛、比重2.3)、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理(無水酢酸：濃硫酸=9:1)の順に物理・化学的な処理を施して花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。なお、表中で複数の種類をハイフロン(マイナス)で結んだものは種類間の区別が困難なものを示す。

(2) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ボリタンクスチレン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)

の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために、植物珪酸体群集団を作成した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基準とする百分率で求める。

4. 結果

(1) 花粉分析

結果を表2に示す。検出される花粉・シダ類胞子化石の種類数は、木本花粉10種類（マキ属・モミ属・ツガ属・トウヒ属・マツ属・スギ属・ハンノキ属・コナラ属アカガシ属・ニレ属・ケヤキ属）、草本花粉9種類（オモダカ属・イネ科・カヤツリグサ科・ソバ属・バラ科・シソ科・ゴキヅル属・ヨモギ属・キク亞科）、シダ類胞子1種類である。試料中からは、花粉化石がほとんど検出されず、シダ類胞子が多い傾向にある。また、僅かに検出される花粉化石の保存状態は極めて悪く、外膜が溶けて薄くなっていたり、壊れている。

表2 花粉分析結果

種類	試料番号	A-1		A-2		B-1		C-2	
		3	2	4	5	2	4	2	4
<u>木本花粉</u>									
マキ属		—	—	2	2	—	—	—	—
モミ属		—	—	1	5	1	—	—	—
ツガ属		1	—	4	9	—	2	—	—
トウヒ属		—	—	—	1	—	—	—	—
マツ属		4	—	2	2	1	—	—	—
スギ属		—	—	—	1	—	—	—	—
ハンノキ属		—	1	—	1	—	—	—	—
コナラ属アカガシ属		—	—	—	—	—	1	1	—
ニレ属・ケヤキ属		—	—	—	1	—	—	—	—
カキ属		—	—	1	—	—	—	—	—
<u>草本花粉</u>									
オモダカ属		—	—	—	—	—	—	1	—
イネ科		1	—	8	2	—	2	—	—
カヤツリグサ科		1	—	2	3	—	1	—	—
ソバ属		—	—	—	—	—	1	—	—
バラ科		—	—	1	—	—	—	—	—
シソ科		—	—	—	1	—	—	—	—
ゴキヅル属		—	—	—	1	—	—	—	—
ヨモギ属		—	—	23	29	—	19	—	—
キク属		1	1	14	14	—	4	—	—
<u>不明花粉</u>									
シダ類胞子		25	58	196	338	4	16	—	—
<u>合計</u>									
木本花粉		5	1	10	22	3	3	—	—
草本花粉		3	1	48	50	1	27	—	—
不明花粉		1	1	1	5	1	1	—	—
シダ類胞子		25	58	196	338	4	16	—	—
総計(不明を除く)		33	60	254	410	8	46	—	—

(2) 植物珪酸体分析

結果を表3、図168・169に示す。各試料から検出される植物珪酸体は、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。以下に、地点毎の産状を述べる。

・ Aサンプル

A-I-3では、栽培植物であるイネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が検出される。イネ属の出現率は、短細胞珪酸体が約2%、機動細胞珪酸体が約3%である。

この他、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、スキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。この中では、タケ亜科やウシクサ族の産出が目立つ。

A-2では、A-2-2・4・5とも植物珪酸体群集に大きな変化がなく、ヨシ属が多産し、次いでススキ属を含むウシクサ族が多く検出される。この他、ネザサ節を含むタケア科、イチゴツナギ科などが検出される。

・Bサンプル

B-1-2では、A-1-3と同様にイネ属が検出される。イネ属の出現率は、短細胞珪酸体が約1%、機動細胞珪酸体が約7%の出現率である。また、ネザサ節を含むタケア科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ科などが検出される。この中では、タケア科やウシクサ族の産出が目立つ。

・Cサンプル

C-2-4は、A-2-2・4・5と同様にヨシ属の産出が目立ち、タケア科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ科なども検出される。

5. 考察

(1) 繩文時代晩期～弥生時代前期

A-2サンプルでは、繩文時代晩期～弥生時代前期の黒色有機質堆積層についての層位的な分析を行っている。機動細胞珪酸体で不明瞭なもの、短細胞珪酸体では、上位に向かって湿潤な土壤環境を好むヨシ属が増加し、ヨシ属に比べ乾燥した環境に生育するススキ属の減少が確認される。黒色有機質堆積層の下部～中部では、ヨモギ属やキクア科の花粉化石が比較的多く検出されているが、保存状態が不良で古環境を詳細に検討することは困難な状況である。これら黒色有機質堆積層から検出された植物珪酸体群集組成および花粉化石の産状は、分析試料の層相観察から推定される堆積環境の変化と調和的な傾向を示している。

以上のような黒色有機質堆積層における微化石の産状と層相観察結果から、繩文時代晩期～弥生時代前期に本地点では、扇状地面が離水し土壤発達した後、周辺における局地的な基準面の上界によって次第に湿潤な土壤環境へと変化し、最終的には、再び氾濫堆積物に覆われるような堆積環境となったことが推定される。特に、遺跡を構成する堆積層において暗色帶と認識される繩文時代晩期～弥生時代前期の黒色有機質堆積層の単層内では、下部の標質な層準が周間に比べより乾燥した扇状地面上の氾濫原、上部

表3 植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	A-1		A-2		B-1		C-2	
		3	2	4	5	2	4	2	4
イネ科葉部短細胞珪酸体									
イネ族イネ属		4	-	-	-	1	-		
タケア科ネザサ節		1	1	1	1	1	1		
タケア科		20	13	6	23	17	8		
ヨシ属		3	102	101	112	18	98		
ウシクサ族コブナグサ属		4	-	-	-	-	-		
ウシクサ族ススキ属		11	17	28	43	9	17		
イチゴツナギア科		7	10	18	18	3	14		
不明キビ型		53	51	65	87	39	49		
不明ヒゲシバ型		34	23	28	27	6	7		
不明ダムチケ型		41	22	23	22	18	5		
イネ科葉身機動細胞珪酸体									
イネ族イネ属		8	-	-	-	10	-		
タケア科ネザサ節		1	2	1	-	3	1		
タケア科		40	17	7	15	25	11		
ヨシ属		12	60	52	42	12	59		
ウシクサ族		88	28	31	29	53	21		
シバ属		3	-	-	-	1	-		
不明		82	37	27	21	49	25		
合計									
イネ科葉部短細胞珪酸体		178	239	270	333	112	199		
イネ科葉身機動細胞珪酸体		234	144	118	107	153	117		
総計		412	383	388	440	265	316		

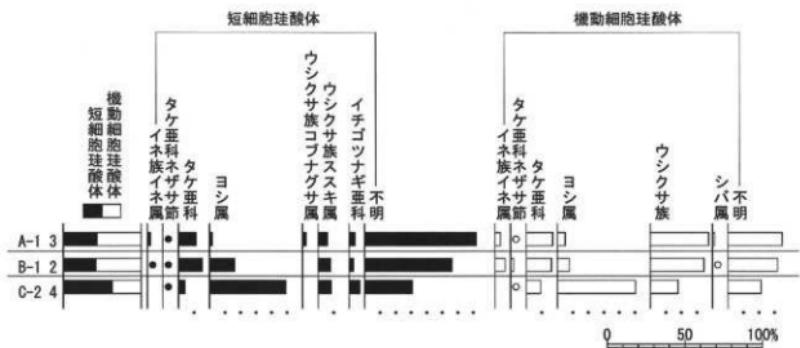


図168 A-1, B-1, C-2植物珪酸体群集組成

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基數として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類を示す。

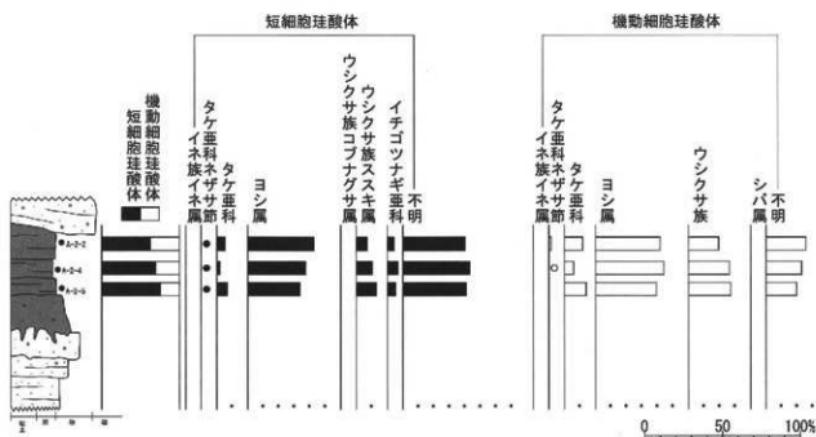


図169 A-2植物珪酸体群集の層位分布

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基數として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類を示す。

の泥質な層準が扁状地面上を覆う氾濫堆積物などからなる砂礫堆間の低地となる相対的により湿润な氾濫原ないし湿地を構成する堆積物であることが想定される。これらの黒色有機質堆積層からは、栽培種であるイネ属の珪酸体が検出されなかった。このことから、本地点では、イネ属の珪酸体を供給するような水田などの耕作地の存在や稻が持ち込まれた可能性が低いことがうかがえる。

六甲山地南麓地域の扇状地面上に位置する考古遺跡では、黒色を呈す有機質土層が砂～砂礫層からなる流路や氾濫堆積物に挟在している様子がよく観察される。層相などから、これらは、その大半が占土壤として形成されたことが推定される。当社が近年、本地域で行った縄文時代～古墳時代頃までの各期における黒色有機質土層の植物珪酸体分析では、ネザサ節を含むタケ亜科が優占する群集や、タケ亜科が優占してヨシ属を伴う群集、今回の分析結果のようにヨシ属が多産しスキ属を伴う群集など、いくつかの群集タイプが存在していることが明らかになってきた。特に、ネザサ節を含むタケ亜科が優占する植物珪酸体群集については、山麓部周辺の扇状地帯成層内に挟在する黒色有機質土層によく認められる傾向があるようである。今回の植物珪酸体群集は、山麓部の扇状地堆積物に存在する黒色有機質土層の植物珪酸体群集と大きく異なり、ヨシ属が多産する群集組成を示した。このような結果は、本地点が山麓部に比べ相対的に潤湿な土壤環境であったことを示唆しているものと解釈される。二葉町遺跡は、沖積扇状地の末端部分に位置していることから、地形的には今回の分析結果を調和的とみなすことができる。

上記してきた扇状地堆積物内に挟在する黒色有機質土層における植物珪酸体の状況は、扇状地における地形発達や微地形に関連した土壤発達様式の差異と関連していることが予想される。今後は、扇状地から海岸低地に至る地形勾配において、同時期に発達したとみなされる黒色有機質土層の簡単の分析を実施し、空間的な考察を行っていくことが必要である。また、同時にこれらの黒色有機質土層については、遺跡内やその周辺での詳細な古地形や層序や土壤微細生態学的な検討を進めていくことも重要であると認識される。

今回の分析では、花粉化石の保存状態が極めて悪く、どの試料でもダイアグラムを作成するための統計学的に信頼できる個数を検出することが出来なかった。一般的に花粉化石は、好気的な環境条件下にあると土壤微生物の影響や化学的な酸化により分解・消失することが知られている（中村、1967）。分析を実施した縄文時代晚期～弥生時代前期の黒色有機質堆積層は、主に古土壤であると推定されていることから、継続的に好気的な環境が形成されていたことが推定される。このことを考慮すると、黒色有機質堆積層では、堆積後の経年変化によって花粉化石が分解・消失したことが推定される。このような状況から、残念ながら、本地点の分析結果からは、黒色有機質堆積層の時期である縄文時代晚期～弥生時代前期における周辺の古植生を推定することが困難であることが認識される。

これまでに六甲山地南麓地域で実施された花粉分析結果をふまえると、二葉町遺跡の周辺では、縄文時代晚期～弥生時代前期にアカガシ亜属を主体とした暖温帶性広葉樹林（いわゆる照葉樹林）が広がっていたことが推定される（パリノ・サーヴェイ、1991；古環境研究所、1995）。大開遺跡において大型植物遺体分析を行った南木（1993）では、縄文時代晚期に遺跡周辺でイチイガシを含む種類数豊富な常緑広葉樹に多様な温帶性針葉樹と落葉広葉樹が混生した森林が形成されていたことを明らかにすると共に、同時期の大坂平野南部地域における分析結果に比べ六甲山地南麓部では多様な針葉樹が含まれ

ている点が特徴であることを指摘した。また、六甲山地南麓地域における花粉や種尖分析の既往分析結果の整理を行った辻本ほか（2002）では、縄文時代晚期に六甲山地南麓地域の考古遺跡でアカガシ亜属の花粉が増加する傾向が存在することを見いだすとともに、弥生時代に入るとスギ属やイチイ科－イスガヤ科－ヒノキ科、モミ属、コウヤマキ属といった温帯性針葉樹の花粉が増加することを指摘している。

六甲山地南麓地域で実施された微化石分析結果や近年、当社が調査・分析を行った事例から、本地域に分布する扇状地構成層内では、花粉などの微化石や大型植物遺体の保存状態が極めて悪いことが確認される。その逆に、扇状地構成層を侵食して形成された開析流路の充填堆積物のうち、河岸付近に堆積した有機質を多く含む砂泥層や泥質砂層では、微化石や大型植物化石が良好に保存されている場合が多いことが指摘できる。六甲山地南麓に分布する扇状地面上に立地する考古遺跡では、しばしば埋没河川が検出される。この地域を流下する河川は、集水面積が小さく、山地斜面から河口までの距離が極めて短い特徴を有している。これらのことから、発掘調査によって検出される埋没河川堆積物は、流域ごとの山地斜面から平野に至る古植生情報をよく反映している可能性が高いことが指摘される。

以上のような特徴を考慮すると、六甲山地南麓地域で今後、植生史的な検討を行う際には、扇状地構成層を侵食して形成された開析流路内の堆積物も視野に入れてサンプリングを行っていくことが必要であろう。既往の植生史に関する分析結果の蓄積によって、本地域では、縄文時代以降の大まかな古植生変遷について概観することがしだいに可能となってきた。六甲山地南麓の扇状地および海岸低地部では、地形的な特性から、流域ごとの高い解像度を有する古植生データを得ることが可能なことが認識された。このような古植生データと地質層序、地形発達史や発掘調査の成果を組み合わせることによって、六甲山地南麓地域では、他地域ではなし得ない各流域単位といった空間スケールでの詳細な景観復元や社会－自然複合動態を検討していくものと思われる。

（2）中世

11～12世紀代に比定される暗褐色砂質シルト～シルト質砂層の植物珪酸体の産状は、縄文時代晚期～弥生時代前期の層準と比較すると、ヨシ属が極端に減少し、タケ並科やススキ属が多く検出される傾向にあり、また僅かであるがシバ属も検出されている。耕作土など人為層の層準では、しばしばヨシ属が急減する現象が確認される。このような変化は、耕作地造成や維持・管理などによる地表面の環境変化に起因していることが推定される。本層準では、わずかに栽培種のイネ属の植物珪酸体が検出されている。耕作土に含まれるイネ属珪酸体は、その場での栽培のみを示すものではなく、畑地の畝などの被覆資材や水田や畑などに肥糧用として撒込まれる異地性の稻わらや初穂などのイネ植物体についても想定する必要もある。そのため、本調査地で確認された11～12世紀代の耕作土については、軸X線写真撮影や土壤薄片などの土壤微細形態学的手法を用いた堆積物の観察所見などをふまえ、さらに検討していくことが必要である。今回の分析結果では、耕作土と遺構埋土の微化石の産状にはほとんど差異が存在していないこ

とが指摘される。なお、遺構埋土では、畑作植物とされるソバ属の花粉が1点検出されている。

本試料でも、花粉化石の保存状態が極めて悪く、古植生に関する十分な議論を行うことができない状況であった。中世頃の六甲山地南麓地域の花粉組成は、イネ科を中心とする草本類の増大とマツ属の花粉の多産によって特徴づけられる（辻本ほか、2002）。このマツ属の多産は、山地斜面などの林分に対する人為的な植生干渉が拡大した結果生じたものと推定される。二葉町遺跡の北東約2kmに位置する上沢遺跡では、飛鳥時代の標準で、人間による植生干涉による二次林化の影響を色濃く受けたと推定される。草本類の割合が高くマツ属が優占する花粉分析結果が得られている（バリノ・サーヴェイ、2002）。人為的營力の影響を強く反映していると推定される弥生時代以降の古植生については、遺跡ごとに多様な傾向を示すことが予測される。六甲山地南麓地域では、これらについての時空間的な把握するだけのデータが蓄積されておらず、今後、さらに調査・分析事例を増やしていくことが課題として認識される。

引用文献

- 株式会社古環境研究所（1995）自然科学分析、「神戸市東灘区木山中野遺跡—道路状遺構の調査—」、六甲山麓遺跡調査会、p.66-78.
- 近藤達三・佐瀬 隆（1986）植物珪酸体分析、その特性と応用、第四紀研究、25、P.31-61.
- 南木稔彦（1993）大樹遺跡の大型植物化石と古植生、「大樹遺跡発掘調査報告書」、神戸市教育委員会・（財）神戸市スポーツ教育公社、p.250-260.
- 中村 純（1967）「花粉分析」、古今書院、232p.
- バリノ・サーヴェイ株式会社（1991）土壤中の微化石分析、「本庄町遺跡－郵政省宿舎建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」、兵庫県教育委員会、p.19-61.
- バリノ・サーヴェイ株式会社（2002）4. 植生史調査、「平成11年度 神戸市埋蔵文化財年報」、神戸市教育委員会、p.119-127.
- 辻本裕也・川中義文・辻 康男（2002）六条遺跡の自然科学分析、「六条遺跡発掘調査報告書－芦屋市西部第一地区震災復興上地区画整理事業・清水公園建設事業に伴う六条遺跡（第17-18地点）の事前調査記録－」、芦屋市教育委員会、

第7章 二葉町遺跡出土木製品の樹種同定調査

第1節 第15次調査

植田弥生（パレオ・ラボ）

1. はじめに

ここでは、長田区久保町5丁目の発掘調査区から検出された、井戸SE301と不明遺構（近世遺構）に関する木製品の、樹種調査結果を報告する。

当遺跡は、北の六甲山系と南の瀬戸内海に挟まれた沖積地に立地する集落遺跡で、周辺の遺跡を含め平安時代中期から各時期の多くの井戸が検出されているのが特徴である。今回調査された井戸SE301は、集落が最も発展した頃の中世の井戸である。周辺遺跡も含め多くの井戸について、今までに構築材の樹種調査が実施されている（御蔵遺跡、2001、松野遺跡、2001a、二葉町遺跡、2001bなど）。

今回調査した井戸SE301は保存状況が良好であり、ひとつの井戸に使用された各部位ごとの使用樹種や配置などが検討された。

2. 樹種同定の方法

調査試料から、片刃の剃刀を用いて材の横断面（木口）・接線断面（板目）・放射断面（輻目）の3方向を薄く剥ぎ取りスライドグラスの上に並べ、ガムクロラールで封入し、材組織標本の永久プレパラートを作成した。そして光学顕微鏡を用いて、これらの材組織を観察し同定を行った。なお材組織の保存状況が悪いものや、切片を取ると形状が損なわれる恐れのあるものについては、一断面を作成できなかった試料が一部ある。永久プレパラートは、神戸市埋蔵文化財センターに保管されている。

3. 結果

SE301出土樹種

井戸枠材そして井戸舎内から検出された板材・割材・杭・曲物など合計175点からは、モミ属（40点）・ツガ属（14点）・アカマツ（9点）・コウヤマキ（7点）・スギ（22点）・ネズコ（1点）・アスナロ（1点）・ヒノキ（73点）の針葉樹8分類群、アカガシ亜属（4点）・ツブラジイ（2点）・サカキ（1点）の常緑広葉樹3分類群、クヌギ節（1点）の落葉広葉樹1分類群が検出された（表4～7）。

ほとんどの構成部材は、複数の針葉樹材から構成されていた。広葉樹材は少なく（8点）て、隅柱と井戸舎内最下層から出土した角材・角柱・削杭・丸杭のみに使用されていた（表8）。

側板と板材からは複数の針葉樹材が検出され、特にヒノキとモミ属が圧倒的に多く、次にスギが多く、ツガ属・コウヤマキも使われ、側板ではアカマツも使われていた。割材もヒノキとモミ属が多く検出された。横棟は、ヒノキとスギが多く、コウヤマキが1点検出された。隅柱は、ヒノキ・アカマツ・ツブラジイであった。このように、側板・板材・割材・横棟・隅柱といった構成部分により、樹種構成がやや異なっていた。

各方面から出土した側板の樹種を見ると、東西からはヒノキ・モミ属・スギ・ツガ属が、南北からはヒノキ・モミ属・アカマツが共通して検出される傾向が見られ、コウヤマキは西と北からであった。横棟では、東西にヒノキが多く、南北ではスギが多く、コウヤマキは西から検出された。

調査した曲物は、側板・副板・帯板・木釘などすべてがヒノキから構成されていた（表9）。最下層から出土した、柄はヒノキ、円升の底板はスギでその木釘はネズコであった。

不明遺構（近世遺構）出土樹種

不明遺構から出土した、井戸の桶側板4点はアスナロとサワラであり、漆器椀はカツラであった。

材組織記載

モミ属 *Abies* マツ科 摂図写真2 1a-1c (W1-7879)

仮道管・放射柔細胞からなり樹脂細胞はない針葉樹材。W1-7879には接線状に連続して配列する傷害樹脂道がある。早材から晩材への移行はゆるやか、放射柔細胞の壁は厚く放射断面において接線壁に数珠状肥厚が見られ、上下端の細胞はときに山形になる。分野壁孔は小型のスギ型やヒノキ型で1分野に1～4個が雜然と配置している。放射組織の細胞高は比較的高い。

モミ属は常緑高木で、暖帯から温帯下部の山地に普通に見られるモミ、温帯上部の高山に生育するウラジロモミ・シラベ・オモリドマツなどがあるが、いずれも材組織は類似していて区別はできない。材質はやや軽軟で加工は容易であるが保存性は低い。

ツガ属 *Tsuga sieboldii* Carr. マツ科 摂図写真2 2a-2c (W1-7780)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞・放射仮道管からなる針葉樹材。W1-7780・7850・7859・7870には傷害樹脂道が見られた。早材から晩材への移行は急で、晩材部仮道管の壁は厚い。放射柔細胞の壁は厚く放射断面において接線壁に数珠状肥厚があり、放射柔組織の上下端や希に中間に有縁壁孔を持つ放射仮道管がある。分野壁孔は小型で2～4個ある。

ツガ属には本州の福島県以南の暖帯から温帯下部の山地に普通のツガと、本州・四国・九州の温帯上部の深山に生育するコメツガがあるが、材組織からは2種を区別することはできない。材は硬重で割り易く耐久性もよい。

アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科 摂図写真2 3a-3c (W1-7823)

垂直と水平の樹脂道があり、早材から晩材への移行はゆるやかな針葉樹材。分野壁孔は窓状、放射組織の上下端には有縁壁孔を持つ放射仮道管がありその内壁には先の鋭く尖った錐葉状の肥厚が顯著である。

アカマツは暖帯から温帯下部の陽光地に生育し、特に二次林の主要樹となる。材は硬く耐水性がある。

コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科 摶図写真3 4a-4c (W1-7779)

仮道管・放射柔細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかである。分野壁孔は窓状、放射柔細胞の壁は薄い。放射組織は5細胞以下の背の低いものが多い。

コウヤマキは日本特産の1属1種の常緑高木で、本州の福島県以南・四国・九州の宮崎県の暖帯上部から温帯の山地に分布する。材は耐久性・耐水性・耐蟻性に優れる。

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 撮図写真3 5a-5c (W1-7785)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は急で、晚材部の量は多く晩材部仮道管の壁は極めて厚い。分野壁孔は孔口が壁孔縁の幅より大きく水平に大きく開いたスギ型、1分野に主に2個が水平に配置している。

スギは本州以南の暖帯から温帯下部の湿気のある谷間に生育する常緑高木である。材はやや軽軟で加工は容易である。

ネズコ（クロベ） *Thuja standishii* Carr. ヒノキ科 撮図写真3 6a-6c (W1-788-2)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部仮道管の壁は厚い。分野壁孔はやや小型のスギ型とヒノキ型があり、1分野に2～4個ある。

ネズコ（クロベ）は本州・四国の温帯上部の山中に生育する常緑高木である。材は耐朽性・切削性・割裂性にすぐれる。

アスナロ *Thujopsis dolabrata* Sieb. et Zucc. ヒノキ科 撮図写真4 7a-7c (W1-7798)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量はやや少い。分野壁孔は小型でヒノキ型やスギ型が一分野に2～5個あり、2～3個が上下に配置しているものが多い。

アスナロは日本特産の1属1種で、本州・四国・九州の温帯の山中に生育する常緑高木である。材質は良いがヒノキよりやや劣る。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. 撮図写真4 8a-8c (W1-7750)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかで晩材の量は少なく、早材と晩材の仮道管壁の肥厚の差は少ない。分野壁孔は孔口がやや斜めに細く開き壁孔縁の幅が広い典型的なヒノキ型で、1分野におもに2個が水平に配列する。

ヒノキは本州の福島県以南・四国・九州のやや乾燥した尾根や岩上に生育し、材は耐久性・切削性・割裂性にすぐれる。

サワラ *Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endl. ヒノキ科 撮図写真4 9a-9c (W1-7799)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材の移行はやや急で晩材部の量はやや少ない。分野壁孔は孔口より壁孔縁が厚いヒノキ型であるがヒノキより孔口は広く開き、1分野におもに2個ある。

サワラはヒノキより分布域は狭く、岩手県以西・四国・九州の沢沿いの岩上に生育する。材はヒノキよりやや軽軟で劣るといわれる。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科 撮図写真5 10a-10c (W1-7796)

細胞幅の広い複合放射組織を挟み小型～中型の単独管孔が放射状に配列する放射材。道管の壁孔は交互状、穿孔は單一である。放射組織は同性、単列と複合状があり、

道管との壁孔は孔口が大きく開く橢状・交互状である。

アカガシ亜属はカシ類の仲間であり、おもに暖温帯に分布する常緑広葉樹である。山野に普通なアラカシ・アカガシ・シラカシ、関東以南に多いイチガシ・ツクバネガシ、海岸や乾燥地に多いウバメガシ、寒さに強くブナ帯の下部まで分布するウラジロガシなどがあるが、材組織は類似している。材は丈夫で弹性や耐湿性がある。

ツブライジ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科 挿図写真5 11a-11c(W1-7817)

孔口は楕円形で中型の管孔が単独で間隔をあけて配列し、さらに数個が放射方向に分布後、急に小型となり火炎状に配列する環孔材。年輪幅が広い試料では、管孔の配列は放射状となる。幅の狭い集合放射組織があり、その部分で年輪界が大きくなる。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は單一同性、まれに幅の狭い緩く集合した集合放射組織がある。

ツブライジは暖帶に生育する常緑広葉樹、関東以西・四国・九州に分布する。材は硬く丈夫である。

コナラ属コナラ亜属クスギ節 *Quercus subgen. Q. sect. Cerris* ブナ科 挿図写真5 12a-12c (W1-7897)

年輪の始めに大型の管孔が1～3層配列し、その後は小型で厚壁の孔口が円形の管孔が単独で放射状に分布する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は同性、単列と細胞幅の広い複合状があり、道管との壁孔は橢状・交互状である。

クスギ節は落葉性のナラ類でクスギとアベマキが属する。暖帶の山林に普通の高木で二次林にも多い。材は重厚で割裂性が良い。

カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc. カツラ科 挿図写真6 13a-13c (W1-7749)

小型で多角形の管孔が年輪内に密在し年輪界ではやや径を減じ、管孔の占有面積が多い散孔材。道管の壁孔はまばらな交互状や孔口の長さが不揃いの階段状、穿孔は横棒数が非常に多い階段穿孔である。放射組織は異性、1～2細胞幅、多列部の上下端には方形や直立細胞が単層で1～3細胞層ある。

カツラは北海道から九州の暖帶から温帶の渓谷に生育する落葉高木である。材は均質でやや軽軟、割裂性・切削性は良く、狂いは少ないが保存性はあまり良くない。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 挿図写真6 14a-14c (W1-7797)

非常に小型で角形や多角形の管孔が密に分布する散孔材。道管の壁孔は階段状、穿孔は横棒数が30本前後の階段穿孔である。放射組織は細胞壁が厚く、単列異性、道管との壁孔は交互状・階段状である。

サカキは本州の茨城県および石川県以西より南の暖帶から亞熱帶に生育する常緑小高木である。材は強韌・堅硬で割裂困難であり丈夫である。

4.まとめ

今までにおける周辺遺跡の平安時代末から中世の戸戸には、主にヒノキ・スギ・モミ属・ツガ属・コウヤマキ・アカマツなど複数の針葉樹材が使用されていた事が知られて

いる（パリノ・サーヴェイ株式会社、2001、松葉、2001a、2001bなど）。そして、井戸ごとにヒノキやスギまたはアカマツやツガ属など優占使用されていた樹種も異なるようである。また、御藏遺跡（2001）のSE201や二葉町遺跡（2001b）のSE306やSE309では、井戸枠にクスノキやアカガシア属などの広葉樹材も含まれて使われている井戸もある。今回調査した井戸SE301は、周辺遺跡の井戸の多くと同様に、井戸枠には前述の複数の針葉樹材が使用されていて、杭や角柱・角材には広葉樹材（アカガシア属・ツブラジイ・サカキ・クスギ節）が使用されていた。周辺遺跡の井戸内の杭材にはアカガシア属・ツブラジイ・ヒサカキ・クスノキ科・カエデ属・マンサク属・ヤナギ属・トネリコ属など様々な広葉樹材が報告されているが、アカガシア属やツブラジイなどの常緑広葉樹材が目立つ点も共通している。

今回の調査では、井戸の構成部位で使用されていた樹種構成にやや違いが見られ、また方向（配置位置）によっても樹種構成に違いが見られた。側板や板材は、ヒノキ・モミ属が多くそのほかにスギ・ツガ属・アカマツ・コウヤマキといった様々な針葉樹材が使用されていた。しかし、横棟はヒノキ・スギ・コウヤマキで、隅柱の針葉樹材はヒノキとアカマツであり、樹種数は2～3種類で、モミ属とツガ属は検出されなかった。側板の樹種の配置は、東西ではヒノキ・モミ属・スギ・ツガ属が多く、南北ではヒノキ・モミ属・アカマツが多く使われ、コウヤマキは西と北から検出された。コウヤマキは横棟でも使用されていたが、ここでも西から検出された点が注目される。横棟では、東西にヒノキが多く、南北ではスギが多かった。しかしこのような調査事例はあまりないようなので、井戸の構成部位や方向（配置位置）による樹種構成の傾向は、偶然なのか、それとも井戸を構築する際の作業工程を反映しているのかどうかは不明であるが、今後もこののような調査事例を増やすことにより新たに見えてくるものがあるのではないだろうか。

調査したすべての曲物は各部材とともに、適材として周知のヒノキがすべてに使われていた。

一方、不明遺構から検出された井戸側板の桶板は、アスナロとサワラであった。曲物はヒノキが圧倒的に多いが、桶板はスギ・コウヤマキそしてヒノキ科の様々な樹種（ヒノキ・サワラ・アスナロ・クロベ）が使用されるので、当遺跡の樹種利用も桶材の樹種選択性を反映しているといえる。漆器の木地は、大木が豊富な山中で木地師が製作することが知られており、その樹種はブナ属・トチノキ・クリ・ケヤキなどが多いが、カツラもしばしば検出される樹種のひとつである。

引用文献

- パリノ・サーヴェイ株式会社、2001、御藏遺跡から出土した木製品等の樹種、114-128、「御藏遺跡 第4・6・14・32次発掘調査報告書」、神戸市教育委員会
松葉礼子、2001a、松野遺跡出土木製品（古墳時代後期初頭～鎌倉時代）の樹種同定、175-186、「松野遺跡発掘調査報告書 第3～7次調査」、神戸市教育委員会
松葉礼子、2001b、二葉町遺跡出土木製品の樹種同定、141-166、「二葉町遺跡発掘調査報告書 第3・5・7・8・9・10次調査」、神戸市教育委員会

表4 二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧(1)

地区名	W1番号	図番号	地区	遺物名	遺構名	樹種	備考
久保5	7749		1区	漆器挽	不明遺構	カツラ	
久保5	7750		1区	井戸側板	SE301	ヒノキ	E-1
久保5	7751		1区	井戸側板	SE301	ヒノキ	E-1
久保5	7752		1区	横棟(南1段目)	SE301	スギ	S-1
久保5	7753		1区	横棟(北1段目)	SE301	スギ	N-1
久保5	7754		1区	角材	SE301	ヒノキ	E-2
久保5	7755		1区	井戸側板	SE301	ヒノキ	E-3
久保5	7756		1区	井戸側板	SE301	ヒノキ	E-4
久保5	7757		1区	井戸側板	SE301	ツガ属	E-4
久保5	7758		1区	板材	SE301	ツガ属	
久保5	7759		1区	板材	SE301	スギ	
久保5	7760		1区	板材	SE301	モミ属	
久保5	7761		1区	井戸側板	SE301	スギ	E-5
久保5	7762		1区	井戸側板	SE301	ヒノキ	E-6
久保5	7763		1区	井戸側板	SE301	スギ	E-7
久保5	7764	25	1区	井戸側板	SE301	ヒノキ	E-8
久保5	7765		1区	井戸側板	SE301	モミ属	E-9
久保5	7766		1区	井戸側板	SE301	ヒノキ	E-10
久保5	7767		1区	井戸側板	SE301	ヒノキ	N-2
久保5	7768		1区	剖材	SE301	モミ属	北東隅柱東側
久保5	7769		1区	板材	SE301	モミ属	南京隅柱西側
久保5	7770		1区	板材	SE301 井戸側内上層	ヒノキ	
久保5	7771		1区	剖材	SE301 井戸側内上層	アスナロ	
久保5	7772		1区	剖材	SE301 井戸側内中層	ヒノキ	
久保5	7773		1区	剖材	SE301 井戸側内中層	ヒノキ	
久保5	7774		1区	剖材	SE301 井戸側内中層	ヒノキ	
久保5	7775		1区	剖材	SE301 井戸側内中層	ツガ属	
久保5	7776		1区	剖材	SE301 井戸側内中層	ヒノキ	
久保5	7777		1区	板材	SE301 井戸側内下層	ヒノキ	
久保5	7778		1区	板材	SE301 井戸側内下層	モミ属	
久保5	7779		1区	板材	SE301 井戸側内下層	コウヤマキ	
久保5	7780		1区	板材	SE301 井戸側内下層	ツガ属	
久保5	7781		1区	曲物底板	SE301 井戸側内下層	ヒノキ	
久保5	7782	24	1区	板材	SE301 井戸側内最下層	スギ	
久保5	7783		1区	板材	SE301 井戸側内最下層	ツガ属	
久保5	7784		1区	板材	SE301 井戸側内最下層	ツガ属	
久保5	7785		1区	板材	SE301 井戸側内最下層	スギ	
久保5	7786		1区	板材	SE301 井戸側内最下層	コウヤマキ	
久保5	7787		1区	剖材	SE301 井戸側内最下層	ヒノキ	
久保5	7788		1区	剖材	SE301 井戸側内最下層	ヒノキ	
久保5	7789		1区	剖材	SE301 井戸側内最下層	モミ属	
久保5	7790		1区	剖材	SE301 井戸側内最下層	ヒノキ	
久保5	7791		1区	板材	SE301 井戸側内最下層	モミ属	
久保5	7792		1区	割り板材	SE301 井戸側内最下層	スギ	
久保5	7793		1区	剖材	SE301 井戸側内最下層	ヒノキ	

表5 二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧(2)

地区名	W1番号	固番号	地区	遺物名	遺構名	樹種	備考
久保5	7794		1区	削材	SE301井戸側内最下層	モミ属	
久保5	7795		1区	角柱	SE301井戸側内最下層	アカガシア属	
久保5	7796		1区	削杭	SE301井戸側内最下層	アカガシア属	
久保5	7797		1区	丸杭	SE301井戸側内最下層	サカキ	N-3
久保5	7798		1区	井戸側板(桶板)	SX01	アスナロ	
久保5	7799		1区	井戸側板(桶板)	SX01	サワラ	
久保5	7800		1区	井戸側板(桶板)	SX01	アスナロ	
久保5	7801		1区	井戸側板(桶板)	SX01	アスナロ	墨青有り
久保5	7802	18	1区	隅柱(北東)	SE301	ツブライ	
久保5	7803		1区	削材	SE301	モミ属	
久保5	7804		1区	削材	SE301	ヒノキ	
久保5	7805		1区	削材	SE301	ヒノキ	
久保5	7806		1区	削材	SE301	ヒノキ	
久保5	7807		1区	削材	SE301	コウヤマキ	
久保5	7808		1区	井戸側板	SE301	モミ属	N-4
久保5	7809		1区	井戸側板	SE301	モミ属	
久保5	7810		1区	井戸側板	SE301	ヒノキ	
久保5	7811		1区	横桟(北側)	SE301	ヒノキ	
久保5	7812		1区	削材	SE301	モミ属	
久保5	7813		1区	横桟(南側)	SE301	スギ	
久保5	7814		1区	井戸側板(南側)	SE301	モミ属	
久保5	7815		1区	横桟(南側)	SE301	スギ	
久保5	7816		1区	井戸側板	SE301	アカマツ	R-233と接続
久保5	7817		1区	削材	SE301	ツブライ	
久保5	7818		1区	板材	SE301	モミ属	
久保5	7819		1区	削材	SE301	スギ	
久保5	7820	17	1区	隅柱(南東)	SE301	ヒノキ	
久保5	7821		1区	井戸側板	SE301	モミ属	
久保5	7822		1区	井戸側板	SE301	モミ属	
久保5	7823		1区	井戸側板	SE301	アカマツ	N-5
久保5	7824		1区	板材	SE301	アカマツ	
久保5	7825		1区	井戸側板	SE301	モミ属	
久保5	7826		1区	横桟(南3段目)	SE301	スギ	
久保5	7827		1区	横桟(東3段目)	SE301	ヒノキ	
久保5	7828		1区	井戸側板	SE301	ヒノキ	井戸側材北材
久保5	7829		1区	井戸側板	SE301	モミ属	R-231と接続
久保5	7830		1区	横桟(北3段目)	SE301	スギ	N-6井戸内側材北側
久保5	7831		1区	井戸側板	SE301	モミ属	
久保5	7832		1区	井戸側板	SE301	モミ属	井戸側材北側
久保5	7833		1区	横桟(北4段目)	SE301	スギ	印有り
久保5	7834		1区	井戸側板	SE301	ヒノキ	井戸側材北側
久保5	7835		1区	井戸側板	SE301	モミ属	井戸側材北側
久保5	7836		1区	井戸側板	SE301	ヒノキ	井戸側材北側
久保5	7837		1区	井戸側板	SE301	アカマツ	井戸側材南側
久保5	7838		1区	井戸側板	SE301	モミ属	井戸側材南側

表6 二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧(3)

地区名	W1番号	戻番号	地区	遺物名	遺構名	樹種	備考
久保5	7839	23	1区	井戸側板	SE301	ヒノキ	井戸側材南側S-2
久保5	7840		1区	井戸側板	SE301	モミ属	井戸側材南側S-2
久保5	7841	22	1区	井戸側板	SE301	ヒノキ	井戸側材南側S-3
久保5	7842	20	1区	横棟(南4段目)	SE301	スギ	
久保5	7843		1区	井戸側板	SE301	モミ属	井戸側材北側R-192232 235,236,245~248と接続
久保5	7844		1区	井戸側板	SE301	ヒノキ	井戸側材北側
久保5	7845		1区	井戸側板	SE301	ヒノキ	井戸側材北側
久保5	7846		1区	井戸側板	SE301	モミ属	井戸側材北側
久保5	7847		1区	横棟(東4段目)	SE301	ヒノキ	
久保5	7848	15	1区	隅柱(南西)	SE301	ヒノキ	
久保5	7849		1区	横棟(西4段目)	SE301	ヒノキ	W-1
久保5	7850		1区	井戸側板	SE301	ツガ属	井戸側材西側W-2
久保5	7851	19	1区	横棟(西2段目)	SE301	ヒノキ	W-3
久保5	7852	21	1区	横棟(西3段目)	SE301	コウヤマキ	W-4
久保5	7853		1区	横棟(西4段目)	SE301	スギ	印有り W-5
久保5	7854		1区	井戸側板	SE301	ヒノキ	井戸側材西側W-6
久保5	7855		1区	井戸側板	SE301	モミ属	井戸側材西側W-7
久保5	7856	16	1区	隅柱(北西)	SE301	アカマツ	R-228と接合
久保5	7857		1区	井戸側板	SE301	ヒノキ	井戸側材西側W-8
久保5	7858		1区	井戸側板	SE301	ヒノキ	井戸側材西側W-9
久保5	7859		1区	井戸側板	SE301	ツガ属	井戸側材西側
久保5	7860		1区	井戸側板	SE301	スギ	井戸側材西側W-10
久保5	7861		1区	井戸側板	SE301	ツガ属	井戸側材西側W-11
久保5	7862		1区	井戸側板	SE301	アカマツ	井戸側材西側W-12
久保5	7863		1区	井戸側板	SE301	アカマツ	井戸側材西側W-13
久保5	7864		1区	井戸側板	SE301	コウヤマキ	井戸側材西側W-14
久保5	7865		1区	井戸側板	SE301	モミ属	井戸側材西側
久保5	7866		1区	井戸側板	SE301	スギ	井戸側材西側W-15
久保5	7867		1区	井戸側板	SE301	ツガ属	井戸側材西側
久保5	7868		1区	井戸側板	SE301	ツガ属	井戸側材西側
久保5	7869		1区	井戸側板	SE301	モミ属	井戸側材西側
久保5	7870		1区	井戸側板	SE301	ツガ属	井戸側材西側
久保5	7871		1区	井戸側板	SE301	コウヤマキ	井戸側材西側
久保5	7872		1区	井戸側板	SE301	コウヤマキ	井戸側材北側
久保5	7873		1区	井戸側板	SE301	ヒノキ	井戸側材北側
久保5	7874		1区	井戸側板	SE301	ヒノキ	井戸側材北側
久保5	7875		1区	板材	SE301井戸側内最下層	モミ属	
久保5	7876		1区	丸杭	SE301井戸側内最下層	アカガシ更構	R-229と接合
久保5	7877-1	30	1区	円升底板	SE301井戸側内最下層	スギ	
久保5	7877-2	30	1区	円升底板の木釘	SE301井戸側内最下層	ネズコ	
久保5	7878		1区	板材	SE301井戸側内最下層	スギ	
久保5	7879		1区	板材	SE301井戸側内最下層	モミ属	
久保5	7880		1区	板材	SE301井戸側内最下層	モミ属	
久保5	7881		1区	井戸側板	SE301	モミ属	

表7 二葉町遺跡出土木製品種同定結果一覧(4)

地区名	W1番号	岡番号	地区	遺物名	遺構名	樹種	備考
久保5	7882		1区	井戸側板	SE301	スギ	
久保5	7883		1区	井戸側板	SE301	ツガ属	
久保5	7884		1区	井戸側板	SE301	モミ属	
久保5	7885		1区	井戸側板	SE301	モミ属	
久保5	7886		1区	井戸側板	SE301	モミ属	
久保5	7887		1区	板材	SE301井戸側内最下層	ツガ属	曲物枠内
久保5	7888		1区	丸丸	SE301井戸側内最下層	アカガシモミ	曲物枠内
久保5	7889		1区	柄	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	曲物枠内
久保5	7890-1	29	1区	曲物枠の側板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	曲物枠内
久保5	7890-2	29	1区	曲物枠の底板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	
久保5	7890-3	29	1区	曲物枠の木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘1
久保5	7890-4	29	1区	曲物枠の木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘2
久保5	7890-5	29	1区	曲物枠の木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘3
久保5	7890-6	29	1区	曲物枠の木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘4
久保5	7891		1区	井戸側板	SE301	モミ属	
久保5	7892		1区	井戸側板	SE301	モミ属	
久保5	7893		1区	井戸側板	SE301	アカマツ	
久保5	7894		1区	井戸側板	SE301	モミ属	
久保5	7895		1区	井戸側板	SE301	スギ	
久保5	7896		1区	板材	SE301井戸側内最下層	モミ属	曲物枠内
久保5	7897		1区	角材	SE301井戸側内最下層	クヌギ節	曲物枠内
久保5	7898	26	1区	曲物	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	1段目
久保5	7899-1	27	1区	曲物側板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	2段目
久保5	7899-2	27	1区	曲物帯板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	帯板上
久保5	7899-3	27	1区	曲物帯板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	帯板下
久保5	7899-4	27	1区	曲物副板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	副板1
久保5	7899-5	27	1区	曲物副板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	副板2
久保5	7899-6	27	1区	曲物副板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	副板3
久保5	7899-7	27	1区	曲物副板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	副板4
久保5	7899-8	27	1区	曲物木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘1
久保5	7899-9	27	1区	曲物木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘2
久保5	7899-10	27	1区	曲物木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘3
久保5	7899-11	27	1区	曲物木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘4
久保5	7899-12	27	1区	曲物木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘5
久保5	7899-13	27	1区	曲物木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘6
久保5	7899-14	27	1区	曲物木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘7
久保5	7899-15	27	1区	曲物木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘8
久保5	7899-16	27	1区	曲物木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘9
久保5	7900-1	28	1区	曲物側板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	3段目
久保5	7900-2	28	1区	曲物帯板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	帯板上
久保5	7900-3	28	1区	曲物帯板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	帯板下
久保5	7900-4	28	1区	曲物副板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	副板1
久保5	7900-5	28	1区	曲物副板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	副板2
久保5	7900-6	28	1区	曲物副板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	副板3
久保5	7901		1区	井戸側板	SE301	モミ属	井戸側材南側S-3

表8 二葉町遺跡 SE301 井戸枠など構築材の樹種構成

樹種	井戸枠材										割材 東	角材 東		
	側板					板材	横棟				3	1		
	東	西	南	北	ほか		東	西	北	南	南東	南西	北東	北西
ヒノキ	7	3	2	8	1		2	2	1		1	1		
モミ属	1	3	4	6	12	3								3
スギ	2	2			2	1		1	3	5				1
ツガ属	1	6			1	1								
アカマツ	2	1	1	2	1								2	
コウヤマキ	2		1					1						1
アスナロ														
アカガシ亚属														
ツブラジイ												1		1
クヌギ節														
サカキ														
合計	11	18	7	16	18	6	2	4	4	5	1	1	1	9

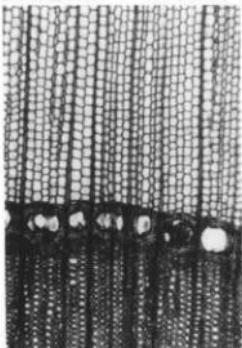
樹種	井戸側内									合計
	板材			割材			角材	角柱	割杭	
	上層	下層	最下層	上層	中層	最下層	最下層	最下層	最下層	
ヒノキ	1	1				4	4			42
モミ属		1	5			2				40
スギ			4							21
ツガ属		1	3		1					14
アカマツ										9
コウヤマキ		1	1							7
アスナロ				1						1
アカガシ亚属							1	1	2	4
ツブラジイ										2
クヌギ節						1				1
サカキ										1
合計	1	4	13	1	5	6	1	1	3	142

表9 二葉町遺跡 SE301 井戸側内下層・最下層出土曲物などの樹種構成

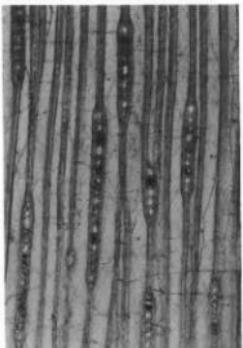
樹種	底板	最下層										合計		
		曲物		曲物(1段目)		曲物(2段目)		曲物(3段目)		情				
		底板	側板	底板	側板	側板	副板	帯板	木釘	側板	側板	底板	木釘	
ヒノキ	1	1	1	4	1	1	4	2	9	1	3	2	1	31
スギ												1	1	
ネズコ												1	1	
合計	1	1	1	4	1	1	4	2	9	1	3	2	1	33

挿図写真2 二葉町遺跡 15次出土木製品樹種(1)

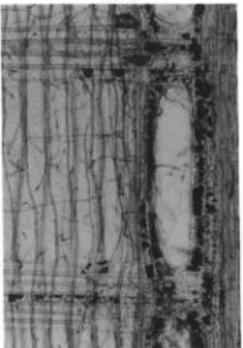
bar: —————



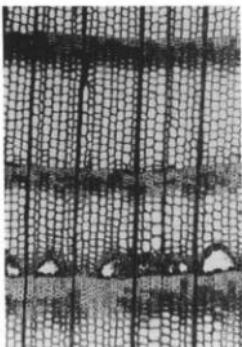
1a モミ属 (横断面)
W1-7879 bar:0.5mm



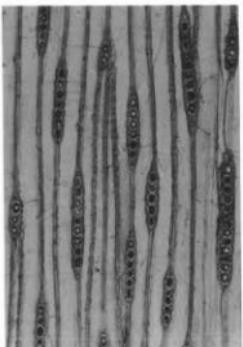
1b モミ属 (接線断面)
W1-7879 bar:0.2mm



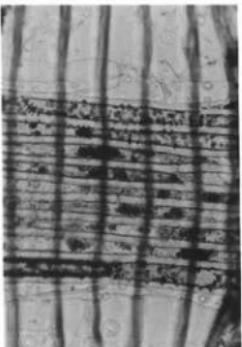
1c モミ属 (放射断面)
W1-7879 bar:0.2mm



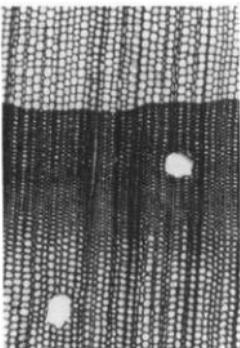
2a ツガ属 (横断面)
W1-7780 bar:0.5mm



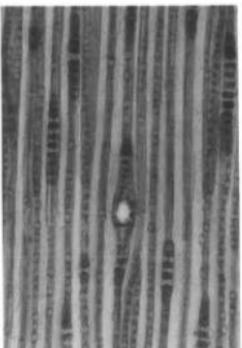
2b ツガ属 (接線断面)
W1-7780 bar:0.2mm



2c ツガ属 (放射断面)
W1-7780 bar:0.1mm



3a アカマツ (横断面)
W1-7823 bar:0.5mm



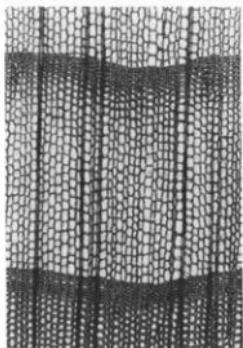
3b アカマツ (接線断面)
W1-7823 bar:0.2mm



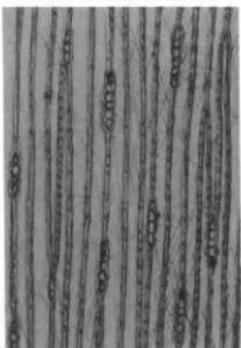
3c アカマツ (放射断面)
W1-7823 bar:0.05mm

挿図写真3 二葉町遺跡 15次出土木製品樹種(2)

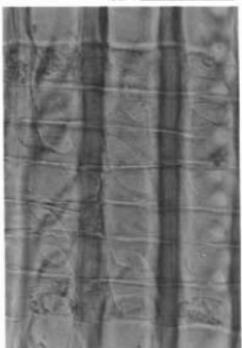
bar:



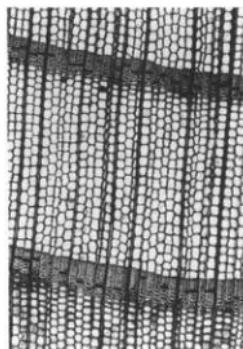
4a コウヤマキ(横断面)
W1-7779 bar:0.5mm



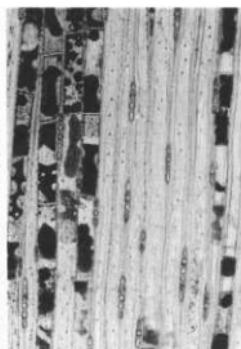
4b コウヤマキ(接線断面)
W1-7779 bar:0.2mm



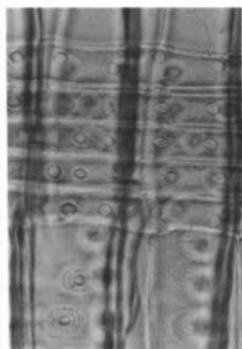
4c コウヤマキ(放射断面)
W1-7779 bar:0.05mm



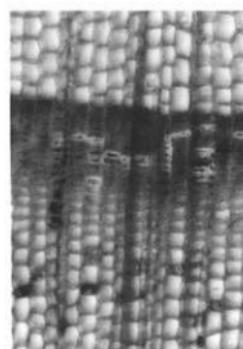
5a スギ(横断面)
W1-7785 bar:0.5mm



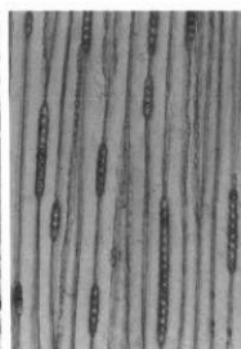
5b スギ(接線断面)
W1-7785 bar:0.2mm



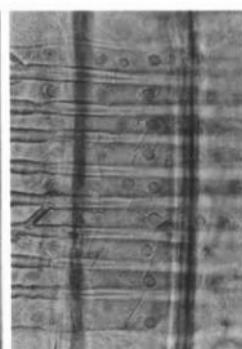
5c スギ(放射断面)
W1-7785 bar:0.05mm



6a ネズコ(横断面)
W1-7877-2 bar:0.2mm



6b ネズコ(接線断面)
W1-7877-2 bar:0.2mm



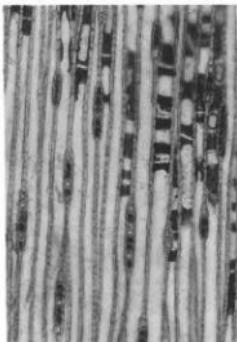
6c ネズコ(放射断面)
W1-7877-2 bar:0.05mm

挿図写真4 二葉町遺跡 15次出土木製品樹種(3)

bar: —



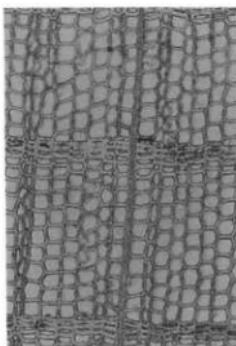
7a アサンノ (横断面)
W1-7798 bar:0.2mm



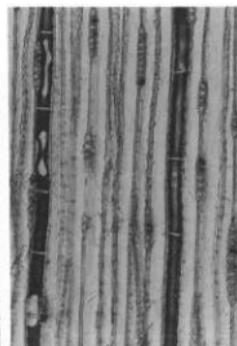
7b アサンノ (接線断面)
W1-7798 bar:0.2mm



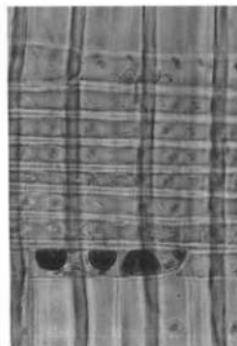
7c アサンノ (放射断面)
W1-7798 bar:0.05mm



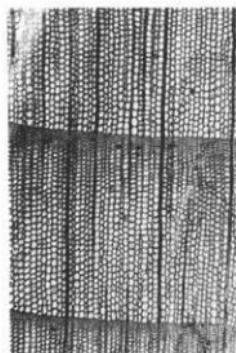
8a ヒノキ (横断面)
W1-7750 bar:0.2mm



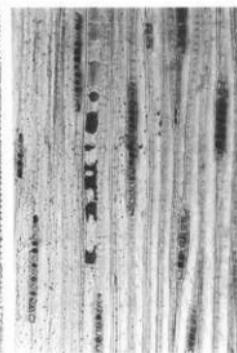
8b ヒノキ (接線断面)
W1-7750 bar:0.2mm



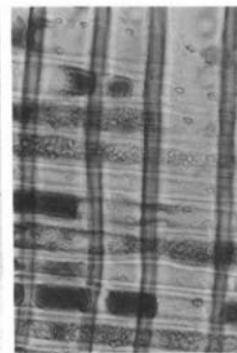
8c ヒノキ (放射断面)
W1-7750 bar:0.05mm



9a サワラ (横断面)
W1-7799 bar:0.5mm

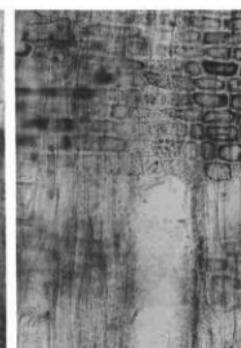
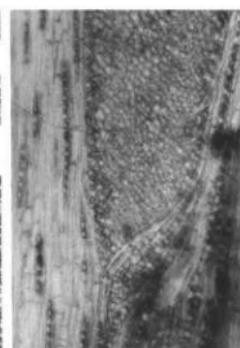
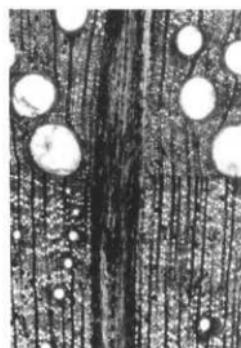
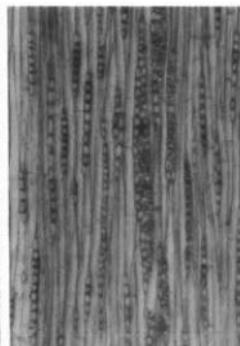
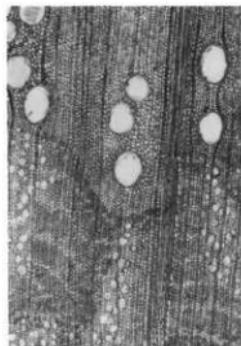
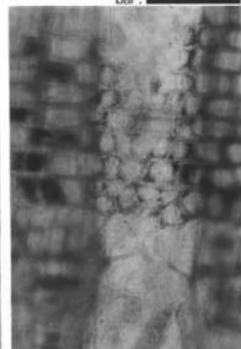
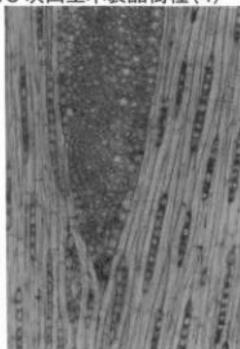
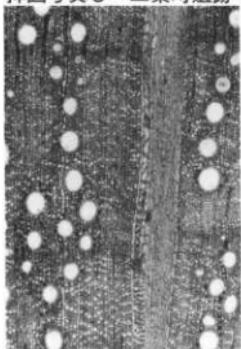


9b サワラ (接線断面)
W1-7799 bar:0.2mm



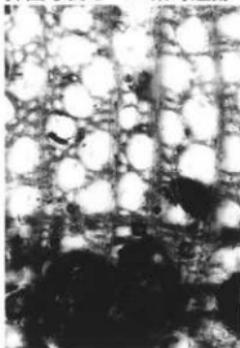
9c サワラ (放射断面)
W1-7799 bar:0.05mm

挿図写真5 二葉町遺跡 15次出土木製品樹種(4)

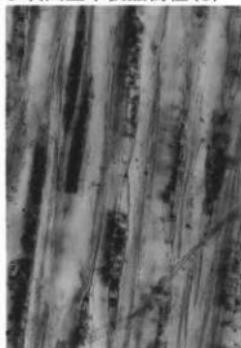


挿図写真6 二葉町遺跡 15次出土木製品樹種(5)

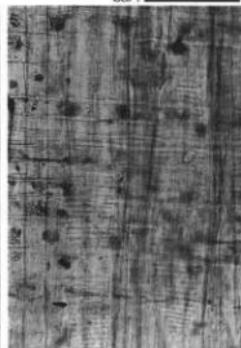
bar : ■



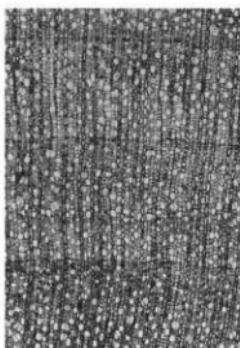
13a カツラ (横断面)
W1-7749 bar:0.2mm



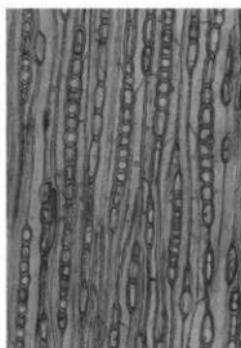
13b カツラ (接線断面)
W1-7749 bar:0.2mm



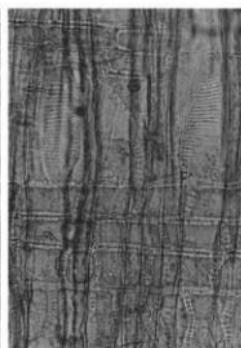
13c カツラ (放射断面)
W1-7749 bar:0.1mm



14a サカキ (横断面)
W1-7797 bar:0.5mm



14b サカキ (接線断面)
W1-7797 bar:0.2mm



14c サカキ (放射断面)
W1-7797 bar:0.1mm

第2節 第16次～第20次調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、第16次～3調査区、第17次～3調査区、第19次～1調査区、第20次～1調査区から出土した建築部材や木製品等について樹種同定を実施し、当時の木材利用状況を把握する資料とする。

1. 試料

試料は、第16次～3調査区の木製品7点、第17次～3調査区の木製品5点、第19次～1調査区の木製品1点、第20次～1調査区の木製品162点の合計175点である。資料詳細は結果と併せて表10～表12に示す。

2. 分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（拖水クロラール、アラビアガム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、観察された特徴を現生標本と比較して種類を同定する。なお、試料が広葉樹の場合には、独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを活用して同定を実施する。

同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、鳥地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、各樹種の木材組織については、林（1991）、伊東（1995、1996、1997a、1998、1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

3. 結果

樹種同定結果を表10～表12に示す。木製品は、針葉樹8種類（マツ属複維管束亞属・マツ属・モミ属・ツガ属・スギ・コウヤマキ・ヒノキ・ヒノキ科）、広葉樹9種類（コナラ属アカガシ亞属・クリ・ツブライジ・スダジイ・ケヤキ・クスノキ・クスノキ科・イスノキ・エゴノキ属）に同定された。なお、第20次～1のNo. 51は、針葉樹の樹皮であるが、木部が存在しないために樹種の同定には至らなかった。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亞属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～10細胞高。

・マツ属 (*Pinus*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行

は急ややや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められるが、年輪界に近い位置には少ない。放射組織は仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁は破損しており、鋸歯状突起の有無が判別できない。放射組織は単列、1～10細胞高。

マツ属は、放射化道管内壁の鋸歯状突起の有無で複雑管束軸属と単維管束軸属に分けられるが、本試料では仮道管内壁が破損しており、鋸歯状突起の有無が判別できなかつたため、マツ属とした。

・モミ属 (*Abies*) マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

・ツガ属 (*Tsuga*) マツ科

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は年輪界付近に認められが、顯著ではない。放射組織は仮道管と柔細胞で構成される。柔細胞の垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc.) コウヤマキ科コウヤマキ属

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は窓状となる。放射組織は単列、1～5細胞高。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・ヒノキ科 (Cupressaceae)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1～10細胞高。

表10 樹種同定結果 (1)

W.I.-No.	図番号	品物名	出土地区	出土層位	樹種
9572		舟形木製品	北地区	SX310.1上層	スギ
9573		柄	北地区	SX310.1上層	ヒノキ
9574		角棒	北地区	SX310.1上層	コウヤマキ
9575		角棒	北地区	SX310.1下層	マツ(モミ)東亞属
9576		割材	北地区	SX310.1下層	マツ(モミ)東亞属
9577		割材	北地区	SX310.1下層	マツ(モミ)東亞属
9578	137	納	北地区	SX312最上層	エゾノキ属
9579		丸棒	I区	SE320一段目	スダジイ
9580		丸棒	I区	SE320一段目	ツブライ
9581		角棒	I区	SE320一段目	コウヤマキ
9582	361	面物底板	I区	SE320上層	ヒノキ科
9583		丸棒	I区	SE320下層	ツブライ
9584	60	横砧	中火部	SE306 No1	イスノキ
9586		板材	西半	SE315底部	モミ属
9587	224	施継骨	西半	SE315底部	ヒノキ
9588		板材	西半	SE317内	モミ属
9589		井ノ彫材	西半	SE315底部	モミ属
9590	222	板材	中半	SE317	クスノキ
9591	217	井ノ彫材	西半	SE315底部	モミ属
9592		井戸側材	西半	SE315底部	モミ属
9593		井戸側材	中半	SE317	モミ属
9594	218	井戸側材	中半	SE317	No5
9595	219	井戸側材	中半	SE317	No6
9596		井戸側材	中半	SE317	No7
9597		井戸側材	中半	SE317	No8-1
9598	215	井戸側材	中半	SE317	No8-2
9599	214	井戸側材	中半	SE317	モミ属
9600	221	井戸側材	中半	SE317	モミ属
9601	220	井戸側材	中半	SE317	モミ属
9602	216	井戸側材	中半	SE317	モミ属
9603		板材	西半	SE316	モミ属
9604		板材	西半	SE316	No2
9605		板材	西半	SE316	No3
9607		板材	西半	SE316	No4
9608		角棒	西半	SE316	ヒノキ科
9609		板材	西半	SE316	モミ属
9610		板材	西半	SE316内上層	モミ属
9611		板材	中半	SE317	モミ属
9612	225	面物側板	西半	SE315上層	ヒノキ科
9613		板材	西半	SE316	ヒノキ科
9614		棒	西半	SE316	スダジイ
9615		板材	西半	SE316下層	クスノキ科
9616		板材	西半	SE316	スギ
9617		板材	西半	SE316	No9
9622	299	井ノ彫材	中半	SE317	モミ属
9623		井戸側材	中半	SE317	No10
9625	300	井ノ彫材	中半	SE317	No11
9627	295	井戸側材	中半	SE317	No13
9629		井戸側材	中半	SE317	No14
9631		井ノ彫材	中半	SE317	モミ属
9632		井ノ彫材	中半	SE317	ツガ属
9633		井ノ彫材	中半	SE317	No17の下
9634		井戸側材	中半	SE317	スギ
9635	301	井戸側材	中半	SE317	ツガ属
9636		板材	中半	SE317	モミ属
9637		角材	中半	SE317	モミ属
9638		板材	中半	SE317最上層	ツガ属
9639		板材	中半	SE317最下層	ツガ属
9640		板材	中半	SE317	スギ
9641		板材	中半	SE317最上層	針葉樹の樹皮
9642	298	板材	中半	SE317最上層	スギ
9643	296	板材	中半	SE317最下層	ツガ属
9644	302	板材	中半	SE317最下層	モミ属
9645		板材	中半	SE317最下層	スギ
9646		板材	中半	SE317最上層	ツガ属
9647		板材	西半	SE316撫形	クスノキ科

表11 樹種同定結果(2)

W 1-No.	図番号	遺物名	出土地区	出土層位	樹種
9648		板材	西半	SE316側影	スギ
9649		板材	西半	SE316	マツ属複葉管束葉属
9650		板材	西半	SE316側影	スギ
9651		板材	西半	SE316	スギ
9652		板材	西半	SE316底部枠内	スダジイ
9654		板材	西半	SE316	スギ
9655		板材	四半	SE316	スギ
9656		升戸側材	西半	SE316	ヒノキ科
		井戸側材	西半	SE316	マツ属
		井戸側材	西半	SE316	マツ属
		井戸側材	西半	SE316	マツ属複葉管束葉属
		井戸側材	西半	SE316	マツ属複葉管束葉属
9657	255	井戸側材	西半	SE316	モミ属
9658		横棟	四半	SE316	スギ
9659		横棟	西半	SE316	ヒノキ
9660	245	横棟	西半	SE316	ヒノキ
9661	256	升戸側材	西半	SE316下層枠内	モミ属
		井戸側材	西半	SE316下層枠内	スギ
9663	303	横棟	中半	SE317	モミ属
9664		板材	中半	SE317	ツガ属
9665		板材	中半	SE317	ツガ属
9666		板材	中半	SE317	モミ属
9667		板材	中半	SE317	モミ属
9668		板材	中半	SE317下層枠内	ツガ属
9669		板材	中半	SE317	モミ属
9670		板材	中半	SE317	モミ属
9671		板材	中半	SE317下層枠内	ツガ属
9672		横棟		SE03	モミ属
9673		板材	中半	SE03下層枠内	モミ属
9674	322	木筋(鉛)	中半	SE317	クリ
9674	322	木筋(鉛)	中半	SE317	コナラ属アカガシ等属
9675		板材	西半	SE316	マツ属複葉管束葉属
		板材	西半	SE316	スダジイ
		板材	西半	SE316	スギ
		板材	西半	SE316	マツ属複葉管束葉属
9677	244	横棟	西半	SE316	ヒノキ科
9678	247	横棟	西半	SE316	ヒノキ科
9679	252	隅柱	西半	SE316	ヒノキ
9680	260	漆刷	西半	SE316木枠内	ケヤキ
9682		板材	中半	SE317	スギ
9683		板材	西半	SE316	スダジイ
9685		板材	西半	SE316	スダジイ
9686		板材	西半	SE316	モミ属
9687		角材	内半	SE316	モミ属
9688		板材	西半	SE316	モミ属
9689		板ね	西半	SE316	モミ属
		横棟	中半	SE317	モミ属
		曲物無板	西半	SE315	ヒノキ
		曲物無板	西半	SE315	ヒノキ
9693	250	井戸側材	西半	SE316	クスノキ
9695		板材	西半	SE316	マツ属複葉管束葉属
9696	257	井戸側材	西半	SE316	モミ属
9697	249	井戸側材	西半	SE316	クスノキ
9698	248	井戸側材	西半	SE316	クスノキ
9699	251	井戸側材	西半	SE316	クスノキ
9700		井戸側材	西半	SE316	モミ属
9701		井戸側材	西半	SE316	モミ属
9702		井戸側材	西半	SE316	モミ属
9703	253	井戸側材	西半	SE316	モミ属
9704	251	井戸側材	西半	SE316	モミ属
9705		井戸側材	西半	SE316	クスノキ
9706		板材	西半	SE316	モミ属
9707		板材	西半	SE316	モミ属
9708		板材	西半	SE316	クスノキ科
9709		板材	西半	SE316	スギ
9739	259	曲物無板	西半	SE316	ヒノキ科
9710	306	横棟	中半	SE317	モミ属
9714		横棟	中半	SE317	モミ属
9715		横棟	中半	SE317	モミ属
9716	307	横棟	中半	SE317	モミ属
9717	308	横棟	中半	SE317	モミ属
9718	309	横棟	中半	SE317	モミ属

表12 樹種同定結果(3)

W1-No.	固番号	漁物名	出上地区	出上層位	樹種
9755①	258	曲物側板	西半	SE316	ヒノキ
9755②	258	曲物底	西半	SE316	ヒノキ科
9719	305	板材	中半	SE317	モミ属
9720		横枝	中半	SE317	モミ属
9721		横枝	中半	SE317	モミ属
9722	304	横枝	中半	SE317	モミ属
9723		井口側材	中半	SE317	モミ属
9724		割杭	中半	SE317	クスノキ
9725	311	曲物側板	中半	SE317	ヒノキ
9726	315	筈	中半	SE317	スギ
9727	310	横枝	中半	SE317	モミ属
9728	316	筈	中半	SE317	ヒノキ科
9729	317	筈	中半	SE317	スギ
9730	318	筈	中半	SE317	ヒノキ
9731	319	筈	中半	SE317	スギ
9732	320	筈	中半	SE317	ツガ属
9733	321	筈	中半	SE317	スギ
9734	321	筈	中半	SE317	スギ
		板材	中半	SE317	ヒノキ
		板材	中半	SE317	スギ
		板材	中半	SE317	モミ属
9760①	313	曲物側板	中半	SE317	ヒノキ科
9760②	313	曲物底	中半	SE317	ヒノキ
9762①	314	曲物側板	中半	SE317	ヒノキ
9762②	314	曲物内底(上)	中半	SE317	ヒノキ
9763③	314	曲物内底(中)	中半	SE317	ヒノキ
9762④	314	曲物内底(下)	中半	SE317	ヒノキ
9762⑤	314	曲物外底(上)	中半	SE317	ヒノキ
9762⑥	314	曲物外底(下)	中半	SE317	ヒノキ
9762⑦	314	曲物添版	中半	SE317	ヒノキ科
9763	223	曲物側板	西半	SE315底部	ヒノキ

上記ヒノキを含むヒノキ科のいずれかであるが、同定する上で重要な組織である分野壁孔が観察できない試料をヒノキ科とした。

・コナラ属アカシヤ属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では橢円形、單独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織がある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は3～4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・ツブライジ (*Castanopsis cuspidata* (Thunberg) Schottky) ブナ科シノキ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1～2個幅で放射方向に配列する。孔圈部は3～4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと集合～複合放射組織がある。

・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シノキ属
環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1～2個幅で放射方向に配列する。孔圈部は3～4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。

ツブライジとスダジイは、集合～複合放射組織の有無で区別しているが、ツブライジ

の集合～複合放射組織の出現頻度は個体によって異なり、中にはほとんど認められない場合もある。そのため、スタジイとした資料の中には集合～複合放射組織の出現頻度の低いツブライが含まれている可能性があるが、本報告では集合～複合放射組織の認められたものをツブライ、認められなかつたものをスタジイとした。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔團部は1～2列、孔團外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接続・斜方向に紋様状あるいは帶状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～6細胞幅、1～50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・クスノキ (*Cinnamomum camphora* (L.) Presl) クスノキ科クスノキ属

散孔材で、道管径は比較的大径、管壁は薄く、横断面では梢円形、単独または2～3個が放射方向に複合して散在する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～15細胞高でやや階層状に配列する。柔組織は周囲状～翼状。柔細胞には油細胞が認められる。

・クスノキ科 (*Lauraceae*)

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った梢円形、単独または2～3個が放射方向に複合して散在する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。柔細胞には油細胞が認められる。

・イスノキ (*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.) マンサク科イスノキ属

散孔材で、道管はほぼ単独で散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～20細胞高。

・エゴノキ属 (*Styrax*) エゴノキ科

散孔材で、横断面では梢円形、単独または2～4個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～20細胞高。

4. 審察

4-1 第16次-3調査区（久保町6丁目）

室町時代の遺物が出土する不明大型土坑であるSX310から出土した木製品は、SX310上層の舟形木製品がスギ、柄がヒノキ、SX310下層の角棒2点がマツ属複維管束亞属とモミ属、削材が2点ともマツ属複維管束亞属に同定された。いずれも針葉樹材を利用している。一方、SX310の東に舌状の飛び出し部分のSX312最下層から出土した柄は落葉広葉樹のエゴノキ属に同定された。

舟形の樹種は、六甲山南麓に位置する考古遺跡では玉津山中遺跡における古墳時代と鎌倉時代の舟形の調査例があり、いずれもヒノキに同定されている（島地、1996）。それ以外の調査例はなく、スギの利用例は今回がはじめてである。スギを利用した舟形は、

他の木製品でもスギが多用されている主に日本海側の但馬地域で多く出土している（伊東、1997b；パリノ・サーヴェイ株式会社、2002；伊東・藤田、2003）。

柄は、SX310上層とSX312最下層で樹種が異なり、ヒノキとエゴノキ属が利用されていたが、周辺地域で柄にヒノキとエゴノキ属が確認された例は知られていない。各樹種の材質をみると、ヒノキは木理が通直で割裂性が高く、加工が容易で耐水性・防虫性に優れている材質を有し、エゴノキ属は重硬で強度が高く、緻密な材質を有し、多少異なることから、用途の異なる柄であった可能性もある。

4-2 17次-3 調査区（二葉町6丁目）

井戸SE320から出土した丸棒はスダジイとツブラジイ、角棒はコウヤマキに同定された。コウヤマキの木材は、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易で耐水性・防虫性に優れている材質を有する。これに対して、スダジイ・ツブラジイは比較的強度が高いが保存性は高くなく、加工性も低い材質を有する。これらの材質からみて、各樹種の加工方法は材質に応じた加工法を採用している可能性がある。

曲物底板はヒノキ科であった。本遺跡周辺で行われた古代～中世の曲物底板を対象とした樹種同定結果をみると、ヒノキが多く、他にスギ、モミ属、マツ属複数管束並属の利用例が確認されている（島地・光谷、1989；島地・林、1991a；島地、1996）。これら既往の結果を踏まえると、今回のヒノキ科はヒノキの可能性がある。ヒノキの木材は、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易で耐水性・防虫性に優れている。また、輪方向組織のほとんどが仮道管で占められ、早材部・晩材部の材質差が少ないため、薄い板を割り取るのが容易で曲げ強度も高い材質を有しており、曲物には適材といえる。

4-3 第19次-1 調査区（久保町6丁目）

12世紀頃のSE306から出土した砧がイスノキに同定された。イスノキは重硬で強度の高い材質を有している。本遺跡周辺では、砧の樹種を明らかにした例が知られていないため、木材利用状況を把握することはできないが、農耕具である砧の用途を考えるとイスノキの材質は適材といえる。

4-4 第20次-1 調査区（二葉町6丁目）

SE315・SE316・SE317の3基から井戸から出土した井戸の構築部材や木製品162点は、針葉樹7種類と広葉樹7種類に同定された（表13）。SE315は、井戸機能時の遺物が確認されていないが、廃棄後の埋没上層から12世紀初頭～12世紀前半の須恵器碗等が出土している。SE316は、下層から出土した須恵器や土師器から、11世紀後半か遅くとも12世紀前半には機能していたと考えられている。SE317は井戸掘形から12世紀中頃の須恵器碗が出土しており、井戸の構築時期もこの頃と考えられており、3基の井戸で最も新しいと考えられている。各遺構別に木材利用状況について検討する。

表13 第20次-1次調査の造構・器種別種類構成

造構・局位・器種		分類群											合計	
		マツ属 複葉樹 東亞属	マツ属	モミ属	ツガ属	スギ	ヒノキ科	針葉樹の樹皮	アカガシ属 高麗	クリ	ツブライ	スダジイ	ケヤキ	
SE315	曲物側板						2							2
	曲物側板							1						1
	井戸側材			3										3
	曲物側板							1						1
	桶側材							1						1
SE316	板材				1									1
	井戸側材	2	2	6		1	1					5		17
	横棟					1	2	2						5
	隅柱						1							1
	曲物側板						1	1						2
	曲物籠							1						1
	漆匪											1		1
	板材	4	10		7		1				3		1	26
	角材									1				1
	角棒						1							1
	棒										1			1
	上層 板材			1										1
	下層 井戸側材		1		1									2
SE317	板材											1		1
	底部 板材										1			1
	掘形 板材			2								1		3
	井戸側材		17	5	3									25
	横棟		14											14
	曲物内籠				3									3
	曲物外籠				2									2
	曲物籠				1									1
	曲物添板					1								1
	曲物側板			2	1									3
SE318	船材											1		1
	木樺(頭)							1						1
	木樺(柄)								1					1
	苦			1	5	1	1							8
	角材		1											1
	板材	7	3	2	1			1						14
	板材				1									1
	板材		1											1
	割杭											1		1
	下層 板材		1	2										3
SE319	最下層 板材		2	3	3									8
	合計	6	2	65	14	26	18	11	1	1	1	1	1	162

(1) SE315

SE315では、井戸側板、曲物側板、桶側板、板材について同定を実施した。全て針葉樹であり、井戸側板と板材にモミ属、曲物側板にヒノキとヒノキ科が認められた。基本的な木材の利用状況はSE316や既往の調査成果と同様の傾向を示しているといえる。なお、桶については同時期の資料がほとんど無いため、木材利用については不明であったが、今回の結果から曲物と同じくヒノキが利用されていたことが推定される。

(2) SE316

SE316では、井戸構築材（側板・横桟・隅柱）、曲物（側板・簾）、板材、角材、角棒、棒、漆皿について樹種同定を実施した。モミ属、スギ、ヒノキ科・マツ属複雜管束亞属などの針葉樹材が多用されている傾向が窺える。

井戸構築材は、7種類から構成されていた。部位別に見ると、井戸側板でモミ属とクスノキが多く、他にマツ属（複雜管束亞属を含む）、ヒノキ科・スギ・クスノキが、隅柱や横桟にはヒノキ、ヒノキ科、スギが利用されている。このようにSE316井戸は、部位によって利用されている木材の樹種が異なり、複数の種類が利用されていることが特徴といえる。今回調査を行った井戸では、SE317でも複数の種類が利用されているが、広葉樹材の利用は確認されていない。また、二葉町遺跡久保6調査区・二葉6調査区における11世紀末～13世紀中頃の井戸構築材の樹種同定結果（松葉、2001）をみると、11世紀末～12世紀前半の井戸ではシイノキ属やスノキ属など広葉樹材の利用も認められるが、ヒノキを中心とする針葉樹材が多用されている。また、12世紀中頃以降の井戸構築材も針葉樹材が多用されているが、アカガシ東属などの広葉樹材が散見されるようになり、種類構成が増加する傾向が確認される。このような久保6調査区・二葉6調査区における時代別変化が普遍性の高い変化であるか否かは、今後の資料蓄積や発掘調査成果を踏まえた複合的評価が必要であるが、本遺跡における11世紀末～13世紀の井戸構築材に広葉樹を含む複数の樹種が利用されている傾向は普遍的な傾向と認識される。なお、井戸部材にクスノキを利用する例は、本遺跡の他には御歳遺跡の10世紀とされる井戸部材に3例確認されている（パリノ・サーヴェイ、2001）。

一方、板材には針葉樹のマツ属複雜管束亞属・モミ属・スギ・ヒノキ、広葉樹のスダジイ、クスノキ科が利用されていた。上記した井戸部材で利用されている樹種と共通する種類が多いことが窺える。その他の木製品では、曲物にヒノキ・ヒノキ科、漆皿にはケヤキ、角材・角棒・棒にヒノキ科・ツブラジイ・スダジイが利用されていた。このうち曲物については先述したようにヒノキの材質を考慮した木材利用が行われていた可能性が高く、本遺跡久保6調査区・二葉6調査区でも11世紀末～12世紀前半頃とされる曲物側板にヒノキが確認されており（松葉、2001）、同調的な結果といえる。

また、漆皿に利用されていたケヤキは耐朽性が高く、挽物本地としては一般的な樹種であるが、本遺跡周辺で出土した皿にケヤキの利用例はほとんど無い。兵庫県内のケヤキの利用例としては、山垣遺跡、深田遺跡、砂入遺跡、袴狹遺跡、市辺遺跡、横田遺跡など、但馬地域や丹波地域の古代の資料における利用例がある（島地・林、1990, 1991b; 伊東、1997b; 伊東・藤田、2003; 伊東、2006; 古環境研究所、2006）。今回の漆皿が挽物か引物か現時点で不明であるが、本地域において漆皿にケヤキが利用されていたことを示す結果として注目される。

(3) SE317

SE317では、井戸構築材（側板・横桟・曲物）、船材、木槌、箸、角材、板材、割杭について同定を実施した。井戸構築材では、側板や横桟にはモミ属を主としてツガ属、

スギが利用されている。モミ属が多い点はSE315やSE316と同様であるが、ツガ属の利用などで多少の違いが認められる。一方、井戸の集水施設に利用された曲物はヒノキ・ヒノキ科であり、井戸備材・棟材とは利用樹種が異なる。井戸の側板にモミ属とツガ属が多く利用される例は、玉津田中遺跡で確認された例がある（高地、1996）。また、上沢遺跡ではツガ属を主とする結果が得られている（パリノ・サーヴェイ株式会社、2002）。板材はモミ属、ツガ属、スギが多く、井戸備材・棟材と同様の種類構成となる。

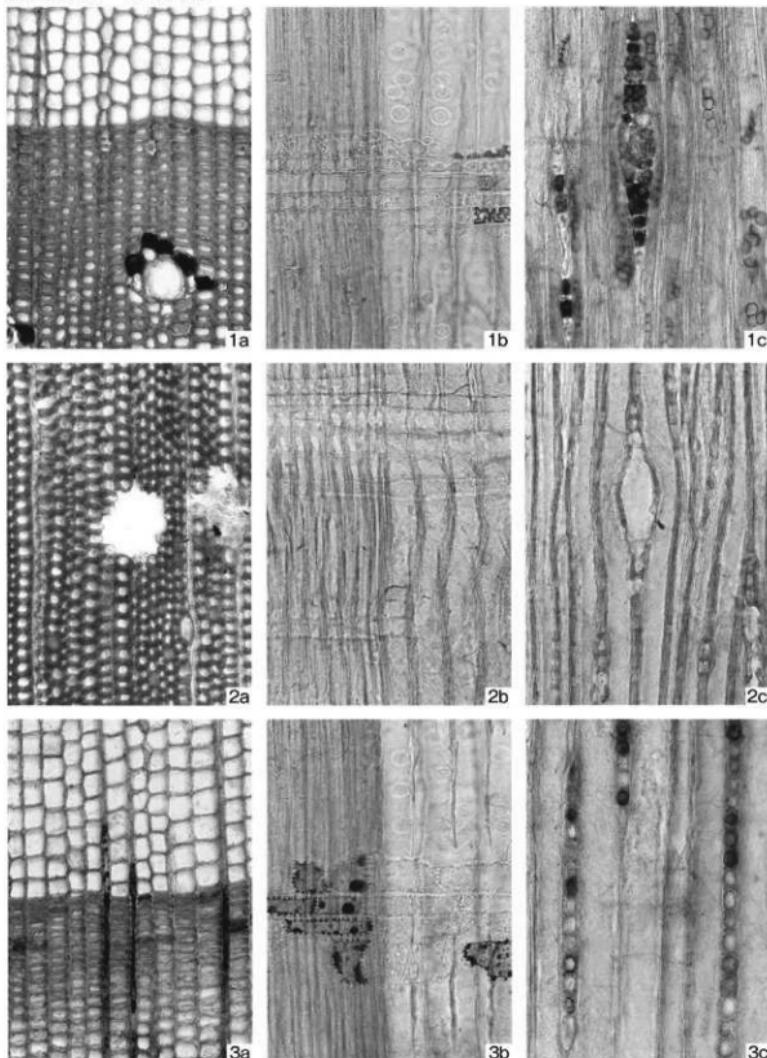
船材に認められたクスノキは、スギと共に船の部材として適材とされる樹種である（高地・伊東、1988）。本遺跡では、これまでにも井戸に転用された船材にクスノキが認められた例があり（松葉、2001）、過去の調査例とも調和的である。木樋は、頭がアカガシ亜属、柄がクリであり、重硬で強度の高い木材を選択していたことが推定される。周辺では同時期の木樋について樹種を明らかにした例が無いが、本遺跡ではこれまでにも12世紀中頃～12世紀末の横樋にアカガシ亜属が確認されており（松葉、2001）、同様の木材利用が推定される。

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 跡微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所.
- 伊東 隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東 隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東 隆夫, 1997a, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東 隆夫, 1997b, 砂入遺跡出土木製品の樹種.「兵庫県文化財調査報告第161号 砂入遺跡 本文編 小野川放水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅰ)」, 兵庫県教育委員会, 141-152.
- 伊東 隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東 隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東 隆夫, 2006, 横田遺跡出土木材の樹種同定, 「兵庫県文化財調査報告第303号 横田遺跡・横田北古墳群発掘調査報告書」, 兵庫県教育委員会, 96-102.
- 伊東隆夫・藤田 淳, 2003, 等差遺跡出土木製品の樹種.「兵庫県文化財調査報告第259号 「カヤガ谷墳墓群・大谷墳墓群・坪井遺跡」-小野川放水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(IV)-」, 兵庫県教育委員会, 91-117.
- 株式会社 古環境研究所, 2006, 兵庫県市辺遺跡出土木材の樹種同定.「兵庫県文化財調査報告第304号 市辺遺跡」, 兵庫県教育委員会, 59-70.
- 松葉 孝子, 2001, 二葉町遺跡出土木製品の樹種同定.「二葉町遺跡発掘調査報告書 第3・5・7・8・9・12次調査」, 神戸市教育委員会, 141-166.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 2001, 御城遺跡から出土した木製品等の樹種.「御城遺跡 第4-6-14-32次発掘調査報告書」, 神戸市教育委員会, 114-122.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 2002, 上沢遺跡 第33次調査.「平成11年度神戸市埋蔵文化財年報」, 神戸市教育委員会, 291-299.
- パリノ・サーヴェイ株式会社, 2002, 五反田遺跡出土木材の樹種.「兵庫県文化財調査報告第227号 県立コウノトリの郷公園整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 上脇遺跡II」, 兵庫県教育委員会, 36-43.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz L. and Gasson P.E. (編), 2006, 鈎葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東 隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz L. and Gasson P.E. (2001) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 高地 謙, 1996, 玉津田中遺跡出土木製品の樹種.「兵庫県文化財調査報告第135-6号 神戸市西区 上津田中遺跡 - 第6分冊 - (総括編) 田中特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書」, 兵庫県教育委員会, 15-49.
- 高地 謙・林 昭三, 1990, 山垣遺跡出土木製品の樹種.「兵庫県文化財調査報告第75号 山垣遺跡」, 兵庫県教育委員会, 57-64.
- 高地 謙・林 昭三, 1991a, 福田片岡出土木製品の樹種.「兵庫県文化財調査報告第94号 福田片岡遺跡 - 太子・竜野バ

- 「バス建設に伴う発掘調査報告書～」、兵庫県教育委員会、1-20。
- 島地 謙・林 昭三、1991b、深川遺跡出土木製品の樹種、「兵庫県文化財調査報告第99冊 深川遺跡・カナゲダ遺跡 日高バイパス建設工事に伴う但馬国府推定地内発掘調査報告書」、兵庫県教育委員会、85-90。
- 島地 謙・伊東 隆夫、1982、図説木材組織、地球社、176p。
- 島地 謙・伊東 隆夫(編)、1988、日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、296p。
- 島地 謙・光谷 拓実、1989、小丸遺跡出土木器の樹種、「兵庫県文化財調査報告第66冊 龍野市小丸遺跡II 遺跡竜野相生線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」、兵庫県教育委員会、79-87。
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編)、1998、広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト、伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修)、海青社、122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*.]

挿図写真7 木材(1)



1. マツ属複維管束亞属（第20次-1;No.61）

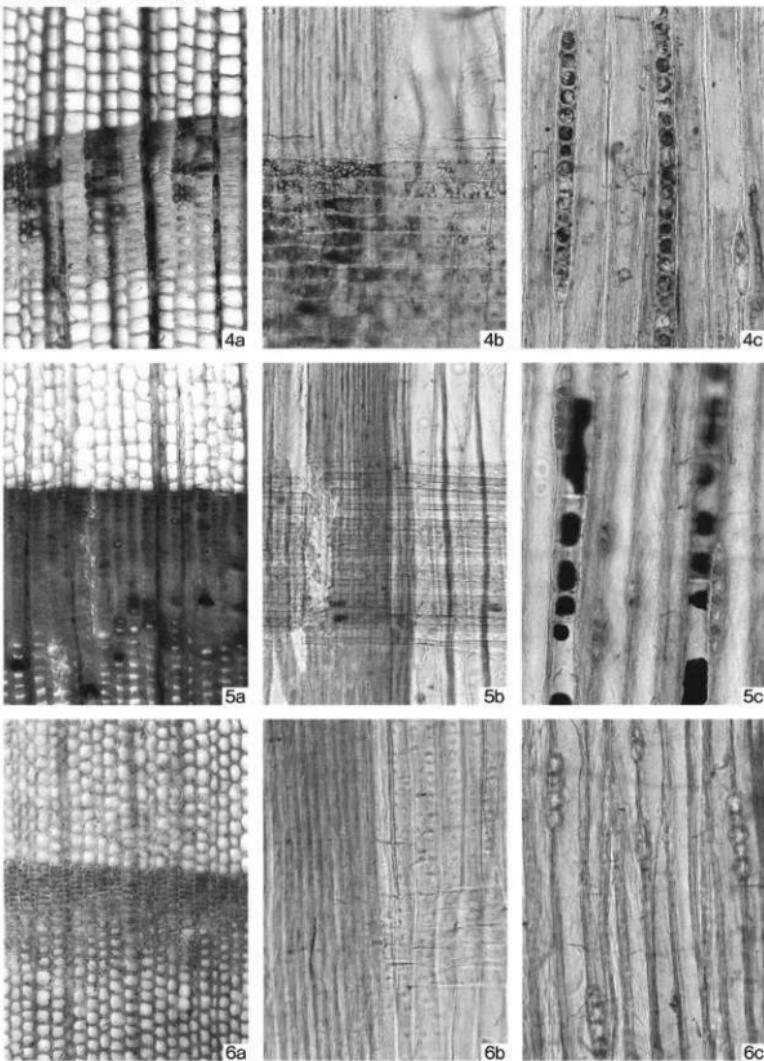
2. マツ属（第20次-1;No.69）

3. モミ属（第20次-1;No.10）

a : 木口, b : 柱目, c : 板目

200 μ m:a
100 μ m:b,c

挿図写真8 木材(2)



4. ツガ属 (第20次-1;No.38)

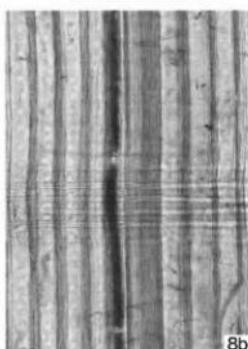
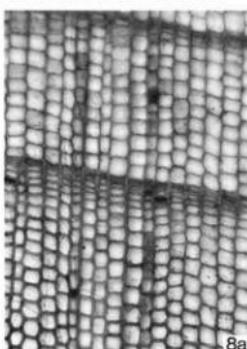
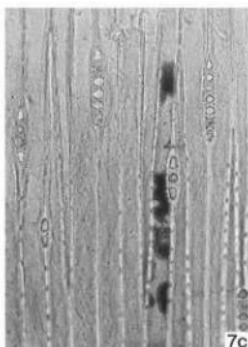
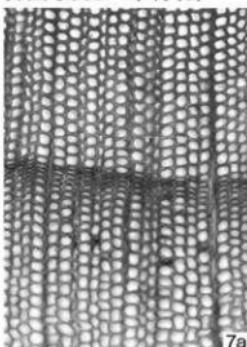
5. スギ (第20次-1;No.102)

6. コウヤマキ (第17次-3;No.3)

a : 木口, b : 横目, c : 板目

200μm:a
100μm:b,c

挿図写真9 木材(3)



7.ヒノキ (第16次-3;No.2)

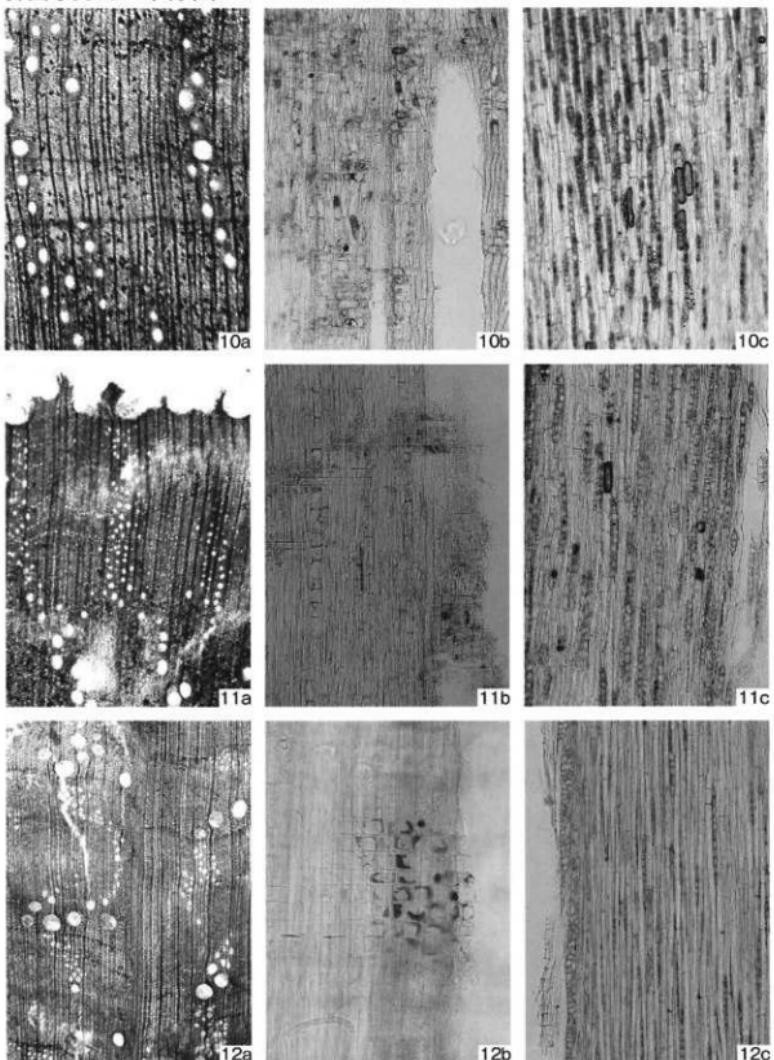
8.ヒノキ科 (第17次-3;No.3)

9.針葉樹の樹皮 (第20次-1;No.51)

a:木口, b:桿目, c:板目

200 μ m:a
100 μ m:b,c

挿図写真10 木材(4)



10.コナラ属アカガシ亜属 (第20次-1;No.90)

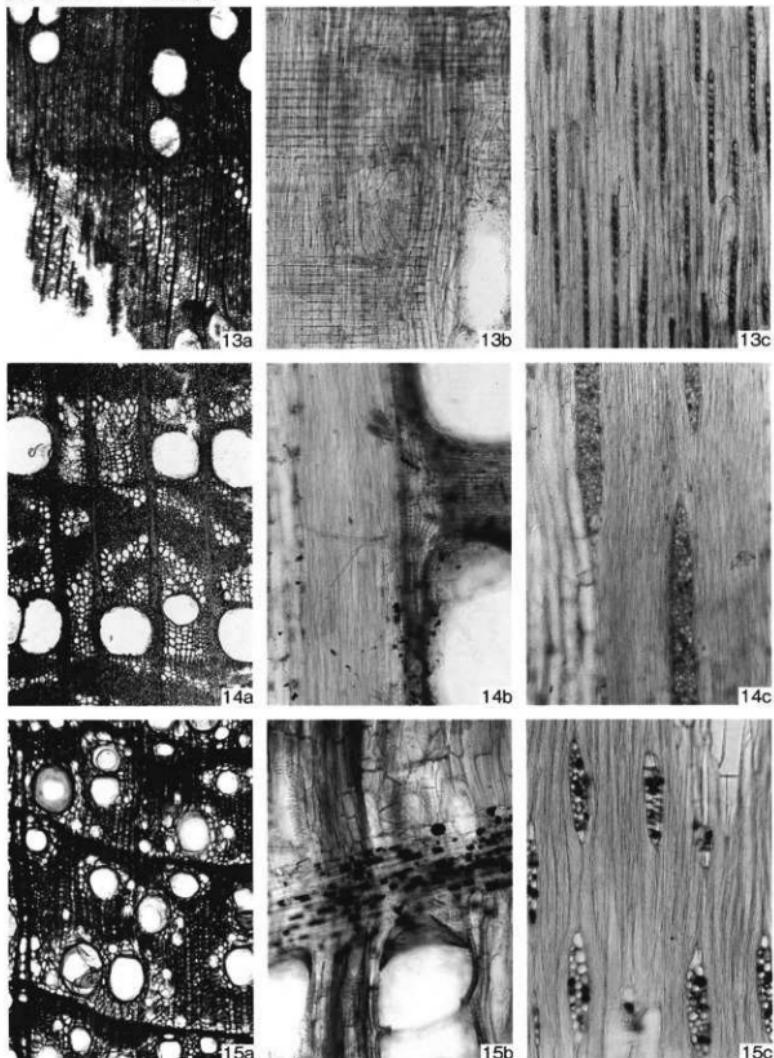
11.クリ (第20次-1;No.89)

12.ツブライ (第17次-3;No.5)

a:木口, b:径目, c:板目

200μm:a
100μm:b,c

挿図写真11 木材(5)



13.スダジイ (第20次-1;No.92)

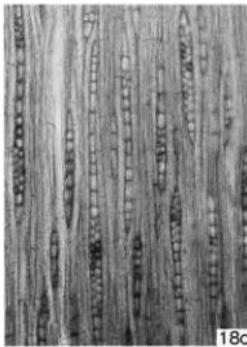
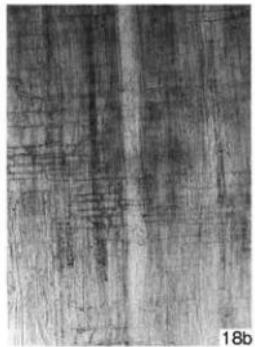
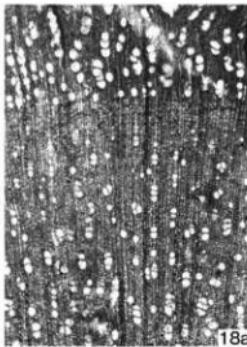
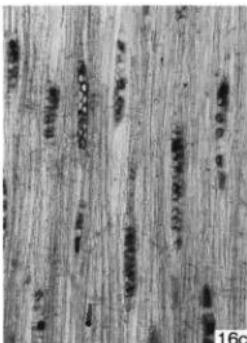
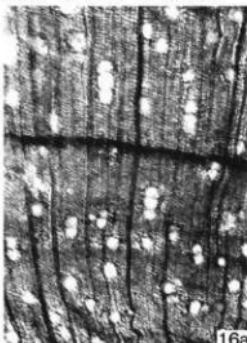
14.ケヤキ (第20次-1;No.98)

15.クスノキ (第20次-1;No.5)

a : 木口, b : 柱目, c : 板目

— 200 μ m:a
— 100 μ m:b,c

挿図写真12 木材(6)



16.クスノキ科 (第20次-1;No.123)

17.イスノキ (第19次-1;No.1)

18.エゴノキ属 (第16次-3;No.7)

a : 木口, b : 柱目, c : 板目

— 200μm:a
— 100μm:b,c

第8章 まとめ

今回の調査で明らかになったことについて、平安時代～鎌倉時代を中心にこれまでの調査成果と合わせて簡単にまとめたい。

まず、二葉町6丁目地区で10世紀代の掘立柱建物（SB328・SB329）、井戸（SE320）が一つのまとまりとして検出されたことがあげられる。この2棟の建物は、その規模と位置関係から見て主屋と附属屋であろうと考えられる。この建物が建っている敷地の範囲を確定することは困難であるが、北と東には耕作に伴うスキ溝が多数検出されており、敷地の周辺には耕作地が広がっていたものと思われる。この建物が、当遺跡での平安時代集落として最初のものである。

集落の最盛期は、11世紀中頃から13世紀前半にかけての時期である。この時期に掘立柱建物が、ほぼ同じ場所もしくは隣接した場所に、繰り返し何度も建て替えられている。屋敷地内での建て替えが行われ、集落の中で屋敷地が固定されていたものと考えられる。また、井戸も少しづつ場所を移しながら地下の水脈に沿って何度も掘り直されている。

調査区全体に掘立柱建物の柱穴となりうるピットと、耕作痕であるスキ溝が万遍なく広がっており、掠乱や遺構面の削平により今回掘立柱建物として報告したもの以外にも、建物が存在した可能性があるため、屋敷地の中で建物の集中している範囲を限定することはできない。また、横列があれば屋敷地の範囲がわかるが、それも検出できなかつたため、屋敷地の範囲も不明である。おそらく生垣であったのかも知れない。集落の中において掘立柱建物と井戸からなる屋敷地とその周辺の耕作地という土地利用が想定できるが、具体的に遺跡の中のどの部分が屋敷地で、どの部分が耕作地であるかということは明確にすることはできなかった。なお、包含層から東播系の軒平瓦や二葉町6丁目地区SE317から平瓦の破片が出土しているが、出土点数が少數のため付近に瓦葺の建物が存在するかどうかは明確でない。

今回3基の木棺墓を検出したが、いずれも掘立柱建物が存在する位置から若干離れた場所に位置しており、敷地内の「屋敷墓」と考えられる。久保町6丁目ではSB313とST302、二葉町6丁目ではSB324とST304がほぼ同時期であり、建物とそれに付随する屋敷墓の関係にあると想定される。久保町5丁目のSB301とSE301については、各々の時期が明確ではないが、まわりに建物がなく位置関係からST301はSB301の屋敷墓であると想定できる。

当遺跡では合わせて7基の木棺墓が確認されたことになる。久保町6丁目地区のST301からは漆塗りの鳥帽子が出土しており、身分の高い男性が葬られていたと考えられている¹⁰⁾。今回検出した木棺墓の内、久保町6丁目のST302には土師器小皿、赤漆塗りの皿、黒漆塗りの皿と2個体の白磁碗の破片3片、鉄刀1振を埋納している。白磁はわざと破片の状態で埋納しており、どのような意味があるのか不明である。

おそらく屋敷墓を持つ建物と持たない建物は、集落の中での階層差を表しており、富裕な階層のものと一般庶民が集落の中に混在していたものと想定される。

出土遺物としては、日常雑器以外に輸入磁器、蛸壺、土錠、船材などが出土し、海と

の密接な関係がある集落と考えることができる。二葉町6丁目のSE306からは11世紀末から12世紀前半に廃棄され、片戸枠に転用された「複材構造船」が出土し、当時の船舶の実態を知る上で貴重な資料となっている⁽²⁾。

以上、甚だ推測の多いものとなったが、今回の調査において気付いた点について若干触れた。

二葉町遺跡が位置する駒ヶ林は海に近く、平安時代末の公卿の日記『山塊記』に、「小馬林」に寄港する記述があり、これは現在の長田区駒ヶ林の長田港に比定されている。当時、公卿が乗船する船が寄港できる港が存在したことがうかがえる。また、この地は、源平一ノ谷の合戦の舞台であり、平忠度が駒ヶ林の港へ向かって敗走の際、この付近で討たれ、その場所は現在平忠度腕塚・崩塚として地域の人々によって大切に管理されている。時代は下って、湊川の合戦の際ににおいても、駒ヶ林の港は、足利尊氏の軍勢の上陸場所として、重要な役割を果たしている。

二葉町遺跡の集落の最盛期は11世紀中頃から13世紀前半にかけてであることは先ほども述べたが、この時期は平家の台頭や日宋貿易の拠点としての大輪田泊の修築、平清盛による福原遷都、源平の争乱、鎌倉幕府の成立と時を同じくする。

二葉町遺跡で検出した集落は、村の中に広がる屋敷地と耕作地という農村的な景観と、駒ヶ林の港に隣接し、蛸壺・土錐等の漁撈具、船材の出土という漁村の要素を同時に持つ、半農半漁の村として位置づけることができる。

(注1) 川上厚志編 『二葉町遺跡発掘調査報告書 第3・5・7・8・9・12次調査』 神戸市教育委員会 2001

(注2) 同 上

写 真 図 版

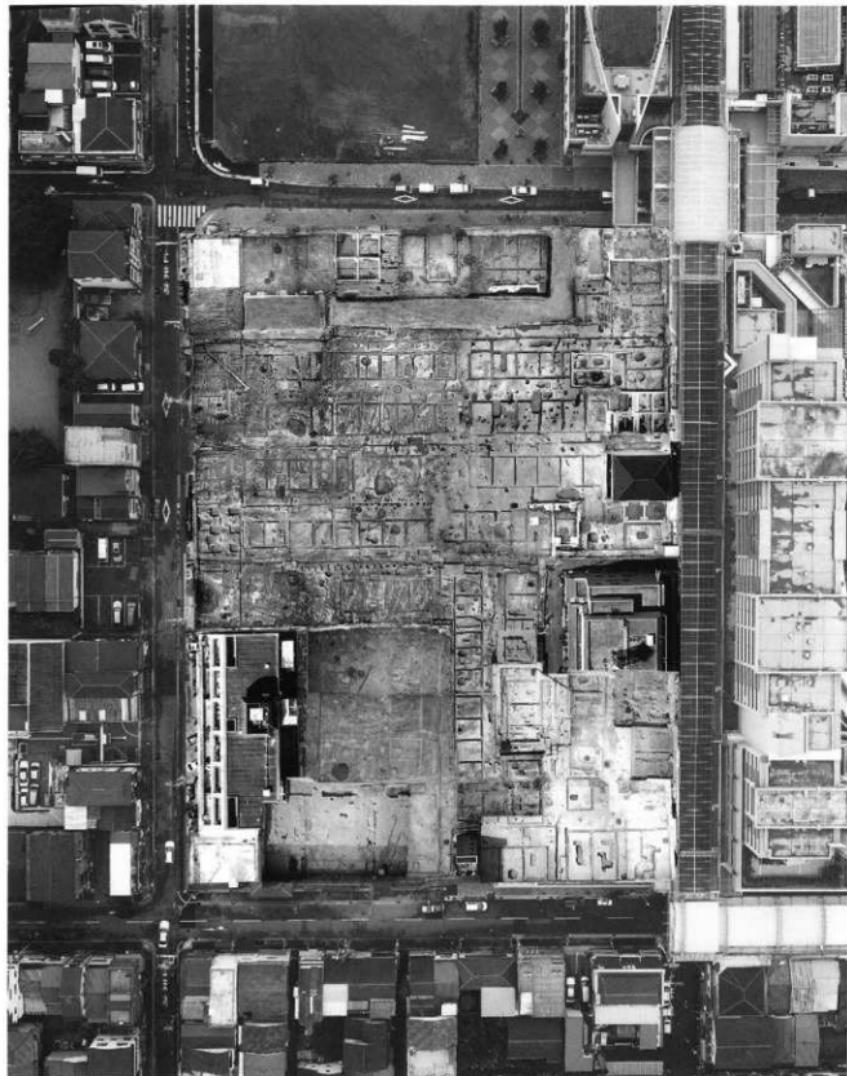


調査地航空写真（俯瞰モザイク）

図版2



久保町6丁目地区 調査区航空写真（俯瞰モザイク）



二葉町6丁目地区 調査区航空写真（俯瞰モザイク）

図版4



久保町5丁目 NR101 断面（南から）

久保町5丁目 NR101（南から）

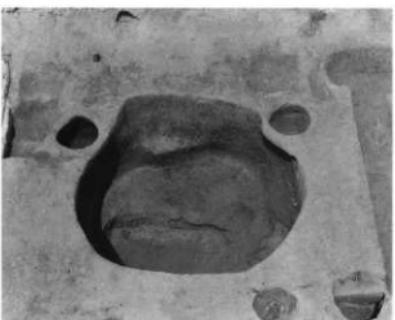


久保町5丁目 SB301（東から）

久保町5丁目 調査区中央部全景（東から）



久保町5丁目 SE302（南から）



久保町5丁目 SE303（南から）

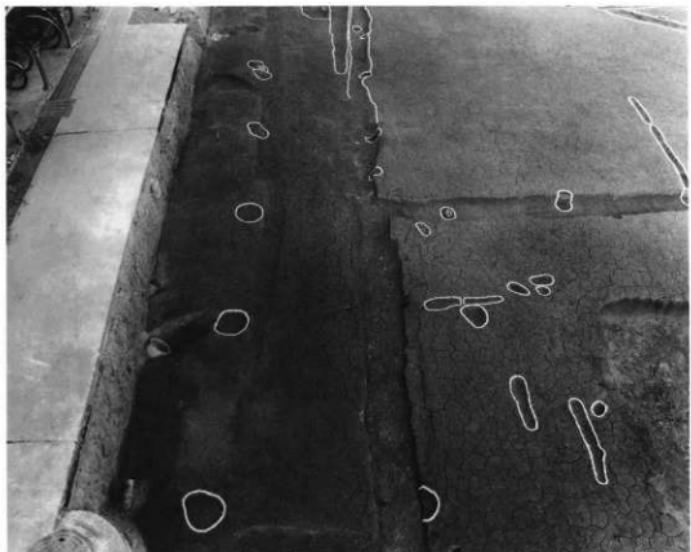


久保町5丁目
調査区南西部全景（北から）

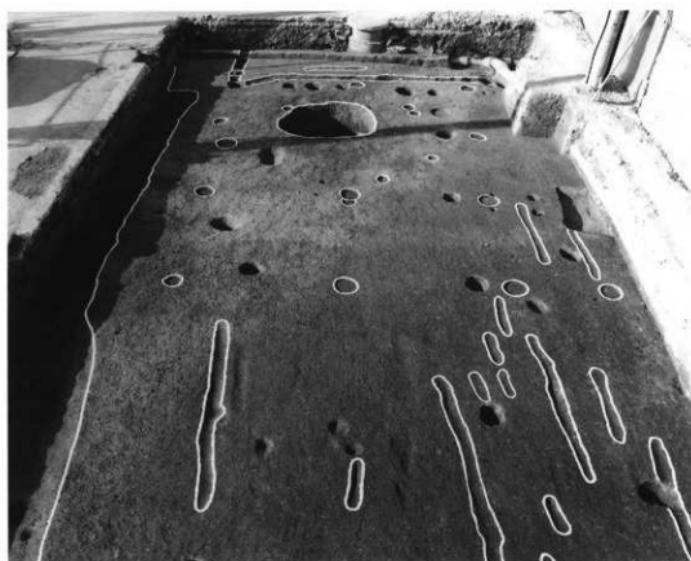


久保町5丁目
ST301（西から）

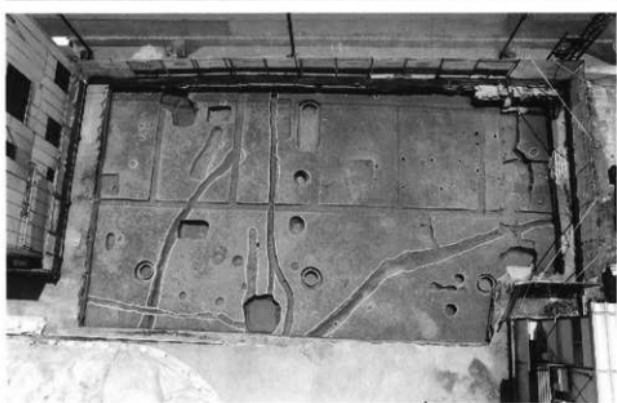
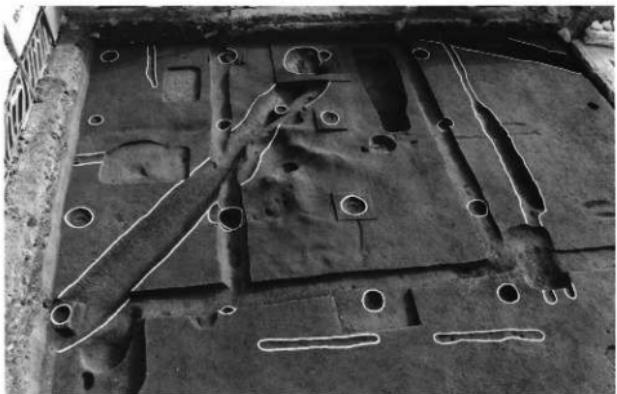
図版6



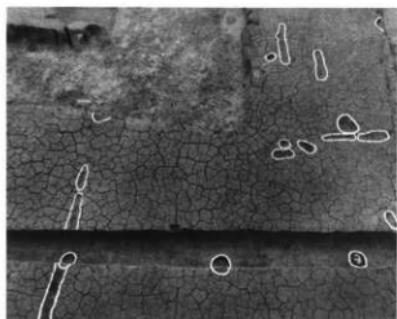
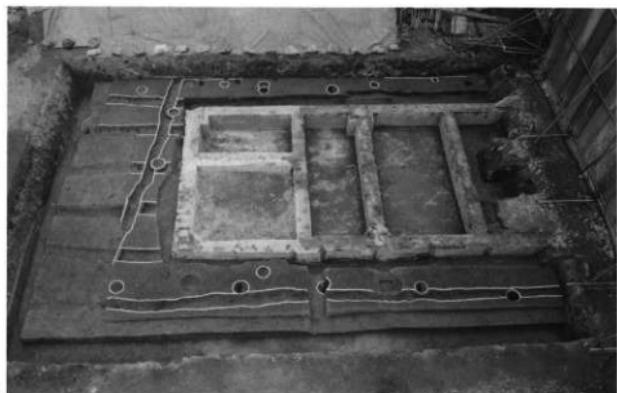
久保町6丁目
SB311 (西から)



久保町6丁目
SB313 (南から)



図版8





久保町6丁目 SE305・SE306（南から）



久保町6丁目 SE306（南から）



久保町6丁目 SE308（南から）



久保町6丁目 SE310（東から）



久保町6丁目 SE311（東から）

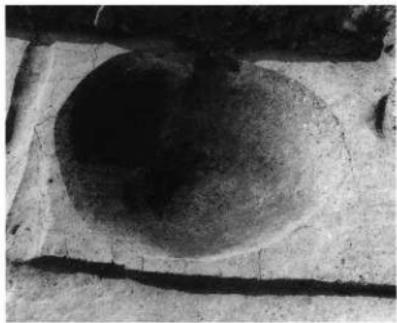


久保町6丁目 SE312（西から）

図版10



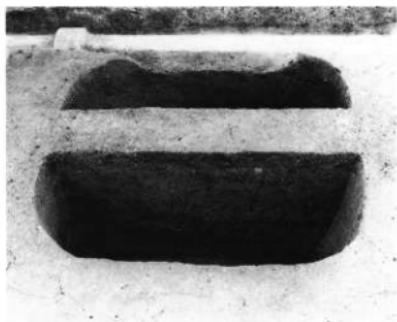
久保町6丁目 SK313（南から）



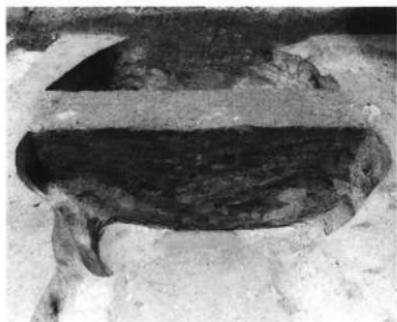
久保町6丁目 SK306（南から）



久保町6丁目 SK307（東から）



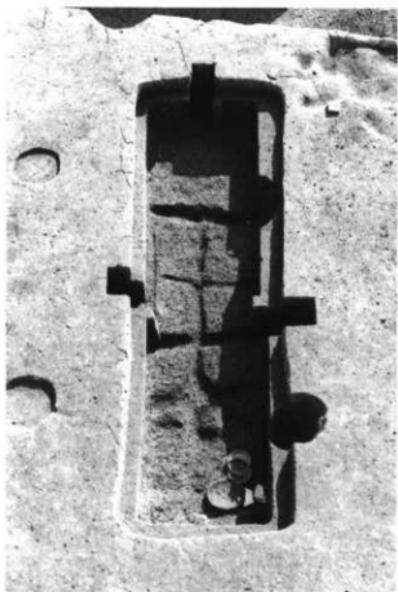
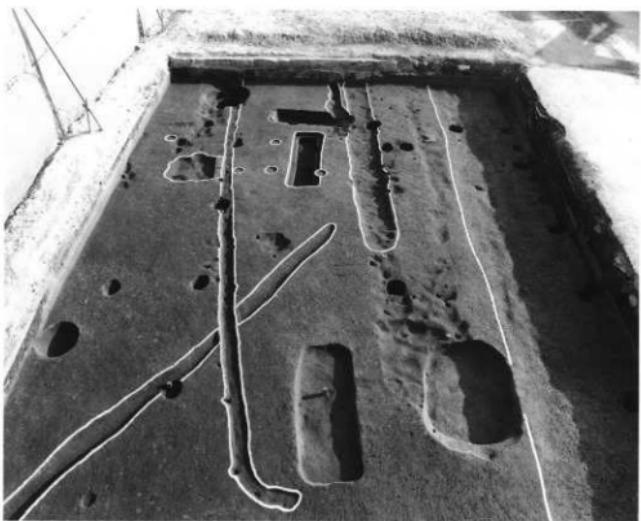
久保町6丁目 SK309（南から）



久保町6丁目 SK310（南から）



久保町6丁目 SK311（北から）



図版12



久保町6丁目 SX309（東から）



久保町6丁目 SX310～SX312（東から）



久保町6丁目
SX313（西から）



二葉町6丁目
調査区北西全景（東から）



二葉町6丁目
SB323とSE315～SE318
(南から)



二葉町6丁目
SB328東半（南から）

図版14



二葉町6丁目 SB328 西竪柱穴（南から）



二葉町6丁目 SB322（南から）



二葉町6丁目 SB329（南から）



二葉町6丁目 SE315（東から）



二葉町6丁目 SE316（東から）



二葉町6丁目 SE320（西から）



二葉町6丁目 SE317（東から）



二葉町6丁目 SE318（北から）

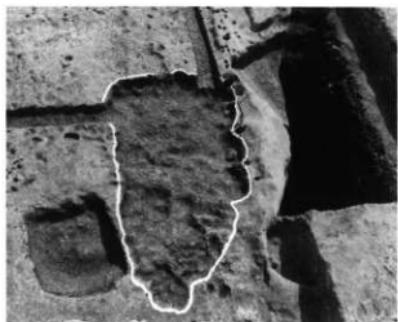


二葉町6丁目 SE319（南から）



二葉町6丁目 SK203（東から）

図版16



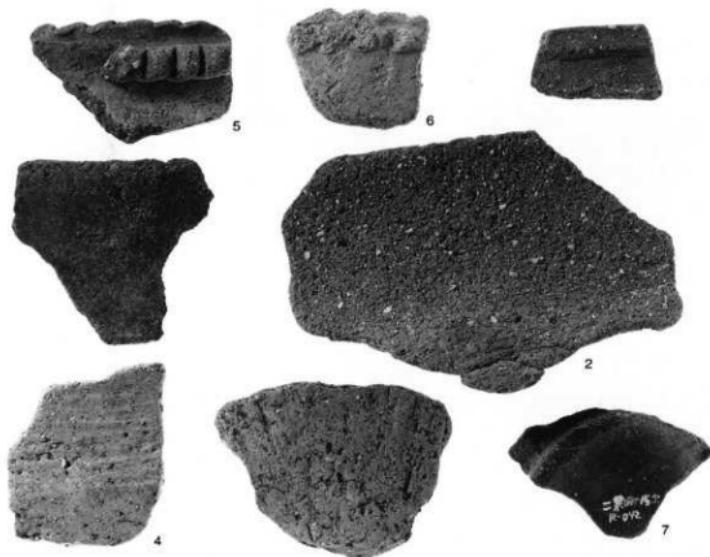
二葉町6丁目 SK306（東から）



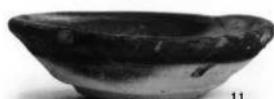
二葉町6丁目 SK308（西から）



二葉町6丁目 ST302（北から-）



図版18



11



12



13



31



32



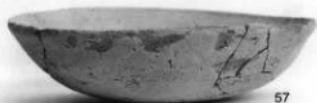
35



図版20



51



57



61



64



62



69



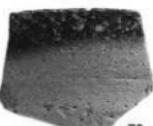
73



70



75



76



79



77



78



80



SK307



83



84

図版22



85



86



87



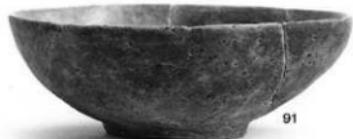
88



89



90



91



92



95



96

ST302



101



102



103

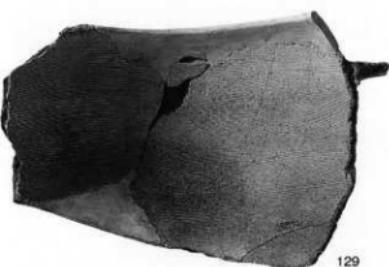


105

図版24



129



129



130



131



132



134



136



136



143



151



152



193



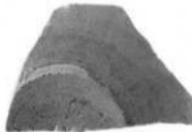
181



180



182



183



185



187



189



191



190

図版26



202



202



SE315



206



211



213



207



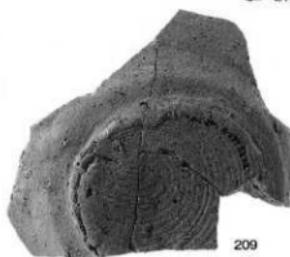
208



212



210



209



SE316



226



228



239

図版28



232



241



229



227



230



240



226



235



234



231



233



242



SE317



267



268



272



276



275

図版30



277



280



282



286



287



288



291



292



291



292



294



293



294



293



SE318



324



328



329



333



330

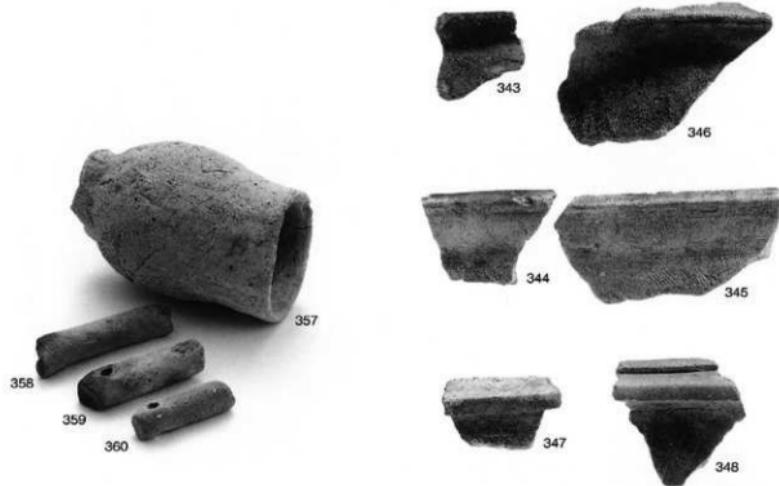
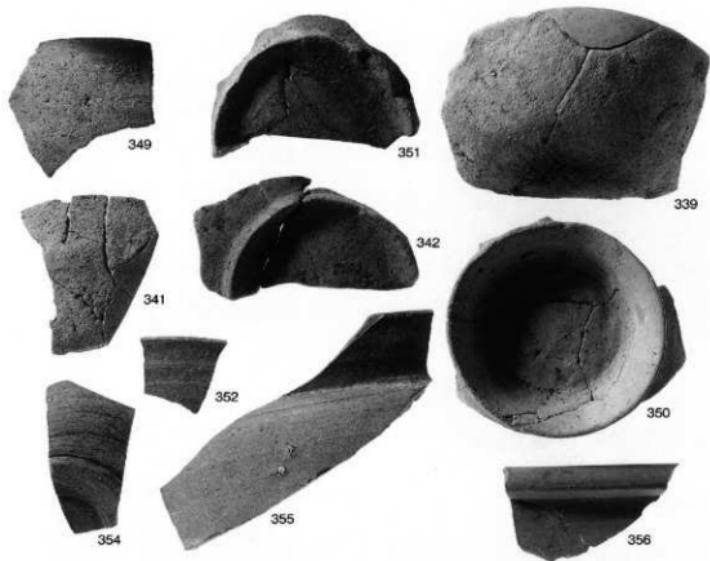


338



335

図版32





365



366



ST304



373



374



375



377



376

図版34



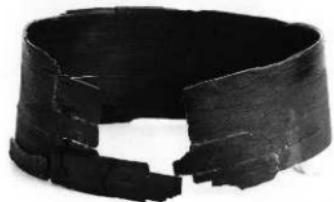
SE301出土木質遺物



(17) 上端部分



同左 中央付近



SE301出土曲物 (26)



同左 (27)



同左 (28)



同左 (29)

図版36



SE306出土構材（60）

SX312出土木質遺物（右下：137）



SE315・SE317出土木質遺物（左半：SE317、右：SE315）



SE316出土木質遺物



同上 出土木皿 (260)

SE317出土曲物 (312)

図版38



SE317出土曲物 (313)



同左 (314)



同上 横槌 (322)



同左 箸 (左より: 315~317、319、318、320、321)

報告書抄録

ふりがな	ふたばちょういせき							
書名	二葉町遺跡発掘調査報告書 第14～21次調査							
副書名	新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う							
編著者名	東喜代秀(編)・黒田恭正・中村大介							
編集機関	神戸市教育委員会							
所在地	〒650-8570 兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号 TEL078-322-6480							
発行年月日	2008年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
二葉町遺跡	兵庫県神戸市長田区 久保町5丁目・6丁 日・二葉町6丁目	28106	6-24	34° 38' 58"	135° 8' 59"	14次 20010213～ 20010321 15次 20010429～ 20010903 16次 20020426～ 20030221 17次 20030520～ 20040316 18次 20040409～ 20050210 19次 20050509～ 20050916 20次 20060515～ 20061120 21次 20070531～ 20071225	2,160 1,030 2,700 1,060 1,236 1,330 1,320 1,170	市街地再開発事業
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				特記事項	
集落跡	平安時代～ 鎌倉時代	掘立柱建物、 井戸、土坑、 木棺墓など	須恵器・土師器・青磁・白磁・ 瓦・瓦器・土鍤・縄文土器・ 弥生土器					
要約	10世紀～13世紀にかけての掘立柱建物24棟、井戸21基、木棺墓3基を検出した。掘立柱建物・井戸・耕作地がまとまりで検出でき、漁撈具の出土と合わせ、海のそばで半農半漁の生活をしていた人々の集落跡であると言える。							

二葉町遺跡発掘調査報告書 第14～21次調査
-新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う-

2008年3月31日

発行 神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL 078-322-6480
印刷 デジタルグラフィック㈱
神戸市中央区弁天町1-1
TEL 078-371-7000